

北谷王神ノ木古墳
塚 本 古 墳

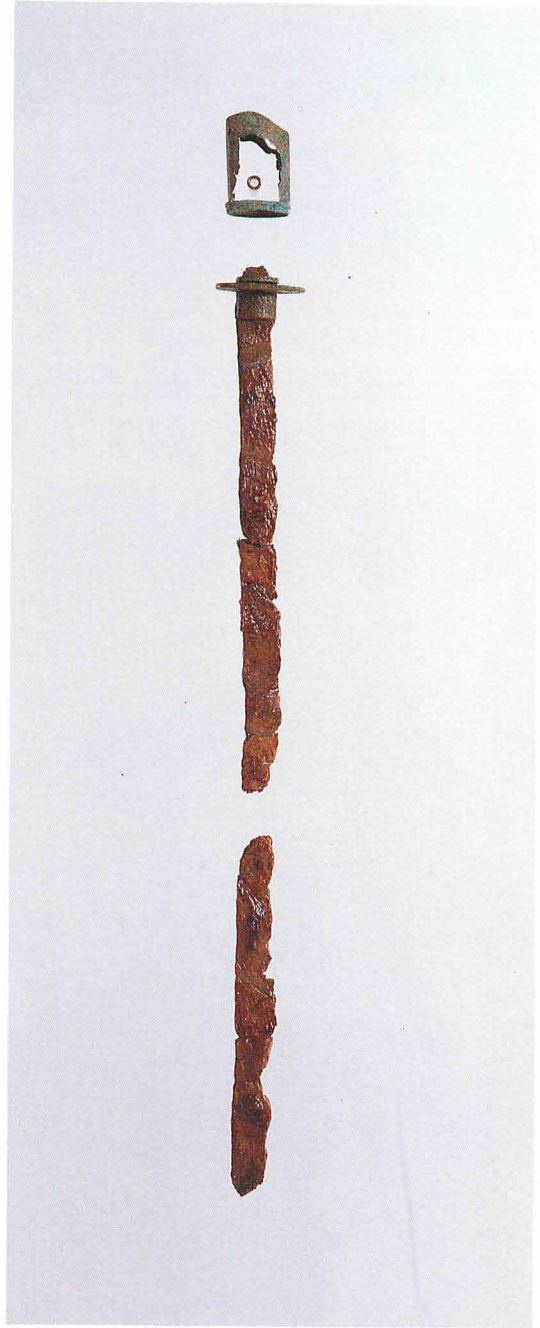
1991

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター

北谷王神ノ木古墳
塚 本 古 墳

1991

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター



卷頭図版 塚本1号墳出土圭頭大刀

序

北谷王神ノ木古墳、塚本古墳は、松山市北部域の丘陵地帯に営まれた後期古墳であります。なかでも、塚本1号墳においては、松山平野では初例の圭頭大刀や、挂甲といった重要な遺物を出土しており、かねてより調査成果の公表が待たれていたところであります。

近年、増加の一途をたどる諸開発にともなう発掘調査に追われ、整理作業もままならぬなかで、調査体制の一層の充実をはかるべく、平成元年秋、埋蔵文化財調査研究の拠点として松山市立埋蔵文化財センターが発足いたしました。これを契機に、かねてより懸案の両古墳の調査報告書を刊行できますことは、また従来とは趣を異にした喜びがあるように思います。

本書に収められた成果や資料が、郷土の古代史のみならず、広く斯界の学術研究の一助になりますことを願ってやみません。

最後に、調査ならびに本書の刊行にあたり、多大なご理解、ご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げる次第であります。

平成3年3月31日

松山市教育長
池田尚郷

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会が行った、松山市福角町所在の北谷王神ノ木古墳、塚本古墳の発掘調査報告書である。

2. 本書の刊行にあたっての組織は次のとおりである。

刊行主体	松山市教育委員会	教育長	池田 尚郷
		文化教育課長	渡部 忠平
総括	松山市立埋蔵文化財センター	所 長	森脇 將
		調査係長	西尾 幸則
		調査主任	田城 武志
		調査主事	栗田 正芳
担当		調査員	栗田 茂敏

3. 各調査の組織は、各々、経過の項に「調査組織」として記した。

4. 遺構、遺物の実測と製図は、栗田茂敏、池田学、松村淳、宮内慎一、宮崎泰好が行った。遺物の撮影は、西尾幸則、大西朋子が担当した。

5. 使用した方位は、すべて磁北である。

6. 金属製品の保存処理は、池田学が担当した。

7. 本書の執筆、編集は、栗田茂敏が行った。

8. 本書作成にあたり、松山市福角町 井上三郎氏から北谷王神ノ木1号墳出土遺物の寄贈を受けた。また、岡山県古代吉備文化財センター 正岡睦夫氏には図面の転載を快くお許しいただいた、記して謝意に代えたい。

9. 本書にかかわる記録、遺物は松山市立埋蔵文化財センターに収蔵、保管されている。

本文目次

北谷・権現古墳群をめぐる環境	1
----------------	---

北谷王神ノ木古墳

〔I〕 調査の経過	5
1. 調査に至る経緯	5
2. 調査歴	5
3. 調査組織	6
〔II〕 調査の成果	7
1. 立地と現状	7
2. 遺構	8
3. 遺物	14
〔III〕 まとめ	24

塚本古墳

〔I〕 調査の経過	27
1. 調査に至る経緯	27
2. 調査組織	27
〔II〕 調査の成果	28
1. 立地と現状	28
2. 1号墳の調査	29
①遺構	29
②遺物	37
3. 2号墳の調査	54
①遺構	54
②遺物	59
〔III〕 まとめ	64

目 次

図1 周辺の遺跡分布	2
北谷王神ノ木古墳	
図2 削平の現況	6
図3 王神ノ木古墳の位置	7
図4 墳丘実測図	9
図5 1号墳丘断面	10
図6 1号墳石室平面	11
図7 1号墳石室床面状況	12
図8 1号墳石室展開図	13
図9 1号墳石室内遺物出土状況	15
図10 1号墳出土須恵器(1)	17
図11 1号墳出土須恵器(2)	19
図12 1号墳出土鉄器(1)	21
図13 1号墳出土鉄器(2)	22
図14 1号墳出土馬具	23
図15 1号墳出土玉類	23
塚本古墳	
図16 塚本古墳の位置	28
図17 1号墳主体部と周溝	29
図18 1号墳石室平面	31
図19 1号墳玄室床面状況(1)	32
図20 1号墳玄室床面状況(2)	33
図21 1号墳石室展開図	34
図22 1号墳石室内土器類出土状況	36
図23 1号墳玄室内遺物出土状況	38
図24 1号墳石室内出土遺物(1) (須恵器・土師器・瓦器)	39
図25 1号墳石室内出土遺物(2) (須恵器)	41
図26 1号墳石室内出土遺物(3) (圭頭大刀)	43
図27 1号墳石室内出土遺物(4) (鉄器)	44
図28 1号墳石室内出土遺物(5) (鉄器)	45
図29 1号墳石室内出土遺物(6) (挂甲小札)	46
図30 1号墳石室内出土遺物(7) (挂甲小札)	47

図31	1号墳石室内出土遺物(8)	(挂甲小札)	48
図32	1号墳石室内出土遺物(9)	(装身具)	49
図33	1号墳周溝出土須恵器		51
図34	1号墳周溝出土石器		52
図35	2号墳石室平面		55
図36	2号墳玄室床面状況		56
図37	2号墳石室展開図		57
図38	2号墳石室内遺物出土状況		58
図39	2号墳石室内出土遺物(1)	(須恵器)	60
図40	2号墳石室内出土遺物(2)	(須恵器・土師器)	62
図41	2号墳石室内出土遺物(3)	(鉄器・装身具)	63

図 版 目 次

巻頭図版 塚本1号墳出土圭頭大刀

北谷王神ノ木古墳

- 図版 1 北谷王神ノ木古墳 1 調査地遠景 (南より)
調査前1号墳丘 (西より)
- 図版 2 北谷王神ノ木古墳 2 1号墳石室露出状況 (横口部)
1号墳全景 (西より)
- 図版 3 北谷王神ノ木古墳 3 1号墳横穴式石室 (南より)
1号墳石室床面 (横口部より)
- 図版 4 北谷王神ノ木古墳 4 1号墳横穴式石室 (天井石撤去)
1号墳横穴式石室 (墓道より)
- 図版 5 北谷王神ノ木古墳 5 1号墳横穴式石室 (西側壁)
1号墳横穴式石室 (東側壁)
- 図版 6 北谷王神ノ木1号墳出土遺物 1 石室出土須恵器
- 図版 7 北谷王神ノ木1号墳出土遺物 2 石室出土須恵器
- 図版 8 北谷王神ノ木1号墳出土遺物 3 石室出土須恵器・玉・鉄製品

塚本古墳

- 図版 9 塚本古墳 1 調査地全景 (北東より)
調査地全景 (南より)

- 図版10 塚本古墳 2 1号墳石室検出状況（南西より）
 1号墳石室内遺物出土状況（右袖部）
- 図版11 塚本古墳 3 1号墳石室床面の検出（西より）
 1号墳玄室奥床面石敷
- 図版12 塚本古墳 4 1号墳大刀出土状況(1)
 1号墳大刀出土状況(2)
- 図版13 塚本古墳 5 1号墳圭頭出土状況
 1号墳刀装具出土状況
- 図版14 塚本古墳 6 1号墳挂甲札出土状況
 1号墳周溝遺物出土状況
- 図版15 塚本古墳 7 1号墳横穴式石室（羨道部より）
 1号墳横穴式石室全景（南西より）
- 図版16 塚本古墳 8 2号墳石室の検出（南より）
 2号墳脚付子持広口壺出土状況（北西側壁部）
- 図版17 塚本古墳 9 2号墳遺物出土状況（玄室奥）
 2号墳遺物出土状況（南東側壁部）
- 図版18 塚本古墳10 2号墳石室床面の検出（南西より）
 2号墳玄室床面石敷（羨道部より）
- 図版19 塚本古墳11 2号墳横穴式石室全景（北より）
 2号墳横穴式石室全景（奥壁側より）
- 図版20 塚本古墳12 2号墳玄室（羨道部より）
 2号墳玄門部（玄室より）
- 図版21 塚本 1号墳出土遺物 1 石室出土須恵器
- 図版22 塚本 1号墳出土遺物 2 石室出土須恵器
- 図版23 塚本 1号墳出土遺物 3 石室出土須恵器・土師器・瓦器
- 図版24 塚本 1号墳出土遺物 4 石室出土鉄製品
- 図版25 塚本 1号墳出土遺物 5 石室出土圭頭大刀
- 図版26 塚本 1号墳出土遺物 6 石室出土挂甲小札
- 図版27 塚本 1号墳出土遺物 7 石室出土挂甲小札・装身具
- 図版28 塚本 1号墳出土遺物 8 周溝出土須恵器
- 図版29 塚本 1号墳出土遺物 9 周溝出土石器類
- 図版30 塚本 2号墳出土遺物 1 石室出土須恵器
- 図版31 塚本 2号墳出土遺物 2 石室出土須恵器
- 図版32 塚本 2号墳出土遺物 3 石室出土須恵器・土師器・鉄製品・装身具

■ 北谷・権現古墳群をめぐる環境 ■

1. 地理的環境

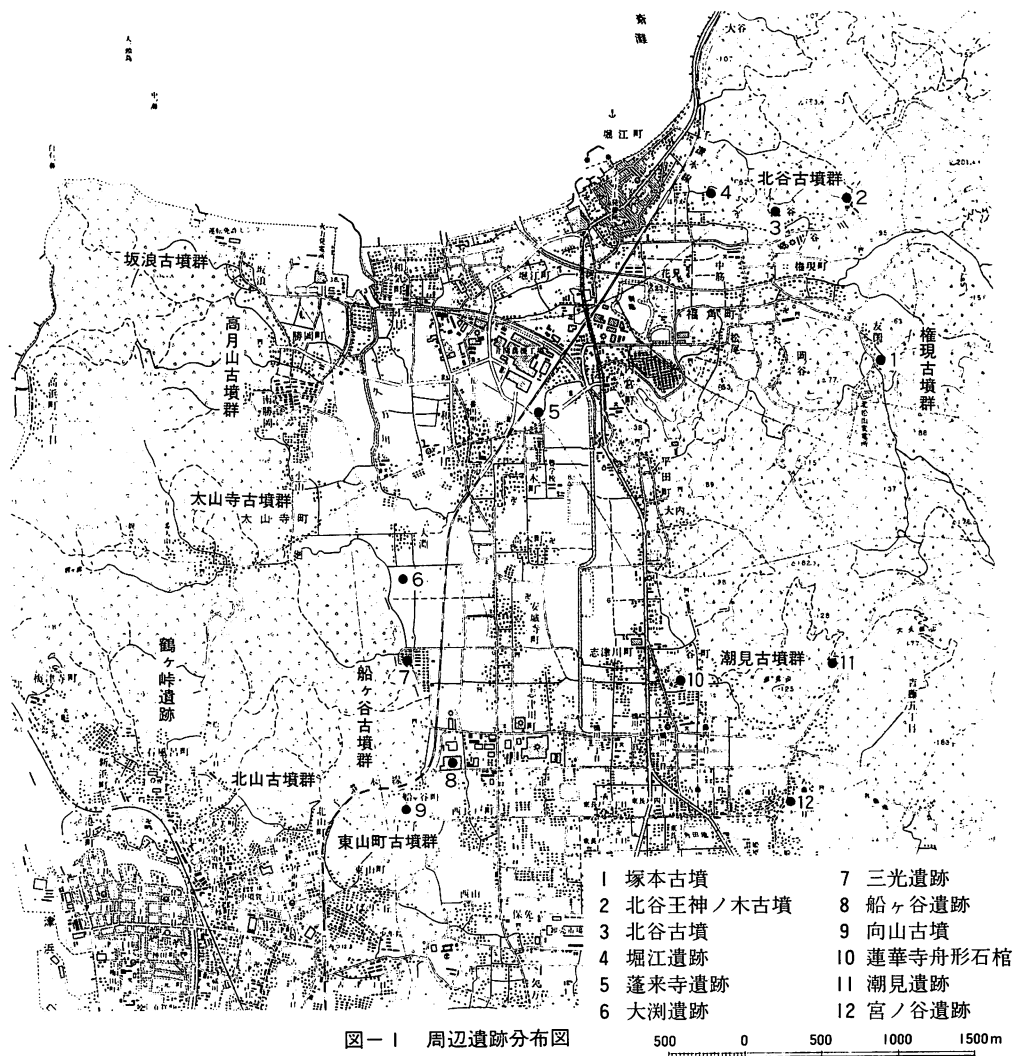
松山平野北部は、現在平野中央部を北東から南西方向に流れる石手川の旧流路によって形成された、地溝性の沖積低地である。南北約7km、東西約2kmにわたるこの低地を挟んだ西側には太山寺山塊、東側には高縄山系がひろがる。北谷・権現古墳群は、この高縄山系の山麓に位置し、松山平野の北東端部を限る丘陵の一角を占める。この北谷、福角、権現地区の山麓部は、高縄山系に源を発する中小の河川により開析されたいくつかの小谷によって入り組んだ地形を呈している。山麓を開析したこれらの中小河川は、半径約1kmの小扇状地を形成しつつ約2.5km西流した後、堀江湾に注いでいる。この沖積地には、現在2本の主要な河川が約300mの間隔をおいて平行して西流している。北側の郷谷川は、北方の山中に源を発し、大きく右方向にカーブをとって平野部を西流しており、この郷谷川右岸の山麓地一帯に北谷古墳群は分布している。一方、南側の権現川は、南方の山中より発し、左方向にカーブをとり、郷谷川に平行して平野部を西流している。この権現川がカーブをとる手前、開析谷が開け始めた付近の兩岸の山麓部に権現古墳群は所在する。両古墳群は、先述の小扇状地の扇頂部の小谷を挟んで500m足らずの距離をおいて南北に分布していることになる。なお、両古墳群の所在する高縄山系は、その大部分を中世代の領家帯粗粒花崗閃緑岩によって構成される花崗岩地帯であり、この地域の古墳の石室には構築材としてしばしば用いられている。^②

2. 歴史的環境

『和名抄』によれば、古代伊予国は14郡からなり、そのうち和気、温泉、久米、伊予の4郡と浮穴郡の一部が松山平野にあったとされている。ここでは、両古墳群が所在する松山平野北部、旧和気郡域を中心に遺跡分布、ならびに史料を概観してみたい。

この地域に遺跡、または遺物として人々が生活の痕跡を残し始めるのは、現在確認されているところでは縄文時代後期以降である。採集資料であるが、馬木町所在の蓬来寺遺跡では六軒家Ⅰ式とされる擦消縄文系後期土器の出土が伝えられている。縄文晩期後半には、沖積低地部分に定住生活が確実に営まれる。船ヶ谷町所在の船ヶ谷遺跡では、晩期突帯文に先行する時期の河川、杭列、住居址とともに多量の土器、石器、木製品等の遺物を出土している。^④突帯文土器の段階になると、低地部において稲作の開始をうかがわせる遺物の出土をみることができる。太山寺町大淵遺跡では、突帯文土器と共伴して、丹塗り彩文壺をはじめとする壺類、磨製石庖丁、石鎌等が沼沢地縁辺部に投棄された状態で出土している。なお、この大淵遺跡では、下位の砂層より縄文後期中葉から突帯文期に至るまで混淆状態ではあるが各期の遺物を出土している。大淵遺跡周辺で開始された稲作は、それほどの時をおかずして

松山平野各所に拡まったものと思われるが、弥生時代以降、北部地域の沖積低地に営まれた集落は現在のところ確認されていない。低地で弥生時代の遺物の出土が確認されているのは、前・後期の包含層を検出した三光遺跡、前期前葉の重弧文小型壺を出土した堀江遺跡が知られているが、いずれも遺構等の詳細は不明である。居住域の主体は、この低地部周辺の微高地や低丘陵部に営まれているものと思われ、本古墳群と同様高縄山系西麓に属する緩斜面には、前期末から中期の潮見遺跡、中期から後期の宮ノ谷遺跡が所在する。また、近年調査が行われた山越Ⅱ遺跡は、山麓緩斜面と低地部との中間に位置する微高地であるが、この遺跡において、前期中葉の土器や柳葉形磨製石鏃、板鍬等を出土する溝が検出されており、水田等の生産域として松山平野北部の沖積低地の利用が行われていた可能性は高いものといえる。一方、低地西方の太山寺山塊では石風呂町の低丘陵上、鶴ヶ峠遺跡において前期末の



貯蔵穴群が検出され、炭化米やリョクトウ等、豆科植物の炭化遺物が出土している。

弥生時代同様、古墳時代の集落もこの地域では知られていないが、古墳そのものは丘陵上に数多く営まれている。勝岡町高月山古墳群^⑫は7基の古墳で構成されるが、そのうちの1基、高月山2号墳は水銀朱塗布の箱式石棺を主体部とする小長方墳で、棺外副葬品として墓壙掘り方内に鉄剣、鍬先等の鉄器を持ち、また、周溝内より布留I式期併行とされる土師壺、銅鏃1点を出土しており、この地域では最も古い時期の古墳である。この太山寺山塊、勝岡町周辺では赤子谷古墳、坂浪古墳群^⑬といった箱式石棺を主体部とする古墳が良く知られている。坂浪古墳群の中の1基、塔ノ口山古墳^⑭では、内行花文鏡、画像鏡の2面の舶載鏡片を出土しているが、古墳そのものの詳細は明らかではない。同じく太山寺山塊には、北山古墳群、東山町古墳群、太山寺古墳群、鶴が峠古墳群^⑮が分布しており、このうち石風呂町所在の鶴が峠古墳群^⑯では、5世紀末から7世紀中葉までの20数基の古墳が調査されている。東山町古墳群中の向山古墳は削平のため主体部は不明、墳形も直径26mの円墳になるのか、前方部を持つのか、必ずしも明らかではないが、墳丘裾部より円筒埴輪とともに、蓋、鶏、馬等の形象埴輪を出土しており、5世紀末頃に位置づけられる。一方、高縄山系西面の古墳を概観すると、当古墳群のほかに、潮見古墳群、堂ヶ谷古墳群^⑰等が分布する。このうち、潮見古墳群内に所在する谷町室岡山蓮華寺境内には、出土状況等不明ながら、阿蘇溶結凝灰岩を削りぬいた舟形石棺の身部があり、県内唯一の削りぬき式石棺の例である。北谷・権現古墳群は、昭和53年松山商科大学（現松山大学）史跡研究会によって分布調査が行われ、北谷丘陵に18基、権現丘陵に8基の古墳が確認されている。北谷古墳群のうちでは、1基の後期古墳、市指定文化財北谷古墳^⑱が知られている。花崗岩、安山岩の巨石による残存長8.1mを測る大型の両袖型横穴式石室を主体部とするが、墳丘盛土は流失し、天井石が露出した状態であり、径18mの円墳とも言われるが、正確な墳形、墳丘規模は不明である。開口は古く、遺物もすべて散逸しているため、正確な時期比定はできないが、報告によれば、石室規模、構築方法、構造等から6世紀末頃の年代を与えられている。

冒頭に記したように、古代松山平野は5郡から成り、北谷・権現古墳群の位置する松山市北部域は「和気郡」域に属している。「和気郡」は、愛媛大学松原弘宣氏によれば、長岡京出土木簡、『日本靈異記』の記述により、7世紀末には既に存在していたという。『日本書紀』にみえる「伊予別君」の存在も、承和年間の円珍によるとされる『和気氏系図』^⑲により、8世紀初頭から4代遡って確認することができる。また、『法隆寺縁起并流記資財帳』には、和気郡内に法隆寺の庄が2箇所存在していたと記載されている。古代和気郡に関する文字資料は以上のように決して多いものとはいえない。しかし、これらの資料に垣間見える地方豪族層の存在、生産力の背景抜きではこれらの古墳群の成立を理解することはできない。また、中世以降、風速郡（現在の北条市域）高縄山城に本拠を置く河野氏（後に松山平野内の網淵城、湯築城へと移る）の重要な港湾として位置し、度々合戦の場ともなった和気、堀江湾が

古代においても海上交通の要衝として重要な位置を占めていたであろうことも背景として考えておく必要がある。

以降、和気郡は明治30年、郡制施行にともなう郡の廃置分合により温泉郡に吸収されるまで存続、昭和15年の合併により松山市に編入され現在に至っている。現在、松山平野内での米、柑橘の重要な一生産地としての位置を占めている。

注

-
- ①平井幸弘 「松山平野、石手川扇状地の地形と沖積層」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』 1988
- ②『愛媛県地質図』 愛媛地学会 1980
- ③『松山市史料集 第1巻 考古編』 松山市教育委員会 1980
- ④阪本安光 『松山市・船ヶ谷遺跡』 愛媛県教育委員会 1984
- ⑤「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備 第10集』1988において平井勝氏は瀬戸内東部該期の基準型式として谷尻式を提唱している。谷尻式は近畿滋賀里Ⅲb式、北部九州黒川式に併行するものであり、宮本一夫氏は「道後平野における弥生時代開始期の動向」『鷹子・樽味遺跡の調査』 1989中で、この谷尻式に対応する瀬戸内西部の基準型式として船ヶ谷をあてている。
- ⑥栗田茂敏「大瀨遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 1989 松山市教育委員会
- ⑦近年、弥生時代に大規模な集落が営まれる道後城北遺跡群や、来住台地周辺部において突帯文期の遺物の出土がみられている。
- ⑧長井数秋 「農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県教育委員会 1982
- ⑨『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』 松山市教育委員会 1987 従来「潮見ラドン温泉遺跡」あるいは、「吉藤ラドン温泉遺跡」と呼称されてきた遺跡を言う。
- ⑩栗田茂敏「吉藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 1989
- ⑪西尾幸則 「鶴が峠遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』 1986
- ⑫宮崎泰好 『高月山古墳群調査報告書』 松山市教育委員会 1988
- ⑬⑭⑮ 前掲注③文献
- ⑯⑰⑱ 『松山市埋蔵文化財包蔵地地図』 松山市教育委員会 1987
- ⑲西尾幸則 「鶴が峠古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』 愛媛県教育委員会 1986
- ⑳池田 学・宮崎泰好 「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松山市教育委員会 1989
- ㉑㉒ 前掲注⑯地図
- ㉓藤田憲司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報 第12号』 倉敷考古館 1976
- ㉔㉕岡野 保 『北谷古墳(墳丘・石室実測調査報告書)』 松山商科大学史跡研究会 1980
- ㉖㉗松原弘宣 『古代の地方豪族』 吉川弘文館 1988

北谷王神ノ木古墳

■ 北谷王神ノ木古墳 ■

〔I〕 調査の経過

1. 調査に至る経緯

王神ノ木古墳は松山市北部の丘陵上に位置し、松山市埋蔵文化財包蔵地地区による38番包蔵地、北谷古墳群内に所在する。昭和57年10月14日、この包蔵地内の丘陵において病院建設のための切土造成行為を発見、松山市教育委員会（以下、「市教委」という）は開発者に対し、工事の続行を一時中断せしめ、顛末書の提出等、文化財保護法違反行為に対する厳重注意を含めた行政指導を行うとともに、現況の調査を実施した。その結果、切土予定区域の丘陵尾根上に2基の円墳が遺存することを確認した。これらの古墳は、標高約93mの東西方向の稜線上に、隣接して造営されており、東側の1基を1号墳、西側を2号墳としたが、東方向からの切土は、既に1号墳丘の直近にまでおよんでいた。この調査結果をうけ、これらの古墳の処置をめぐる、市教委、開発当事者の両者間にて協議を行い、保存の可能性を探ったが、切土法面の確保上、1号墳のみは消滅を免れ得ないとの結論に達した。このため、市教委は急拠1号墳の記録保存を目的とした緊急発掘調査を行うことを決定し、再度、日程、経費等を含めた協議を行うとともに、法的措置の完了を経て、同年10月25日から約1ヶ月の日程で発掘調査を実施することとなった。

2. 調査歴

元地権者、井上三郎氏からの調査前の伝聞により、王神ノ木古墳は昭和43年に松山商科大学史跡研究会のメンバーを中心にして墳丘実測、1号墳石室内の実測調査が行われており、その際に石室内の遺物も持ち出され、井上氏の保管下にあることがわかった。調査成果は6枚のレジュメにまとめられているが、保存目的の実測調査ということもあり、墳丘構造等は課題として残されていた。また、「『北谷古墳（墳丘・石室実測報告書）』松山商科大学史跡研究会 1980」本文中に、王神ノ木上古墳として石室実測図が紹介されている。

3. 調査組織

所在地 松山市福角町字北谷64番地の3、82番地
調査期間 昭和57年10月25日～11月27日
調査面積 400㎡

調査主体 松山市教育委員会
教育長 西原多喜男
教育次長 森田富士弥
" 二神 貢
調査総括 文化教育課長 藤原 涉
" 補佐 坪内 晃幸
文化第二係長 大西 輝昭
調査指導 " 主任 西尾 幸則
" 調査員 池田 学
" 松村 淳
調査担当 " 栗田 茂敏

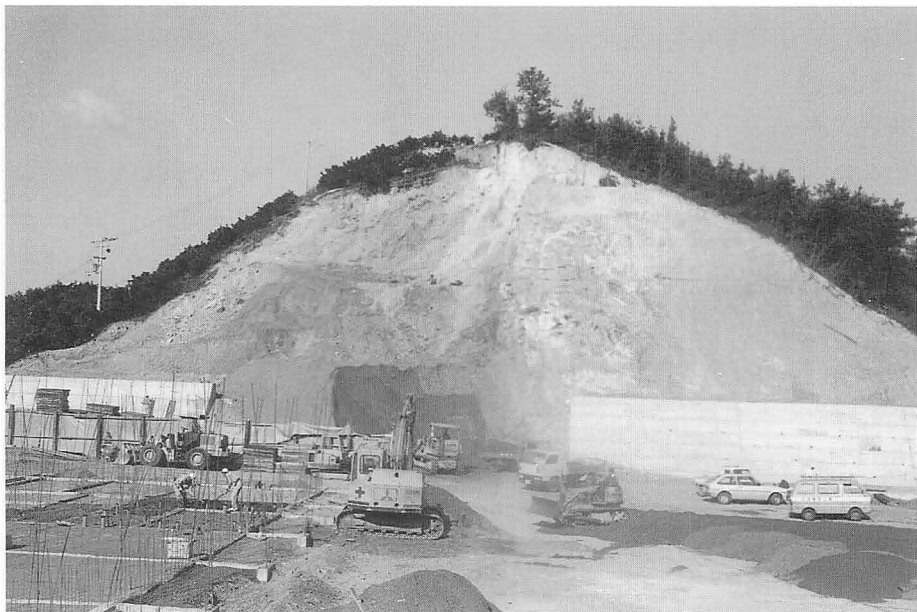


図-2 削平の現況

〔II〕 調査の成果

1. 立地と現状

王神ノ木1号墳、2号墳は、小扇状地から郷谷川沿いに約400m遡った地点、郷谷川の右岸の分岐丘陵端部、標高93m、山麓平地との比高差約50mの柑橘園内に位置する。古墳からの眺望は南にひらけ、南方には扇状地をとりまく分岐丘陵を、南西の扇状地、沖積低地を越えた先には太山寺山塊を望むことができる。堀江、和気の海岸線まで1.5kmと海岸線近辺に立地する古墳であるが、海への眺望よりも、むしろ眼下の扇状地を意識した占地となっている。尾根線は、いわゆる「馬の背」状を呈しており、幅の狭い尾根を挟んだ両斜面はかなり急峻である。冒頭にも述べたように、両古墳が所属する北谷古墳群中には、西方500mに所在する市指定文化財北谷古墳をはじめとして、確認されているだけでも18基の古墳が分布しているが、その実態は必ずしも明らかにはなっていない。

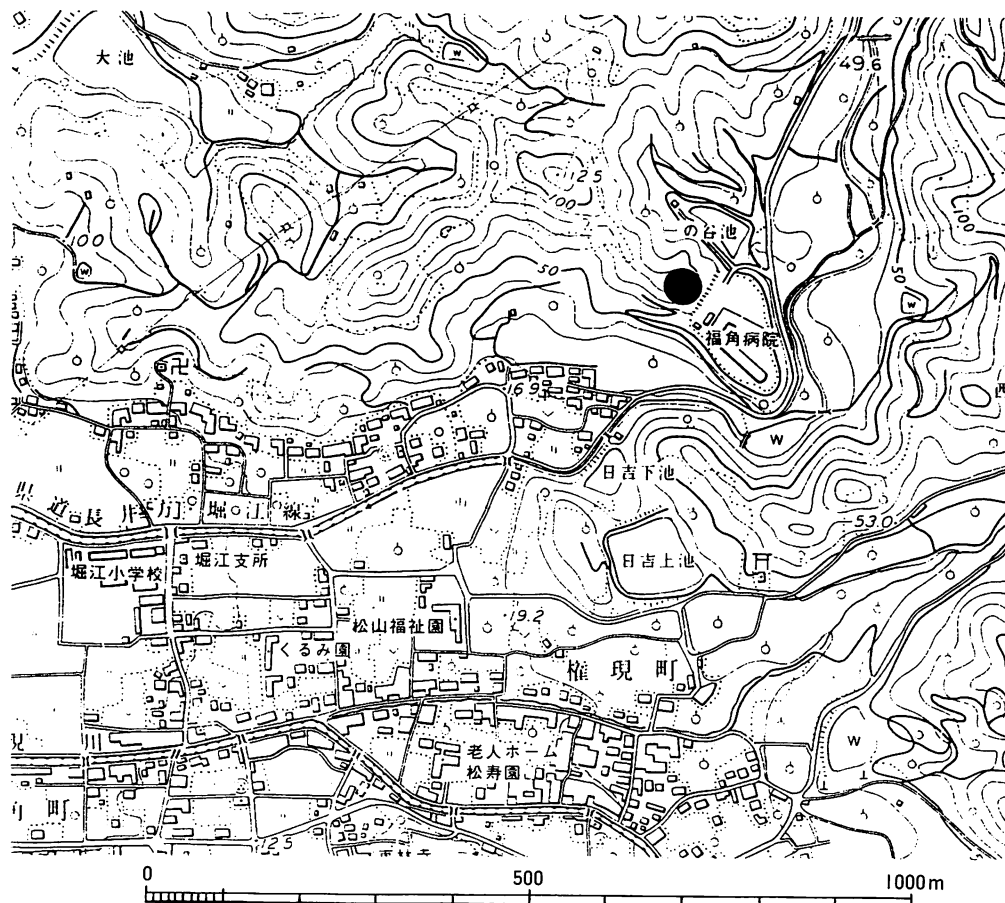


図-3 王神ノ木古墳の位置

調査地は柑橘園として利用されていたため、灌水施設や農道により墳形が改変されている。農道は尾根を若干南へ下って稜線に平行に走っており、1号墳・2号墳ともに墳丘南側を削平されている。1号墳丘南半に南北方向に掘削された幅0.6m、長さ3mの溝は正確に石室横口部に当っており、一部露出した横口部上部の天井石と、溝内に流入堆積した土砂との間の小さな隙間から石室内部が覗ける状態であった。この溝は、溝底に節抜きの竹筒を継ぎあわせたパイプを敷設して、開口後の石室内の排水に利用されており、調査の初期段階では盗掘攪乱坑として扱っていたが、後の検討により、墓道を再利用して開口後の日常的管理に供されていたものと判断するのが適切であろうとの結論を得ている。

2. 遺 構

墳 丘(図4・5)

1号墳丘は農道によって特に南側部分を削平されており、また、調査による周溝の検出もみなかったため、正確な墳丘規模の判断には困難を伴うが、南北軸における墓道端から墳丘北の盛土端の距離、東西軸での地山傾斜変換点間の距離、双方を勘案すれば直径約10mの円墳に復元されると推定できる。墳丘盛土は、天井石より約30～40cmの部分まで遺存しているが、緻密な版築によって積み上げられているとは言い難く、雑然としており、比較的軟弱である。馬の背状の丘陵尾根を削平して6×7m内外の平坦面を造り出し、更に墳丘西部を稜線に直交して切り、平坦面中央部に縦4m、横2m、深さ1.5mの石室掘り方を掘り、これらの掘削行為によって生じた土砂を盛ったものと思われる。

2号墳は、1号墳の西隣りに接して位置するが、計画変更による保存措置が講じられたため、今回の調査では墳丘実測のみを行った。1号墳同様、墳丘南面を農道によって削平されており、石室構築材の一部が露出している。1号墳と同程度の墳丘規模を持つ円墳であるが、1号墳との築造時期の前後関係を明確にすることはできなかった。

横穴式石室(図6～8)

1号墳の主体部は、主軸をN14°28'20"Eにとる横穴式石室である。石室長2.6m、幅1.3m、高さ1.2mで無袖型の石室である。50cm内外の塊石を横置きして腰石とし、それよりもやや小ぶりの塊石を横積みして側壁、奥壁を構築している。3壁ともに15cm程度持ち送られ、その上に4枚の天井石が横架されており、横口部上の1枚を除いた残り3枚は原位置をとどめている。横口部上の1枚は、開口時の閉塞石の抜きとりによってずれ込んだものと思われる。ちょうど手前側のつかい棒をはずされたようなかたちで南側に傾いていた。構築石材には、付近で入手容易な花崗岩、花崗岩質アプライトを用いている。閉塞石は横口部東壁付近に数個が残存するほかはすべて抜きとられていた。石室掘り方は、奥壁、側壁の天場レベル付近から地山を掘り込んでおり、盛り土を取り除いた状態でちょうど天井石が掘り方上面に頭を

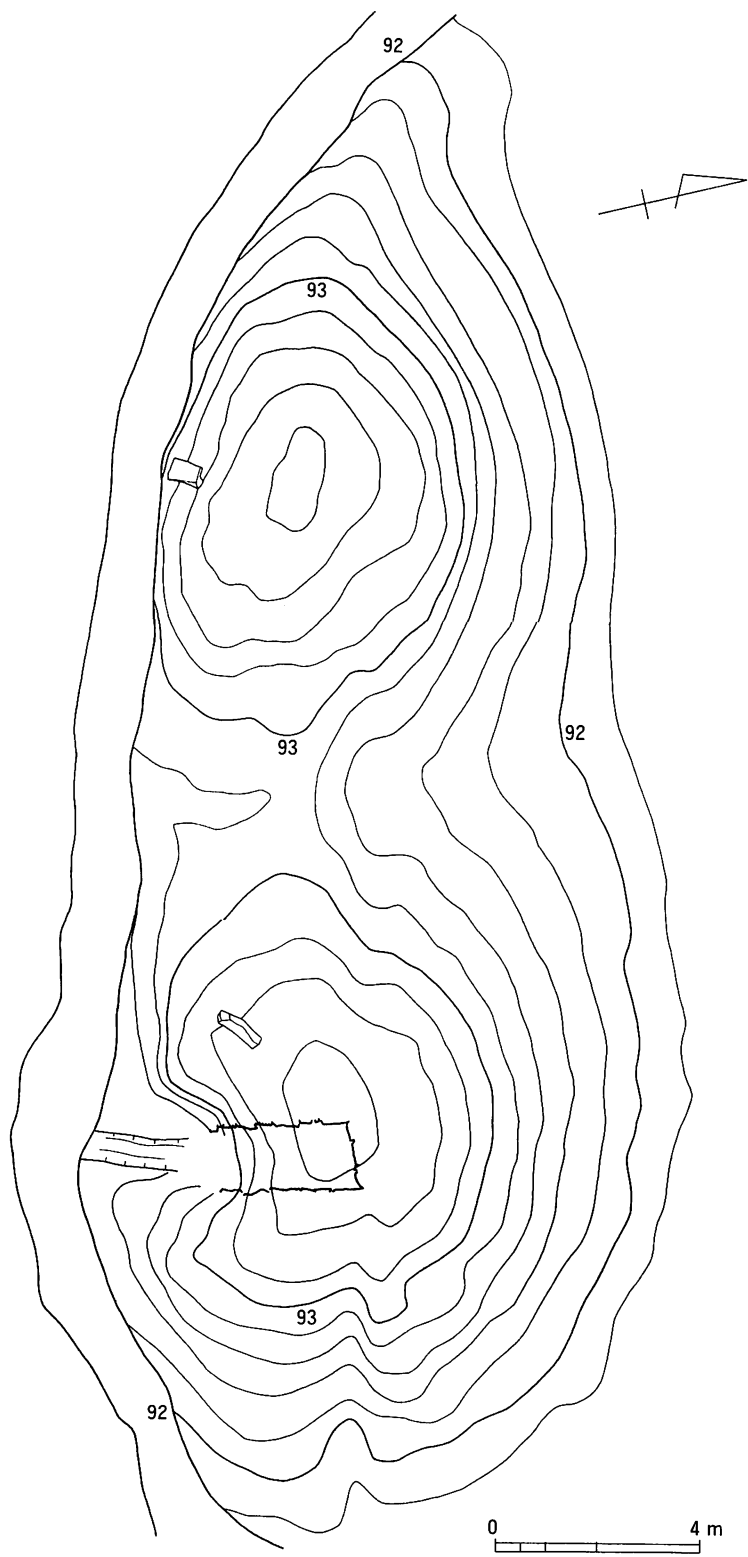


图-4 填丘实测图



图 1-5 1号墳丘断面

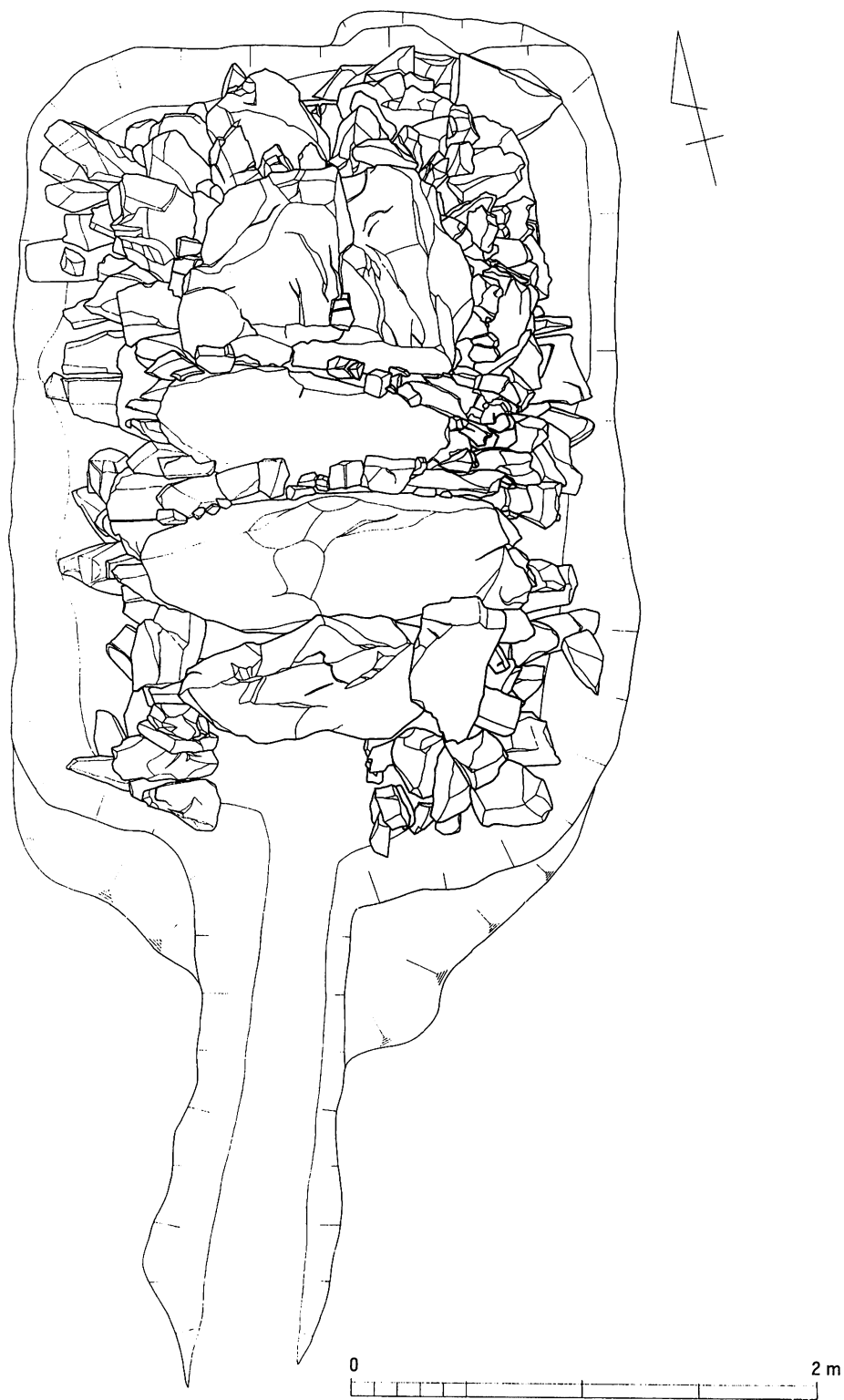


图-6 1号墳石室平面

----- 92.00



图-7 1号填石室床面状况

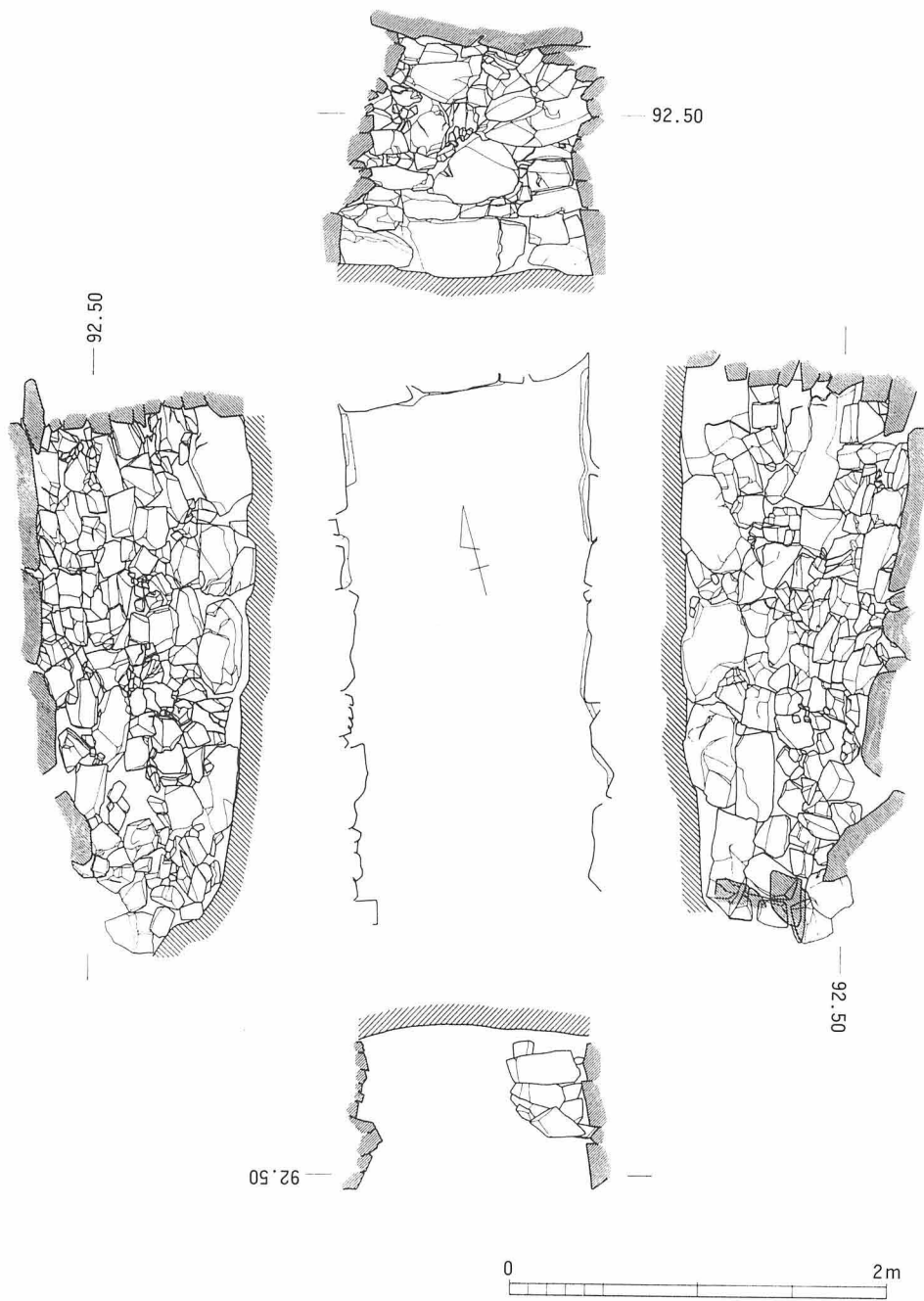


图-8 1号墳石室展開図

出す按配になるような比較的深い掘り方である。墓道は、隅丸長方形の石室掘り方の南辺中央部から南方向へ3 m、幅60cmの溝状に掘削されている。基底部は、幅30cm程度掘り込まれ、墓道沿いに節抜き竹筒を数本接続して排水暗渠としている。この暗渠は、開口後の日常的な管理により設置されたものである。調査の初期段階では、この墓道そのものも埋土が攪乱土であることから、暗渠設置に伴い掘削されたものと考えていたが、掘り方が不自然な二段掘りになること、また調査が進行するに及んで羨道の検出がみられず、石室掘り方の深さからみて横口部より石室内への進入が困難なこと等を総合的に判断して、石室構築時に掘削された墓道とするのが適切であり、暗渠は墓道を再利用して設置されたものと判断した。つまり、竪穴系の石室の一辺をとり除いた部位に素掘りの墓道が直接とり付く形態の竪穴系横口石室となる。

遺物の出土状況(図9)

石室床面には2～5 cm大の河原石が敷かれているが、昭和43年の前調査の段階もしくはそれ以前に攪乱されており、埋葬時の状態をとどめているとは言えない。今回の調査においては、石室床面より刀子、鈍、鎌の小破片をそれぞれ1点、硬玉製勾玉半截品1点、河原石水洗時にガラス小玉を6点出土したのみであるが、前調査で須恵器23点、鉄器20点以上、また今回の調査で出土した勾玉と同一個体の半截品1点を出土している。これらの遺物は元地権者のもとに保管されており、実測、写真撮影、鉄器の保存処理等必要とされる処置を講ずることができた。また、前調査時の出土状況図も公にされており、図によれば須恵器のほとんどは閉塞部直近の西隅に集中して置かれている。玄室中央部より奥に1～4のナンバーを付されて散存している遺物は、調査担当者が別に簡単な実測図を貼付しており、特定することができる。1は広口壺、2、3は坏身、4は蓋である。順に本報文中の24、12、8、14に相当する。ところで、石室内の須恵器群は坏蓋6、身6、有蓋短頸壺3、蓋2、提瓶2、短頸壺2、壺2個体といったように各器種2個体を単位とした石室内でのセット関係がほぼ完結している。つまり、2、3の坏身とセットになるべき蓋、4の蓋とセットになるべき短頸壺は、横口部の一括遺物群中に存する。また、これらの遺物は型式的に若干の新古はあるにしても同一型式の範疇でとらえられるものであり、したがって古くから開口していることに起因する石室内での遺物の二次的な移動はあったにせよ、追葬を認め得る出土状況ではない。

3. 遺物

今回の調査では、鉄器3点、ガラス小玉6点、勾玉半截品1点を出土したのみであるが、昭和43年の調査で石室内より須恵器23点、鉄器20点以上、馬具1点、本調査出土の勾玉と同一個体の半截品1点、また、墳丘表採品として須恵器坏身片1点を出土している。このうち鉄器の小片は銹化著しく、実測可能なものは13点のみであった。以下、まとめて記述する。

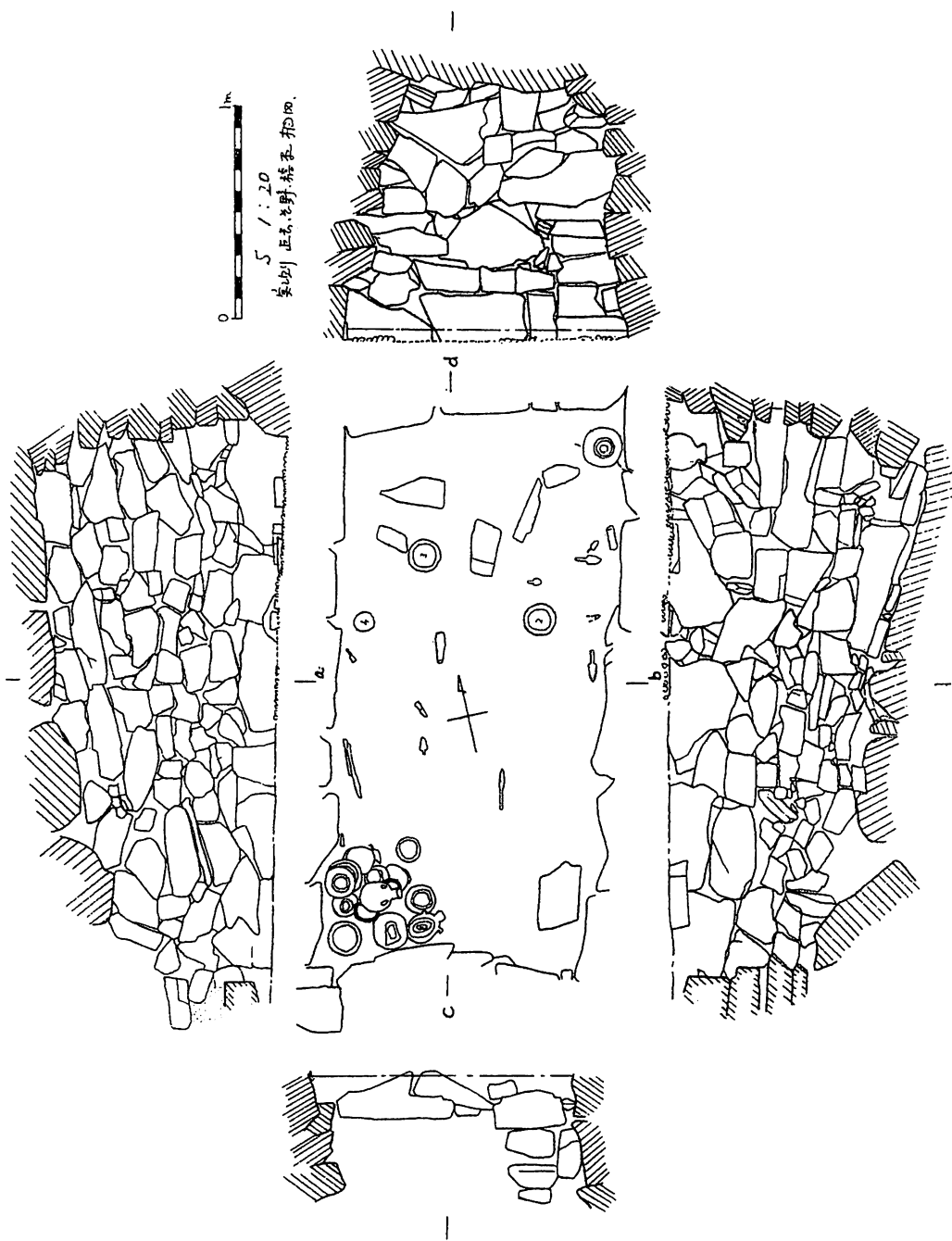


図-9 1号墳石室内遺物出土状況
 (松山商科大学史跡研究会レジュメ1968より)

●須恵器（図10・11）

石室内出土の須恵器は23点、いずれも完形または完形に近い。14の坏身のみは墳丘表採品である。

●坏蓋（図10-1～6）

1～3は口径14.1～14.8cm、器高4.0～4.8cmを測る。1・3の天井部と口縁部との境には鈍い稜が認められるが、2には認められない。回転ヘラ削りは1では天井部全面に施されるが、2・3ではヘラ削りの範囲は狭い。特に2は最も狭く、粗雑である。削りの方向はいずれも逆時計まわりである。口端部はすべて丸くおさめるが、1の端部内面には不明瞭な沈線状が巡っている。なお、3の天井部内面には直線撫でがみられる。

4～6はやや大型になり、口径15.3～16.3cm、器高4.7～5.4cmを測る。4の天井部と口縁部の境には凹線が、5には鈍い稜が認められるが、6では境界が不明瞭である。回転ヘラ削りは天井部 $\frac{2}{3}$ 程度の範囲に施される。5が時計方向、4・6が逆時計まわりである。いずれも口端部内面に段ないしは稜を持つ。5・6は焼成があまり乳白色を呈している。

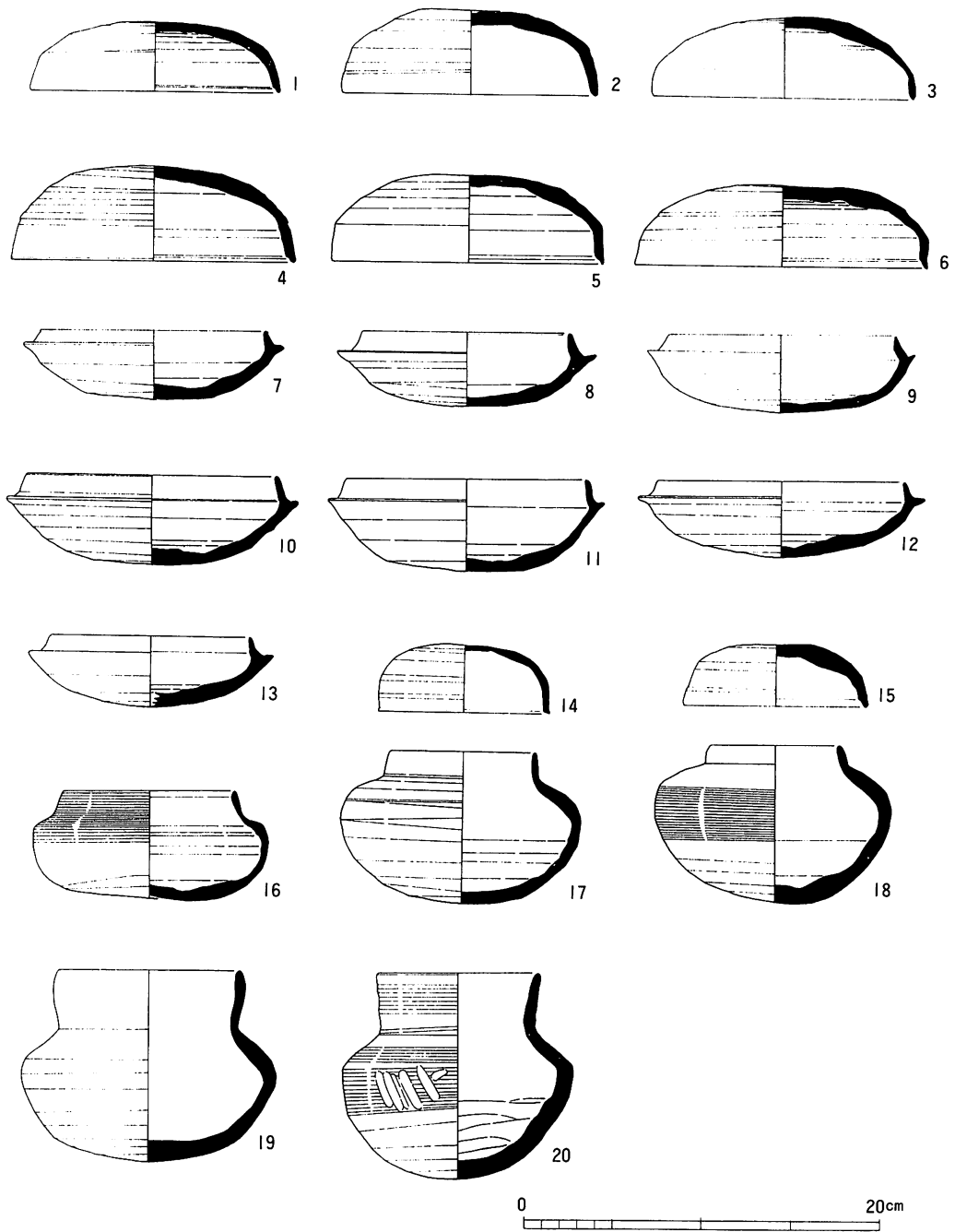
●坏身（図10-7～13）

まず石室内出土の坏身から記述する。7～9は口径11.8～12.8cm、器高3.9～4.5cmを測る。7は水平に近い受部に内傾気味の若干短かい立ちあがりを持つ。立ちあがり端部は僅かに外方へ折り曲げられ丸くおさめられている。8は斜め上方に伸びる受部に内傾する長いめの立ち上りを持ち、端部を丸くおさめる。9の受部も斜め上方に伸び、内傾する立ち上りは端部を尖り気味におさめられている。それぞれ体部の $\frac{3}{4}$ 程度の部分まで回転ヘラ削りされているが、8が最も入念で比較的シャープに削られている。7の削りは粗雑で、底部は未調整のまま切り離し痕が残されている。9の削りは3点の中では最も広範囲であるが、削りそのものは浅い。削りの方向はすべて逆時計回りである。

10～12は上述の3点にくらべてやや大型である。口径13.8～14.1cm、器高4.3～5.2cmを測る。いずれも受部は水平に近く、10・11の立ちあがりは若干長めで直立気味となる。12はこれらよりも短かく内傾気味の立ちあがりを持つ。端部はすべて丸くおさめられている。回転ヘラ削りは体部の $\frac{2}{3}$ 程度の範囲に施される。10・11の削りにくらべると12の削りは比較的浅く、底部にはヘラ切り離し痕が部分的に残っている。11が時計回り、10・12は逆時計回りに削られている。3点ともに焼成があまり乳白色を呈している。

前回調査の出土状況図貼付の実測図には、2-9、3-7、5-11、6-12がセットとされているが、状況図で見るとは石室内での二次的な移動後の状況であり、本来のセット関係は失われているかもしれない。ただし、5と11に関しては、それぞれ削りの方向が唯一時計回りの2点であること、焼成のあまさからくる同様の色調、胎土からみて、本来のセットであることはほぼ間違いない。

墳丘表採品13は約 $\frac{1}{2}$ の破片である。口径11.3cm、器高4.0cmを測る。水平に近い受部に内



图一10 1号填出土須恵器(1)

傾した立ちあがり、端部を尖り気味におさめている。体部の $\frac{1}{2}$ に時計回りの回転ヘラ削りが施されており、焼成は堅緻である。

●蓋 (図10-14・15)

14は口径9.7cm、器高3.8cm、15は口径10.2cm、器高3.5cmを測る短頸壺の蓋である。14の口縁部がほぼ垂直に接地するのに対して、15は若干ハの字状にひろがる。14の口端部は稜を持ってやや内側に傾いた面をなすが、15では丸くおさめられ内面に鈍い段を持つ。15では天井部のみを逆時計回りに浅く回転ヘラ削りを施している。15には削りの痕跡がみられず、天井部にはヘラ切り痕が残る。

●有蓋短頸壺 (図10-16~18)

扁平で口径の大きい16と、半球形の体部に短かく直立する口縁部を持つ17・18とがある。16は口径9.8cm、体部最大径13.3cm、器高6.2cmを測るが、底部、口縁部に焼けひずみが見られる。平坦な底部に肩の張った扁平な体部から内傾する若干長めの口縁部が立ち上る。口端部は丸く仕上げられている。逆時計回りのヘラ削りは底部にのみ行われ、肩部付近には浅いカキ目を施されている。17は口径8.3cm、体部最大径13.6cm、器高8.6cm、18はそれぞれ7.3cm、13.3cm、9.6cmを測る。17の口縁部は直線的で垂直に立ちあがり、端部を丸くおさめる。18では内湾してやや厚ぼったくなり、やはり口端部は丸くおさめられている。双方ともに底部から体部の中位よりやや下ったあたりまで逆時計方向の回転ヘラ削りを施される。18の体部最大径部付近にはカキ目が観察される。

●短頸壺 (図10-19・20)

扁球形の体部から内湾する口頸部が立ちあがる19と、半球形の体部から直線的に立ちあがる口頸部を有する20とがある。19は口径10.4cm、体部最大径14.5cm、器高10.9cm、20は順に9.1cm、13.0cm、11.7cmを測る。双方ともに底部から肩部までの中間付近の範囲を回転ヘラ削りされている。削りの回転方向は19は逆時計、20は時計回りである。19の底部内面は不定方向の直線撫で、他の部位は横撫で調整されている。20では外面の削り以外の部分は、粗いカキ目を施され、内面は横撫で調整されているが、体部下半は指で搔きとったように粗く撫でられている。

●提瓶 (図11-21・22)

鉤状の把手を持つ21とボタン状の円板貼付の22とがある。21は口径5.7cm、器高19.6cm、体部最大径15.8cm、体部最大厚10.0cmを測る。体部正面形は円形、側面形は片面が凸面に、一方が平坦になる。口頸部は直線的に外方へ開いて端部を丸くおさめる。凸面中央部を粘土円板でふさいで成形し、体部全面に逆時計回りに渦巻状のカキ目を施している。平坦面側底部付近に「メ」字状のヘラ記号が刻まれている。22は口径4.6cm、器高18.2cm、体部最大径14.6cm、体部最大厚9.7cmを測る。体部正面形は円形、側面形はほぼシンメトリーな楕円形である。体部全面に逆時計回りのカキ目を施されている。外反して立ちあがる頸部は口縁部に至って

内湾し、端部を丸くおさめる。口縁部外面に1条の浅い凹線状が観察されるが施文を意図したのではなく、横撫での際についたものである。

●壺 (図11-23・24)

広口、短頸の2点である。23は口径14.0cm、器高17.0cm、体部最大径17.7cmを測る。半球形の体部に、外反して開く短い口頸部を持つ。口端部は若干下方に肥厚して丸くおさめられる。外面体部中位以下は平行叩き、以上は口端部を除いてカキ目を施される。外面の叩きに対応する内面には同心円状の叩き目が、その他の部位は横撫で調整されている。24は口径11.4cm、器高16.1cm、体部最大径18.5cmを測る。若干扁球形を呈する体部に外反する短い口頸部を持つ。外面体部最大径部から肩部付近に看取される平行叩き目は、その上を横撫でによって撫で消され不明瞭である。体部下半の調整は、器表面摩滅のため判然とし難いが、ヘラ削りの後撫でられているものと思われる。内面は横撫でで調整されている。底部には押し出しによる圧痕がみられる。

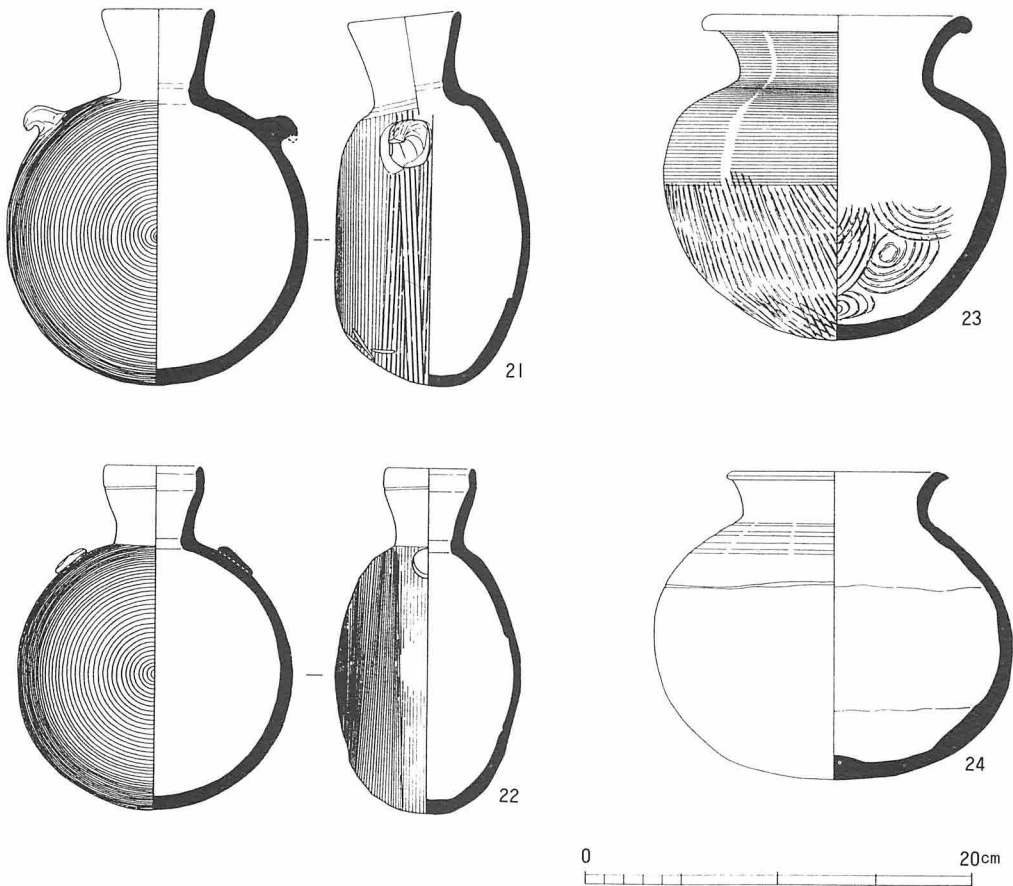


図-11 1号墳出土須恵器(2)

●鉄器 (図12・13)

26・32・33が今回の調査での出土遺物で、他は前調査出土である。

●鉄鏃 (図12-25~30)

25は鑿頭式の鏃身部で基部以下を欠失している。残存長7.2cmを測る。26は尖根式鏃の基部の基部に近い小片である。断面四角の基部に木質が付着している。27・30は腸袂式鏃である。30は遺存状況良好で、基部に樹皮や木質が残存している。残存長14.2cmで基部端を欠失するが平根鏃である。27は30よりも少し小ぶりです。シャープな印象を与える。逆棘部は長く、茎は扁平な方形断面を呈しており、30と同様の平根鏃になるものと思われる。29は鏃身長9.3cmを測る大形の柳葉鏃で基部を欠失している。28は鏃身先端部片である。29または30と同形態の大形平根鏃になるものと思われる。

●鈍 (図12-31・32)

大形のもの31と小形のもの32とがある。31は遺存状況良好で全長21.5cm、刃部長10.0cmを測る。柳葉形の刃部は底辺2.3cm、高さ0.9cmの二等辺三角形断面をなし、先端部で大きく上ぞりしている。幅1.3cm、厚さ0.8cmの長方形断面の基部は、端部に至って細く扁平になり、木質の残存がみられる。32は残存長4.6cmの刃部片で、側縁刳り込み部まで残存している。薄刃の小形品である。

●刀子 (図12-33~36)

33は残存長7.5cm前後の刃部片、34~36は刃部から柄部の片である。34は小形で刃部推定長4.0cm前後になるものと思われる。鹿角装の柄部を持つ。35も柄部鹿角装、36は木柄の上を鹿角で被覆している。

●鑿 (図13-37)

全長21.9cmを測る袋柄鑿である。幅1.3cm、厚さ1.0cmの断面方形の柱状身部に逆円錐状の折り曲げによる袋部が続く。刃部は両刃となる。

●鉄斧 (図13-38・39)

全長13.1cmの中形品38と、11.3cmの小形品40がある。いずれも有肩で袋状の着柄部を持つ。38では袋部折り曲げのつきあわせ部が明確に見てとれるが、39では錆化のため観察できない。38は重さ203.0g、39は132.0gを量る。

●鎌 (図13-40)

先端部がU字状に湾曲する曲刃鎌である。全長18.1cm、幅2.8cmを測り、着柄部には刃部に対して直角に近い折り返しがある。

●馬具 (図14-41)

鉄製の轡である。2連の銜、銜先には鏡板、引手がとりつく。鏡板は9.0cm×8.0cmの素環の楕円形で、外寸4.1cm×1.5cm、内寸2.6×0.8cmの長方板状の立聞が付く。

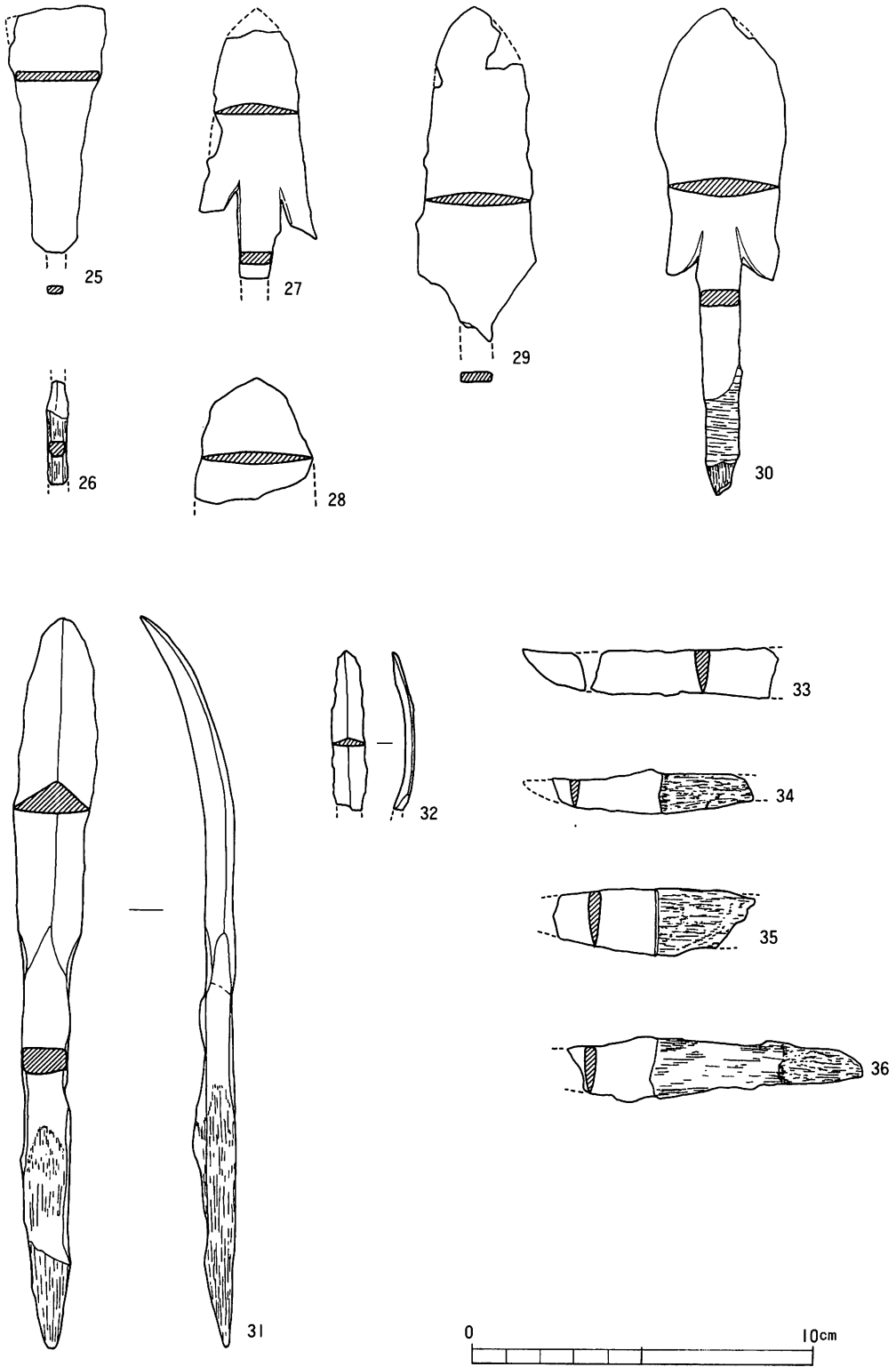


图-12 1号墳出土鉄器(1)

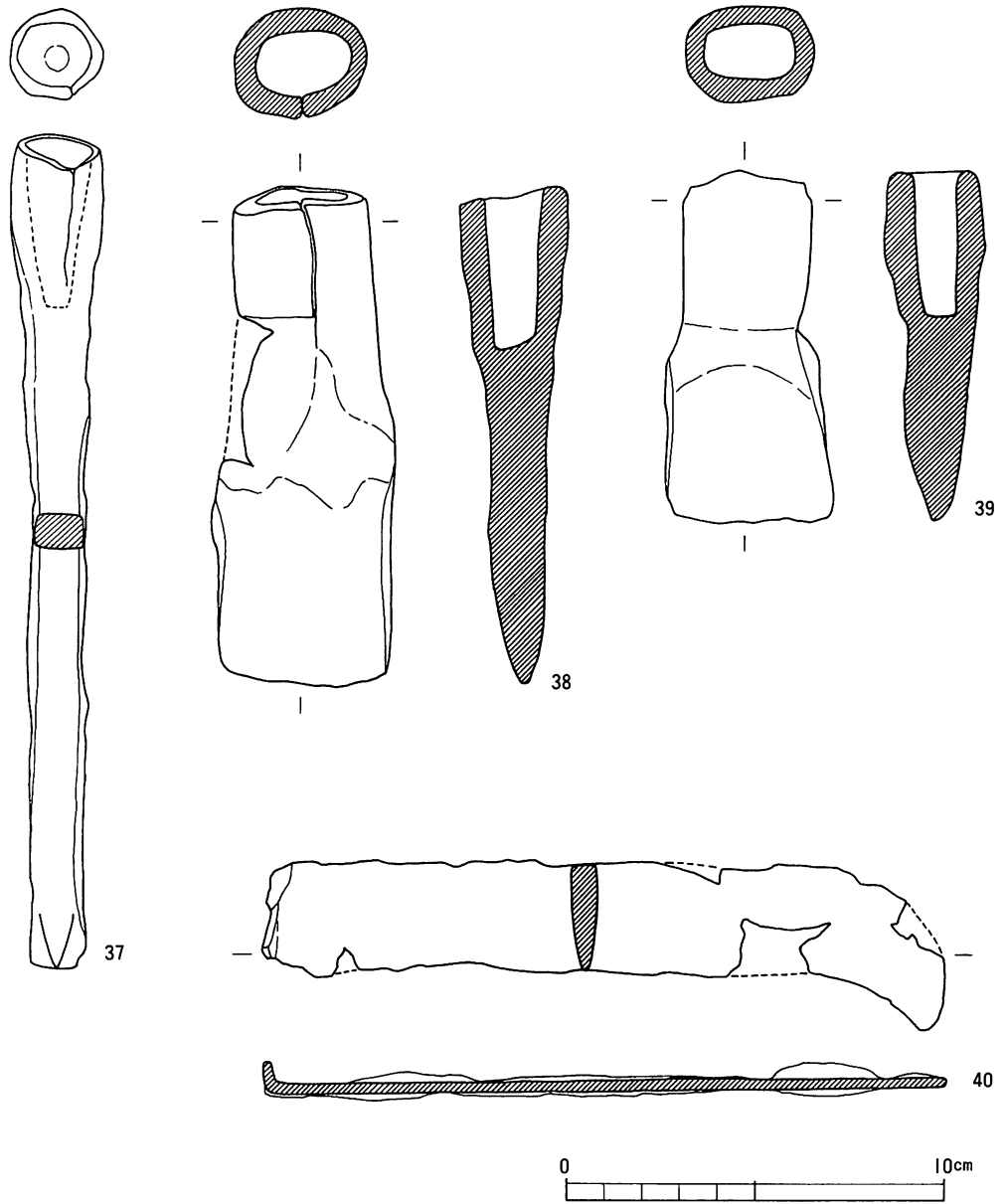


図-13 1号墳出土鉄器(2)

●玉類 (図15-42~48)

勾玉42は、玄室奥に近い床面上で検出された、深い緑色の硬玉製で、全長2.5cm、頭部径1.1cmを測る。穿孔は、両面から行われている。43~48は、ガラス製の小玉で、すべて土砂

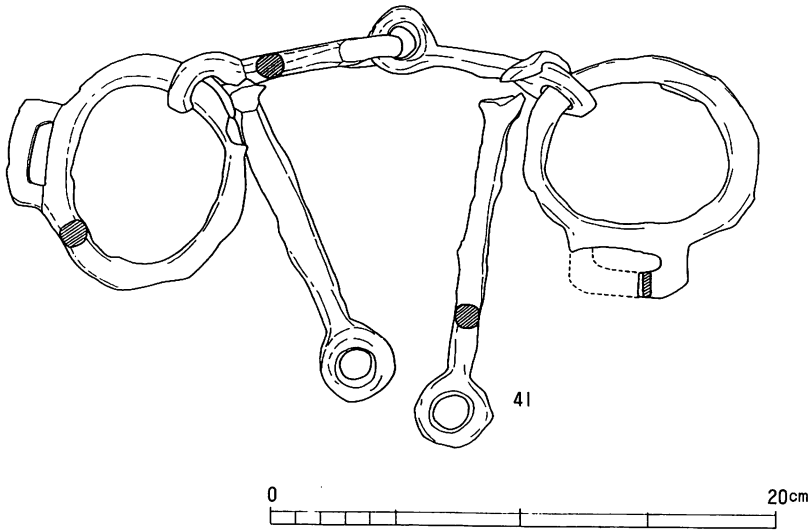


図-14 1号墳出土馬具

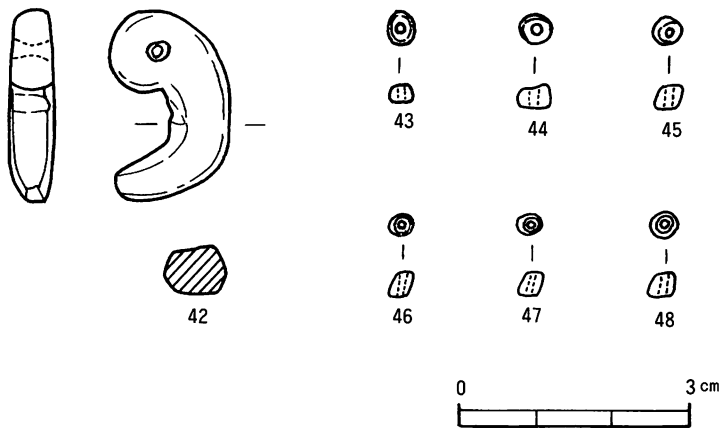


図-15 1号墳出土玉類

水洗時に検出された。径2.8mm~4.2mmを測る。1・2は半透明な濃紺色、3~5は半透明なコバルトブルー、6は半透明な緑青色を呈している。

〔Ⅲ〕 まとめ

北谷王神ノ木1号墳は、松山平野北部の丘陵上に営まれた古墳群中の小規模な一円墳である。まず、出土須恵器からこの古墳の年代的な位置付けを行っておきたい。須恵器の大半は横口部西隅から出土しているが、出土状況図から判断する限り、据え置かれたというよりも乱雑に積み上げられたような状況を呈しており、埋葬時本来の状況とは考え難く、何らかの要因によって二次的な移動が行われたものと思われる。石室内の遺物の移動については、追葬時の「カタツケ」によるものが通有であるが、本例の場合「カタツケ」が行われた後、新たに加えられた遺物の出土をみおらず、追葬を直接の要因とするものではない。

玄室内からは蓋坏12点を出土しており、その内訳は蓋6点、身6点である。蓋では相対的に口径の小さい1、大きい4～6とその中間の2・3とに分けられる。最も口径の小さい1は器高も低く、他に較べて扁平である。また、2・3の口端部は、他の蓋と異なり単純に丸くおさめられており、法量、口端部形状から判断して、1～3が4～6に較べて新相を呈していると考えられる。坏身についても口径の小さい7・8、大きい10～12、中間の9に分けられ、このうち10・11は立ちあがりが高く、より直立気味であり、坏身のうちでは古相を呈している。これらの蓋坏は、田辺昭三氏の編年観に従えば概ねⅡ期後葉、TK43型式の範疇で捉えられるものであり、この型式内での新古相と捉えておきたい。

2点の提瓶21・22では、21の鉤状把手に対する22のボタン状円板といった把手の形態にみられるように、22のほうが後出の様相を呈しており、この新古を蓋坏の新古に対応させて捉えて大過ないものとする。

以上の蓋坏、提瓶にみられる型式差をそのまま副葬時期の差として据えるか否かであるが、遺物の出土状況の項でも触れたように、各器種2個体を単位としたセット関係が石室内で概ね完結していることから、その一括性を評価し、同時期の副葬と考えたい。ただし、この一括性はセット関係を大きく崩すようなかたちでの遺物の持出しが無いことが前提となっているが、偶然このような状況で遺物が残されたとは考え難いということを積極的に評価したものである。いずれにしても、一時期の須恵器が画一的な器型のみで構成されるものではなく、特に消費地においては先行型式の器型ないしは要素が後出段階まで残存するほうがより実情に即したあり方であるならば、型式差は型式差として認めた上で、強いてこれらを分離して副葬時期の差を考えなくても良いように思う。したがって、ここではこれらの須恵器の時期を坏7、提瓶22のようにTK43型式の中でもより後出の時期、TK209に近い時期のものとして理解し、6世紀後葉でもより末に近い年代を与えておく。

次に、この古墳の構造について考えてみたい。まず、この古墳の占地であるが、南面、北面が比較的急峻な斜面となる「馬の背」状の東西尾根線突端上に占地している。墳丘域と、ある程度の墳形は、背後の尾根を稜線に直交して切ることによって形成される。また、稜線

上をある程度削平することによって若干の平坦面を造った後墓壙を掘り、これら一連の造成行為によって生じた土砂を盛って封土としたものと思われる。墓壙は、石室の殆んど部分がすっぽりとおさまってしまうほど深く掘られており、こうすることによって盛土の軽減を図ったものと考えられる。また、天井石の架構もこのことによって比較的容易になったであろうことも想像に難くない。この深い掘り方については、南北面に急峻な斜面を持つ東西尾根に直交して、石室主軸を南北にとったという立地上の制約も考慮に入れなければなるまい。盛土は、版築と呼ぶのもためられるような粗雑な盛り方をとっている。

こうしてこの古墳の築造方法を概観してみると、様々な点で構築作業の省力化を指向する側面が見えてくる。無袖の石室閉塞部に素掘りの墓道がとりつくという簡略な石室構造も、こうした側面から見た場合、最も理解し易いものとする。もっとも、こういった一元的な視点だけではなく、地域性、造墓集団とのかかわり等、横穴式石室の系譜にかかわる視点が要求されるのは言うまでもないことであるが、現在のところ松山平野においてこのような構造を持つ例は明確には知られておらず、更にこの周辺地域での古墳調査例が殆んど無いと言って良い現在、ここでは松山平野北部地域における後期小古墳のひとつのあり方を示す資料として提示しておくにとどめたい。

塚 本 古 墳

■ 塚本古墳 ■

〔I〕 調査の経過

1. 調査に至る経緯

塚本古墳は松山市北部、福角町の低丘陵端部に位置し、松山市埋蔵文化財地図による170番包蔵地、権現古墳群内に所在する。昭和60年12月、株式会社「三恵」により、この包蔵地内における宅地造成が計画され、松山市教育委員会（以下「市教委」という）に試掘確認調査の申請がなされた。これをうけて市教委は、昭和61年3月19日よりトレンチによる確認調査を行った。対象面積は16648㎡である。

調査地は権現川によって形成された開析谷の出口付近の右岸に位置する鞍部で、現状はアプローチ専用のミニゴルフコースとして利用されている。調査地のほとんどは、既にこのコース造成時に大きく地形を改変されており、遺構、遺物等は検出されなかったが、南北に細長い調査地北端付近で古墳2基が遺存することが確認された。

この調査結果をうけて市教委は、記録保存を目的とした緊急発掘調査として調査を続行することと決定し、市教委、「三恵」両者間にて調査方法、期間等についての協議がなされた。この協議の結果、既存の建造物、植栽等の現状をでき得る範囲保存しつつ調査を行うとの合意に達し、すべての確認行為終了の後、調査期間約40日の日程で本格調査を実施した。

2. 調査組織

所在地 松山市福角町甲1186番地
調査期間 昭和60年3月19日～5月6日
調査面積 500㎡

調査主体	松山市教育委員会		
教育長	西原多喜男	調査指導	文化第二係主任 西尾 幸則
教育次長	井手 治己		文化第二係調査員 池田 学
調査総括	文化教育課長 伊賀 俊輔	調査担当	// 栗田 茂敏
	文化教育課長補佐 坪内 晃幸		
	文化第二係長 大西 輝昭		

〔II〕 調査の成果

1. 立地と現状

塚本1号墳、2号墳は権現川右岸の開析谷出口付近、標高37～38.50mに位置する。調査地の属する丘陵を開析して北流する権現川は、調査地付近で北西方向へ大きくカーブをとり、扇状地を西流して堀江湾に注ぐ。両墳の所在する丘陵は、本来この川に沿うように南東から北西へ比較的緩やかな勾配で伸びていたものと思われるが、ゴルフ場造成以前の水田開墾の際には既に大きく削平されており、現況では東西丘陵に挟まれ、更には北側の直近にまで丘陵がせまり、谷地形の中の微高地といった様相を呈している。眺望は北西方向の扇状地へ開けるが、比高差もさほどなく、視野も限られており、特に優れているとは言い難い。墳丘も削平されて全く残っておらず、立地の現況も含めて地表からの観察では古墳の存在は予測し難く、これまでの分布調査でもその存在は把握されていなかった。

古墳は2基検出され、北側の1基を1号墳、約32m南方で検出された1基を2号墳とした。1号墳、2号墳ともに1、2個の石材が僅かに露出していることに眼をとめてトレンチを入れた結果、その所在が明らかになったものである。権現古墳群中ではこの2基のほかに、丘陵高所を中心とした踏査によって、横穴式石室を主体部とする5基を含め10基の古墳の所在が知られているが、未踏査の部分も多く、また今回のように看過されがちな部分に所在する例もあるところから、その実数はこの数字をかなり上まわるものと思われる。

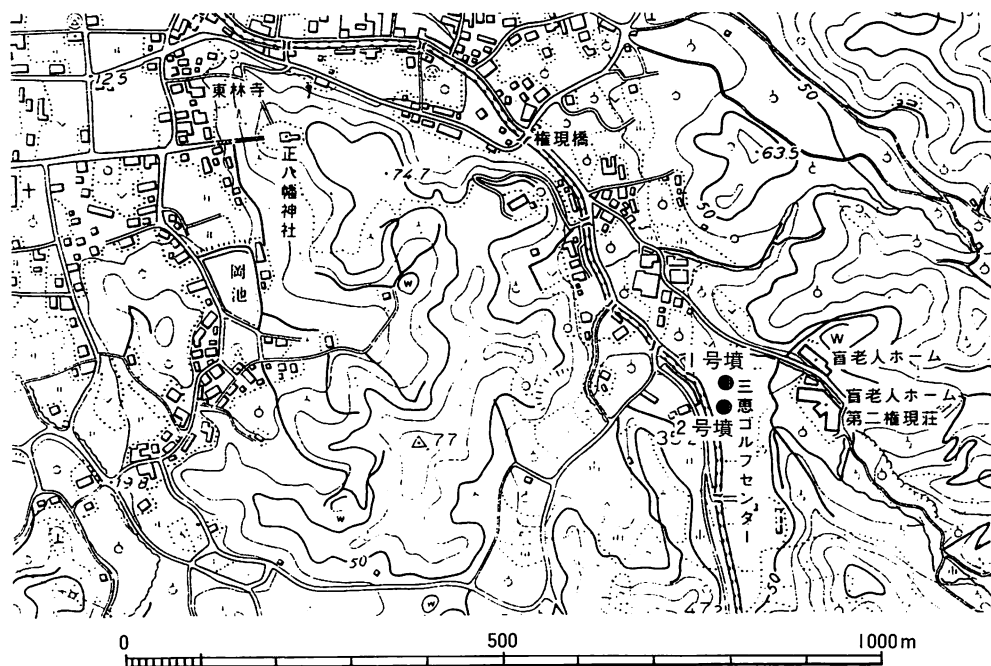


図-16 塚本古墳の位置

2. 1号墳の調査

① 遺構

墳形と規模 (図17)

1号墳、2号墳ともに墳丘盛土は既に削平されて全く遺存していない。また、主体部周辺の調査も植栽や既存の施設等の制約もあって部分的にしか行えなかった。1号墳では、主体部南方部において周溝の一部が検出された。主体部は北東から南西に主軸をとるが、周溝はその内法で主軸から約8mの位置で主軸に平行して直線的に検出された。周溝は幅3m、約12m直線的に伸び、主体部をとりまくように直角に近く曲る様相がうかがえる。この周溝の検出規模、主体部との相対的な位置関係から、一辺17~18mの方墳になるものと考えられる。

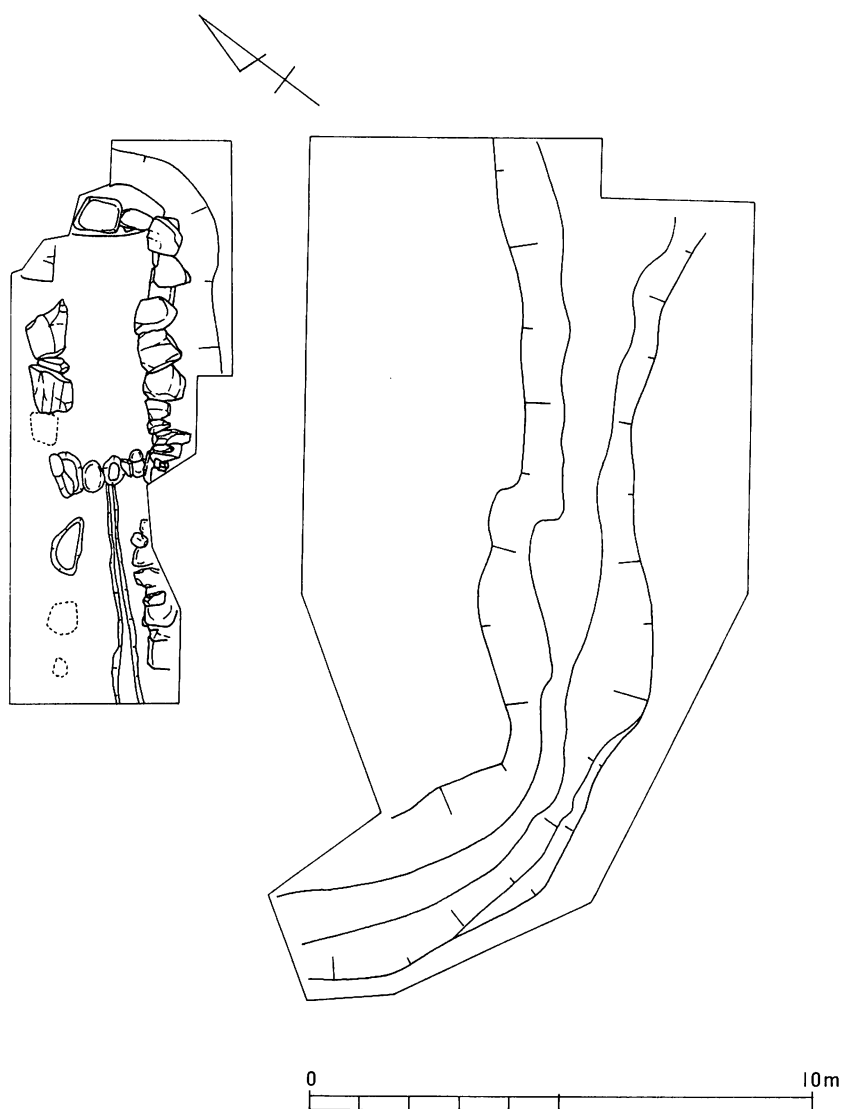


図-17 1号墳主体部と周溝

横穴式石室（図18～21）

1号墳の主体部は、玄室長4.3m、幅2.0m、玄門幅1.3m、羨道長4.5m、幅1.3～1.4mを測る大型の両袖型横穴式石室である。主軸方位は、N51°17'20"Eとほぼ北東にとり、南西に開口する。遺存状況は必ずしも良好とはいえ、主軸沿いに石室を縦断するように段カットが行われ、北西部の側壁は玄室奥壁付近の3個の基底石を残すのみで、ほとんど遺存していなかった。天井石を含む石室上半部は既に失われている。

石室壁面は、大型の石材の平滑な面を石室内部へ向けて横置きして腰石とし、玄室ではその上段に中型の石材、羨道部では比較的小型の塊石や割石を積んでいる。羨道部南東壁は、現況で天井に近い部分まで遺存しているものと考えられる。玄門袖部は、他の腰石がすべて大型石材を横置きされるのに対して、石材を縦置きして構築されており、この上に羨道部天井石と同レベルで見上げ石が横架されていたものと思われる。玄門右袖石も遺存していないが、抜き痕と袖石の風化剝離残欠によって平面位置が確認された。

羨道部と玄室の床面は、段差を持たずフラットであるが、玄門部床面には数個の石で境が設けられている。現状では扁平な2個の割石が残るのみであるが、抜き痕が検出されている。また、この部分から石室入口へ向けて、深さ20cmの断面逆台形状の素掘りの排水溝が掘られている。この溝は、玄門部では幅20cmであるが、次第に幅広になり、入口部では幅50cmを測る。奥壁から1.2mまでの玄室奥床面には、一辺30cm前後、厚さ10cm程度の割り石が敷かれさらにその上面には、これらよりも小ぶりな扁平な割り石と5cm内外の河原石とが敷かれている。1号墳は少なくとも1回の追葬は経験しており、上段の敷石は追葬時のものと考えられる。また、下段の敷石が整然としているのに比べて、上段が雑然としているのは二次的な攪乱によるものであろう。

石室構築石材は、花崗岩を主とし、小型の割り石の一部には花崗岩質アプライトが用いられ、当墳の所在する高縄山系の地質を如実に反映している。石室平面図18の破線で示した部分は、石材底面が風化し、撤去時にも剝離残欠として残された部分である。

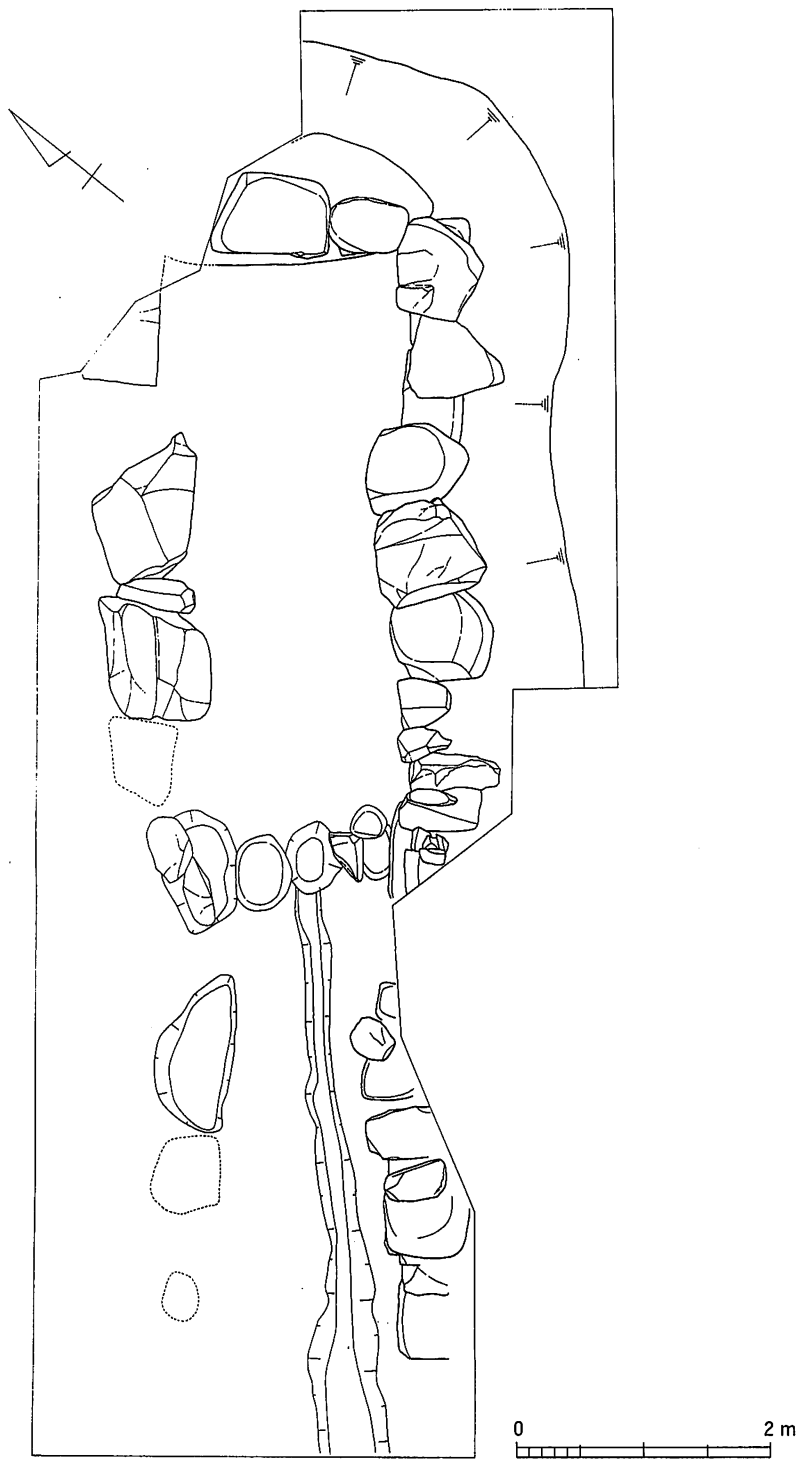


图-18 1号填石室平面

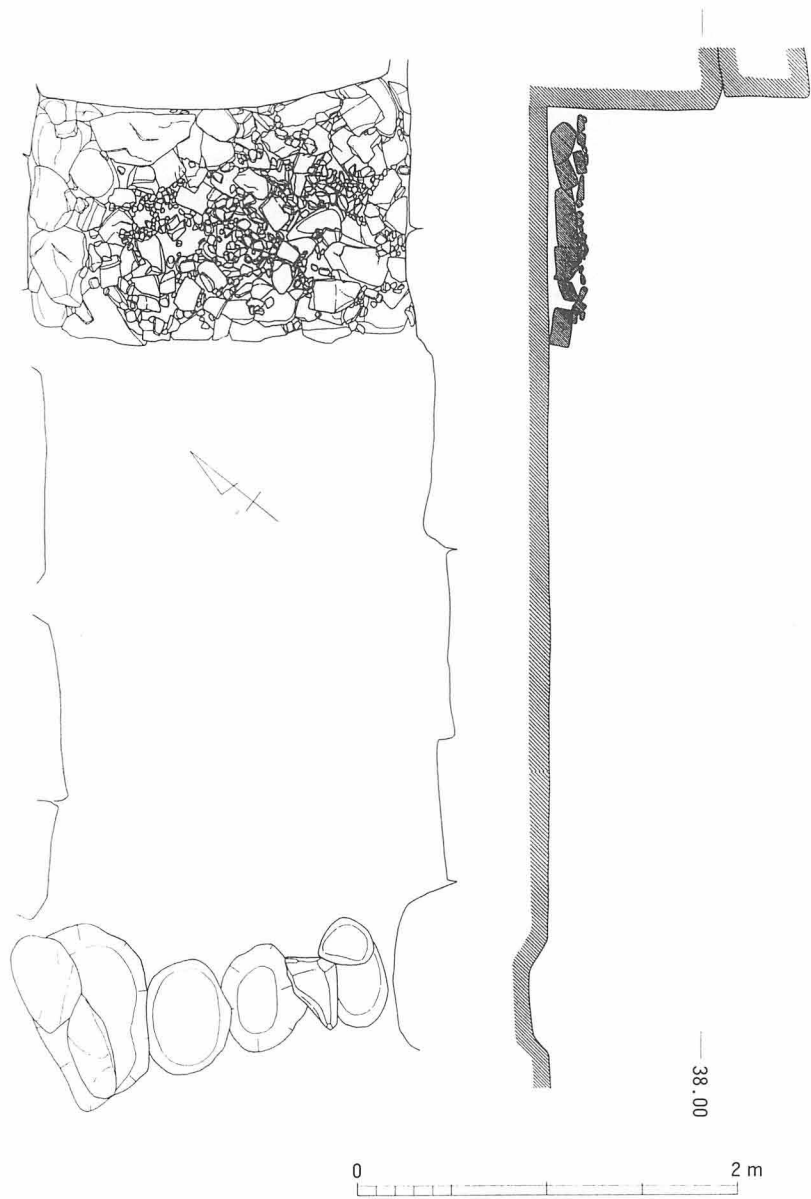


图-19 1号坟玄室床面状况(1)

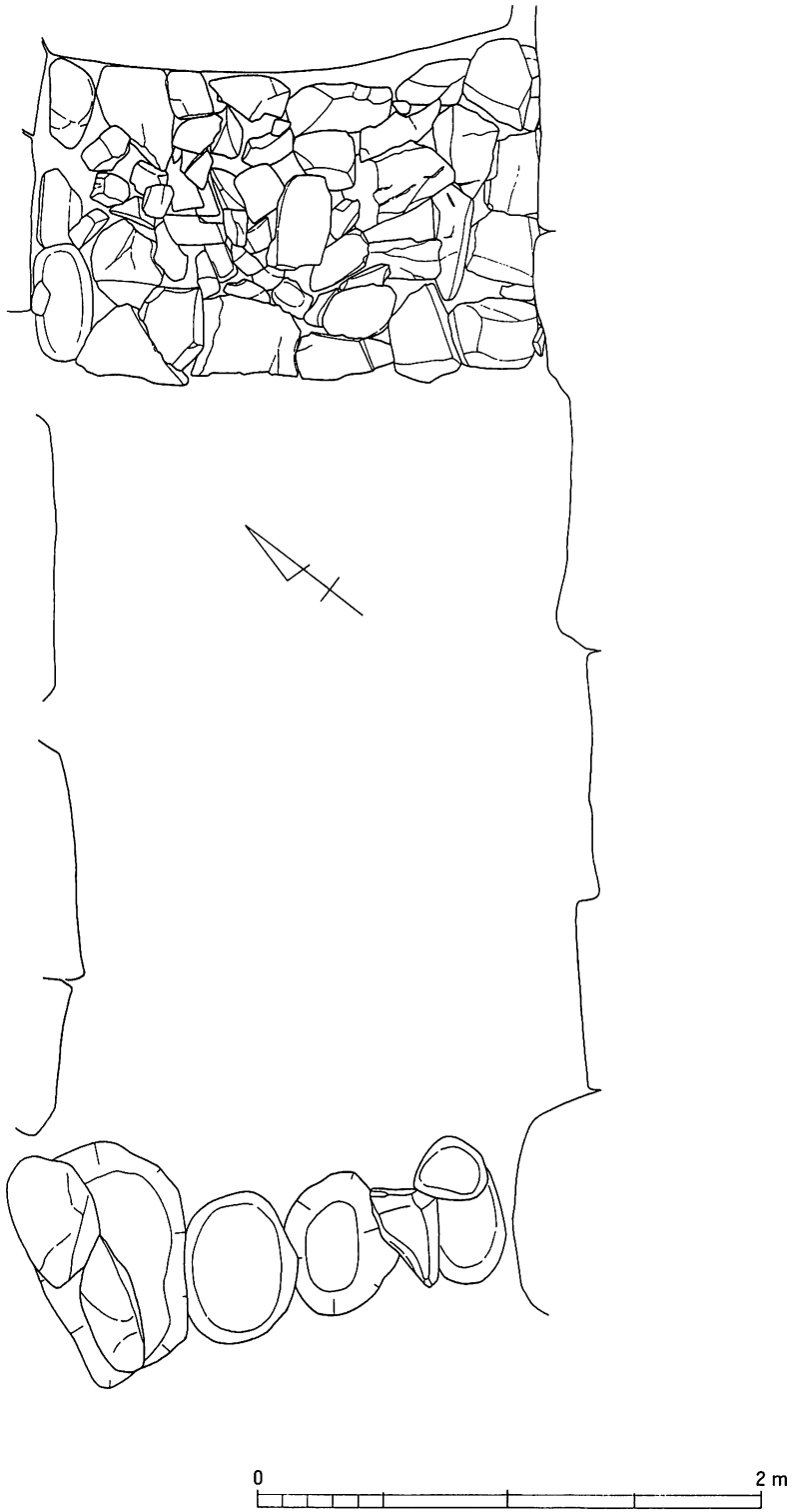


图-20 1号填室床面状况(2)



图-21 I号墳石室展開図

遺物の出土状況（図22・23）

遺物は、主体部玄室内、羨道部、および周溝から出土している。図22に示した土器類の検出状況のうち、羨道部で破片となって出土した一群は、須恵器甕の破片群で、流入土や瓦器碗とともに床面からかなり遊離した状況で出土しており、二次的な混入遺物として扱った。甕には数個体分の破片が含まれているが、図化し得たのは1個体の口頸部片のみであった。これら羨道部の遺物を除外して見てみると、二次的な移動、持ち出しが行われたにせよ、土器は玄室右奥部、右袖部、左袖部での一応のまとまりがみられる。これらの土器類は、傾向として、両袖部が玄室奥に較べて若干の古相を示している。また、周溝出土の土器類は玄室奥の遺物にほぼ併行する時期のものと考えられ、土器型式からは少くとも1回の、また、周溝内の遺物が追葬時の石室内遺物の投棄に伴うものであるとするならば、比較的短期間での2回の追葬を想定することが可能である。

金属製品は、玄室内各所に散在している。主な内訳は、直刀2、挂甲札67、鉄鏃8、刀子3、鉄斧3個体等である。直刀は、玄室奥壁沿い敷石上面と北西側壁部分奥寄りで見出された。前者は金銅製の鐔を装着されており、この直刀に伴うとみられる、同じく金銅製の把頭が他の一振りの直刀付近で、また把頭のかしめ用の覆輪状責金具が把頭より約70cm離れた位置で見出された。この直刀は、推定復元長100cm前後になると思われる圭頭大刀である。後者は錆化が著しく進行しており、出土位置を確認し得たのみで、とりあげ後の実測等、事実上不能となっている。挂甲札は、玄門境石上左袖寄りで折り重なって見出された。

玄室内ではこれらの遺物の外に耳環6、ガラス玉47、歯牙32個体以上を見出している。いずれも玄室中央より奥で見出されているが、二次的移動が明らかな出土状況である。このような出土状況のなかでも、玄室奥左隅部では耳環2個体を中心としたある程度の分布のまとまりが認められ、最終被葬者の頭位を示しているものと考えられる。耳環の出土は6個体であり、2個体1対と単純に割るならば3体分の環が遺存していることになる。ただし、個々の法量を検討し、近似法量1セットという前提に立てば、4体の被葬者を想定することができる。個体分別可能な32本の歯牙のうち、29本は確実に白歯であり、この量は1体分の数値を大きく凌いでいる。法医学的所見による同一部位での重複例を細かく追求すれば、被葬者の実数に近い値が得られるものと思われるが、現段階では未だ分析を行っていないため、とりあえずは、残存歯牙からは最低限2体の被葬者が想定できるといふことにとどめたい。



图-22 1号墳石室内土器類出土状況

② 遺物

遺物は、石室内より須恵器、土師器、瓦器等の土器類、鉄器等の金属製品、その他玉、人歯を出土し、また、周溝中より須恵器を出土している。なお、周溝埋土中より、本墳には直接かかわらない石器類を若干出土している。

石室内出土の遺物

●須恵器（図24-1～16、図25-20）

須恵器は計17点出土している。玄室内より13点、羨道部流入土中より大甕1点を含む4点が出土した。

●坏蓋（図24-1～4）

1、2が玄室奥、3が左袖、4は右袖出土である。1は口径11.0cm、器高4.3cm、2はそれぞれ11.3cm、3.9cmを測る。ともに壺を伏せたような形態の完形品であるが、1が内湾して口縁部に至るまで開くのに対して、2では口縁部で鈍く屈曲する。口端部は1は尖り気味に丸く、2では丸くおさめている。天井部外面中央部は両者とも未調整、その他の部位は内外面ともに回転撫でで調整され、ヘラ削りを施される部分はない。3は口径12.7cm、器高3.5cm、4はそれぞれ12.7cm、4.1cmを測り、1、2にくらべてやや大きく扁平な器型となる。3、4ともに天井部外面外周を回転ヘラ削りされているが、削りそのものは浅い。天井中央部は3では撫でられているが、4では未調整である。両者ともに、天井中央部内面に直線撫でが認められる。その他の部位は、内外面ともに回転撫でで調整されている。轆轤はすべて時計方向に回っている。

●坏身（図24-5～8）

5、6が玄室奥、7が羨道部、8は左袖部出土である。5は口径9.5cm、器高3.5cm、内傾する短かい立ち上りの端部は尖り、やや斜め上方に伸びる受部は端部を平坦に撫でられている。この撫では、端部上端をつまむように行われるため、上方に鋭角的に肥厚している。底部外面は未調整、その他の部位は内外面ともに回転撫でである。6は立ち上り端部を僅かに欠くが、内傾した短かい立ち上りを持つ。推定口径10.2cm、器高3.5cmである。他の3点は、立ち上り基部内面に鋭い沈線状を有するが、この1点はそれを持たない。受部は斜め上方に短かく伸び、端部を丸くおさめる。外底部は未調整、その他の部位は回転撫で調整である。7は口径10.1cm、器高3.5cm、基本的には前二者と同様の器型である。立ち上り端部は鋭く尖り、肉厚の受部端部は鋭く丸くおさめられる。外底部はヘラ切り未調整、底部内面には軽い直線撫で、その他の部位は回転撫でを施される。8は口径11.2cm、器高3.0cm、他の3点にくらべて若干大きく、扁平な器型である。水平に近く伸びた受部に、やや内傾気味の短かい立ち上りを持つ。立ち上り端部は鋭く尖り、受部端部は上方に肥厚して丸くおさめられる。外底部は撫でられており、他の部位にも回転撫でを施されている。なお、轆轤回転はすべて時計方

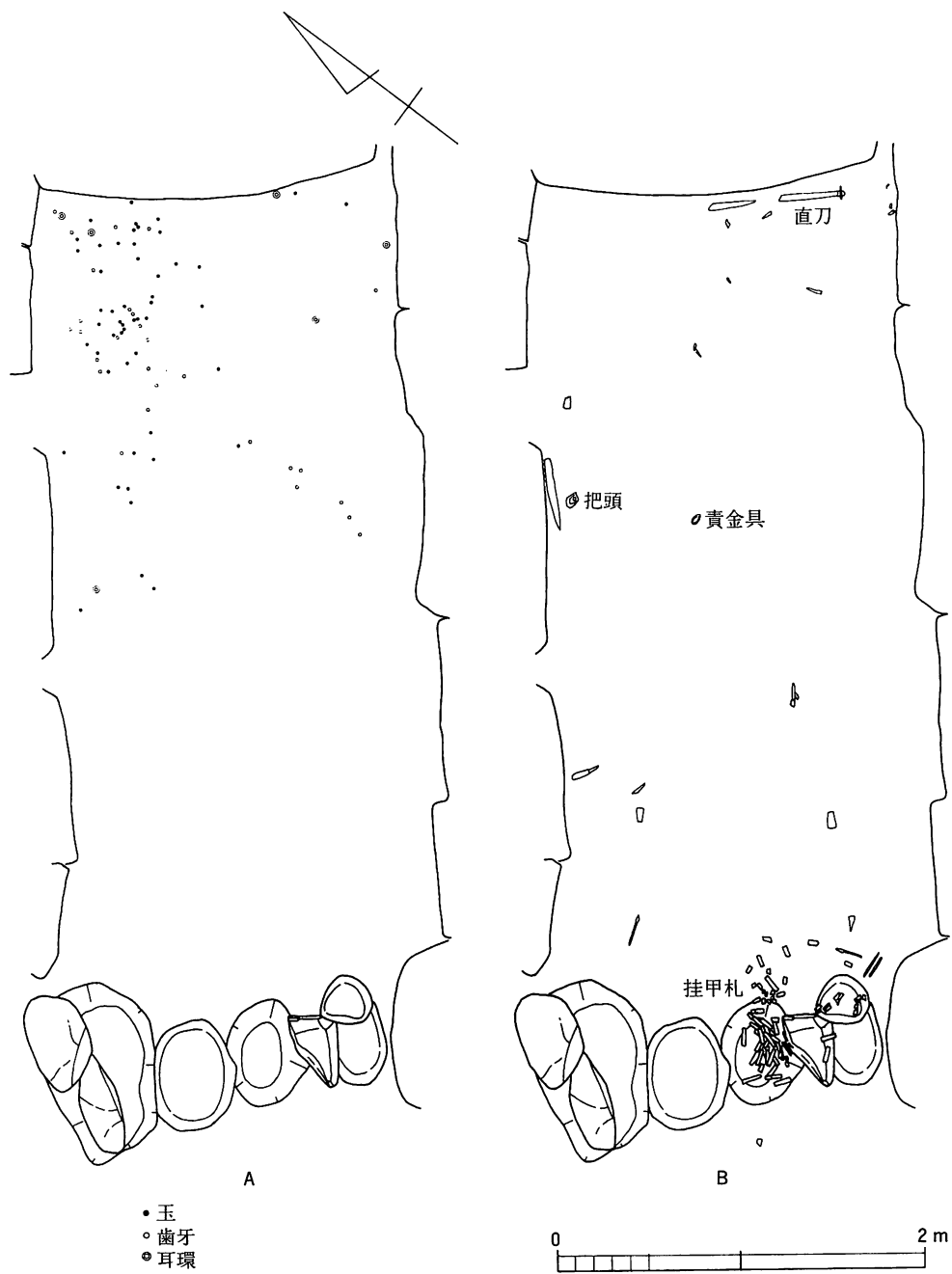


图-23 1号填玄室内遺物出土狀況(A—玉、耳環、齒牙、B—金属器)

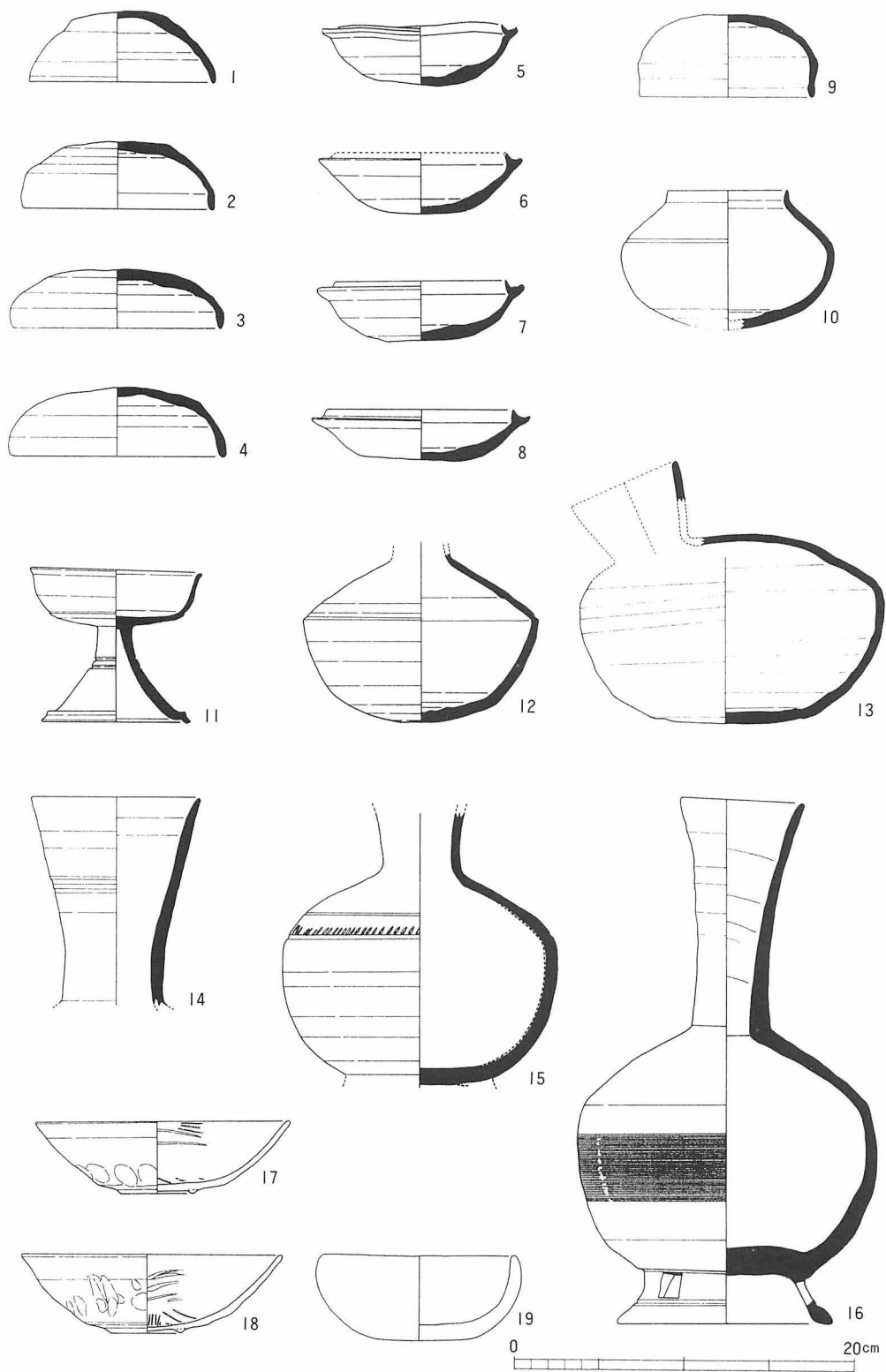


图-24 1号墳石室内出土遺物(1) (須惠器・土師器・瓦器)

向である。

●蓋（図24-9）

右袖部出土、短頸壺の蓋になるものと思われる。平坦気味の比較的高い天井部から内湾して下り、口縁部手前で鈍く屈曲した後、僅かに外反、口端部を丸くおさめる。口径10.3cm、器高4.9cm、最大径を屈曲部に持つ。天井部外面は粗雑な不定方向のヘラ削り、これに対応する内面には指頭痕がみられる。他の部位は回転撫でで調整されている。

●短頸壺（図24-10）

口径7.1cm、推定器高8.2cm、体部最大径12.5cmを測る。扁球形の体部から短かい口縁部が直立し、口端部を尖り気味に丸くおさめている。体部最大径部のやや上位の肩部に不明瞭な凹線を1条施されている。底部外面は逆時計方向の回転ヘラ削り、その他は内外面ともに横撫でされている。

●高坏（図24-11）

小型の無蓋高坏、右袖部出土である。口径10.3cm、器高9.0cm、脚径8.8cm、脚高5.6cmを測る。平坦な坏底部から段を持って屈曲し、直上よりも若干外へ開く。口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめる。脚は短かい柱部を経て「ハ」の字状にひろがり、裾部でさらに外方へ伸び、端部を上下に肥厚させ、端面は僅かな凹面をなし、脚端内面に鋭い沈線状が1条巡る。脚高中位よりもやや上に凹線を2条施している。坏底部はヘラ削りの後、軽い回転撫でを施される。他の部位の調整も回転撫で、轆轤は時計方向に回っている。

●細頸壺（図24-12）

玄室奥出土である。口頸部を欠失しているが、直口の短かい口頸部が立ち上るものと思われる。体部最大径14.1cm、頸基部径3.5cm、残存高10.0cmを測る。半球形の体部下半から稜を持って屈曲し、「ハ」の字状に強く内傾する肩部を経て、直上に口頸部が立ち上る。屈曲部に段状の凹線を1条巡らせ、これより以下の外面は回転ヘラ削り、以上は回転撫で、内面も回転撫でで調整されている。体部上下の接合は、この屈曲部で行われている。轆轤回転は時計方向である。

●平瓶（図24-13）

口径6.7cm、体部最大径18.0cm、器高15.5cmを測る。玄室奥出土である。やや平坦な底部に偏球形の体部、体部の偏った位置から内湾気味に開く口縁が立ち上る。体部は3箇所て接合される。底部を除く体部下半、肩部、体部上半をそれぞれ接合し、最後に底部を粘土円板で塞いでいる。底部内外面は不定方向の雑な撫で、その他はすべて回転撫でで調整される。轆轤は時計回りである。

●長頸壺（図24-14~16）

14は羨道部出土の口頸部片、15、16は右袖部出土の台付長頸壺である。14は口径10.0cm、頸基部径6.0cm、口頸部長12.1cmを測る。斜め上方に直線的に開く頸部の中位に2条の浅い凹

線が巡る。内外面ともに回転撫でを施される。15は台部、口縁部を欠失している。半球形の体部下半から鈍く屈曲する肩部には2条の浅い凹線が巡り、凹線間に右上りの刺突列点文を施される。頸部は基部径4.6cm、長さ3.5cmの部分まで遺存している。台部は貼り付けにより接合され、剥離面にはヘラによる2条の沈線が巡っている。外面体部下半は逆時計方向の雑なヘラ削りを施され、その他は内外面ともに回転撫でで調整されている。16は器高31.0cm、口径7.6cm、口頸部長13.4cm、体部最大径17.6cm、台部径12.7cm、高3.0cmを測る完形品である。球形に近い体部は、その上位 $\frac{1}{3}$ に鈍い屈曲部を持つ。頸基部径4.7cmと比較的細い頸部は、ほぼ直上にまっすぐ立ち上り、頸部中位付近でやや外反し、斜め上方に開き、端部を丸くおさめる。台部は「ハ」の字状にしっかりと踏んばり、その中位に段状の凹線が1条巡る。この凹線より上位部分に、ほぼ正方形の透孔が3方に穿たれる。台端部は丸みを帯びて外面に肥厚し、端面全体で接地する。体部屈曲部以下の上位 $\frac{1}{2}$ にカキ目、下位 $\frac{1}{2}$ は時計方向の回転ヘラ削り、その他は回転撫でで調整される。口頸部内面には、粘土帯の巻き上げ痕が観察される。

● 甕 (図25-20)

羨道部から出土した数個体分の甕片のうち実測可能なものは、この1点の口頸部片のみであった。口径49.5cm、口頸部高15.0cmの大甕片である。逆「ハ」の字状に外反しながら大きく開く頸部は、口縁部に至って水平に近く折り曲げられ、端部を僅かに下方に肥厚させ、逆「く」の字状断面を呈する端部となっている。口端内面は強く横撫でされ、結果的に上下方に肥厚したような端部形態になる。口頸部外面は、幅広の2条を単位とした凹線によって3区画され、上位2区画に細かい櫛描き波状文を施される。上位 $\frac{2}{3}$ の部分にはカキ目が巡り、その後には施文されている。下位 $\frac{1}{3}$ の外面、及び内面は横撫でによる。内面頸部屈曲部直下から円弧状の叩きが認められる。

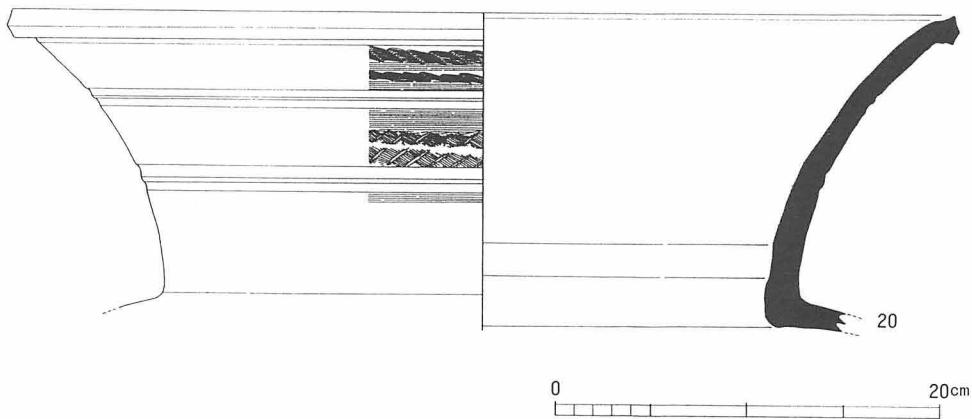


図-25 1号墳石室内出土遺物(2) (須恵器)

●土師器（図24-19）

土師器の出土は、左袖部出土のこの1点のみであった。平坦気味の底部から一貫して内湾する器型の埴である。器壁は分厚く、全体的にぼつりとした印象を与える。外面調整は、器表面の摩滅により大部分は不詳であるが、口縁部に横撫での痕を部分的に認めることができる。内面には回転力を利用した横撫でが看取される。また、底部内面には直線撫でが施され、器面調整からみれば、須恵器坏と共通した部分が多い。胎土は細砂粒を含むが、概ね精良で、比較的堅緻に焼かれている。

●瓦器（図24-17・18）

玄門部で破片となって2個体が出土している。17、18ともに推定口径であるが、それぞれ15.0cm、15.5cm、器高4.3cm、4.7cmを測る。17には断面逆台形、18には断面三角形の低い高台が貼り付けられている。17は器表面の剥離が進行しており、部分的にしか確認できないが、内面見込み部に間隔のあいた平行線、口縁部付近に横方向の暗文が認められる。18の内面にも同様の暗文が施されている。両者ともに口縁部外面を横撫でされ、体部には指頭痕が残っている。遺存良好な部分での実測のため、図では明確ではないが、器型の細部の歪み等非常に似通った癖を持っている。いずれも13世紀代に下るものである。

●金属器（図26-31）

●直刀（図26-21～24）

金銅装圭頭大刀である。把頭、鐔の遺存状況は良好であるが、刀身、茎は錆化が進んでおり、切先、刀身中間部は遺存していない。また、把、鞘等の木質部も欠失している。把頭は全長7.0cm、最大幅4.9cm、最大厚2.9cmを測る。懸通孔には径1.1cmの全銅環が装着されている。把部分は遺存しないが、把頭は同じく金銅装の責金具を用いたかきめによって把に装着される。これらの装具には金箔の残存が一部に認められる。同じく金銅装の鐔は無窓、倒卵形で、尖った部分が刃先側となる。長径6.9cm、短径4.8cm、厚さ0.35cmを測る。鐔の把側面には長径3.3cm、短径2.1cmを測る倒卵型の責金具が、刀身側には薄い金銅板で巻かれた鍔が付属する。これらにも部分的に金箔が残存している。刀身は、断面二等辺三角形の平造で、残存長計は65.7cmである。茎は基部付近が僅かに遺存している。刀身幅2.6cmに対して、茎残存部では2.0cmを測る。

●鉄鎌（図27-25～32）

細身の長頸鎌25～27と、鑿頭式の平根鎌28～31とがある。長頸鎌は鎌身端部で僅かに片刃となるタイプであろうが、現状はほとんど長方形に近い鑿頭状を呈している。26・27は棘筥被となっている。完形に近い25は、推定長16.2cm、重さ11.1gを測る。鑿頭鎌のうち29は、僅かながらも棘状突起を持っている。法量を完形品で測定すると、28で全長10.6cm、29では9.7cm、重さはそれぞれ11.4g、13.3gとなる。31は刃部を欠くため、形式は不詳であるが他の平根鎌と同様の鑿頭式になるものと思われる。

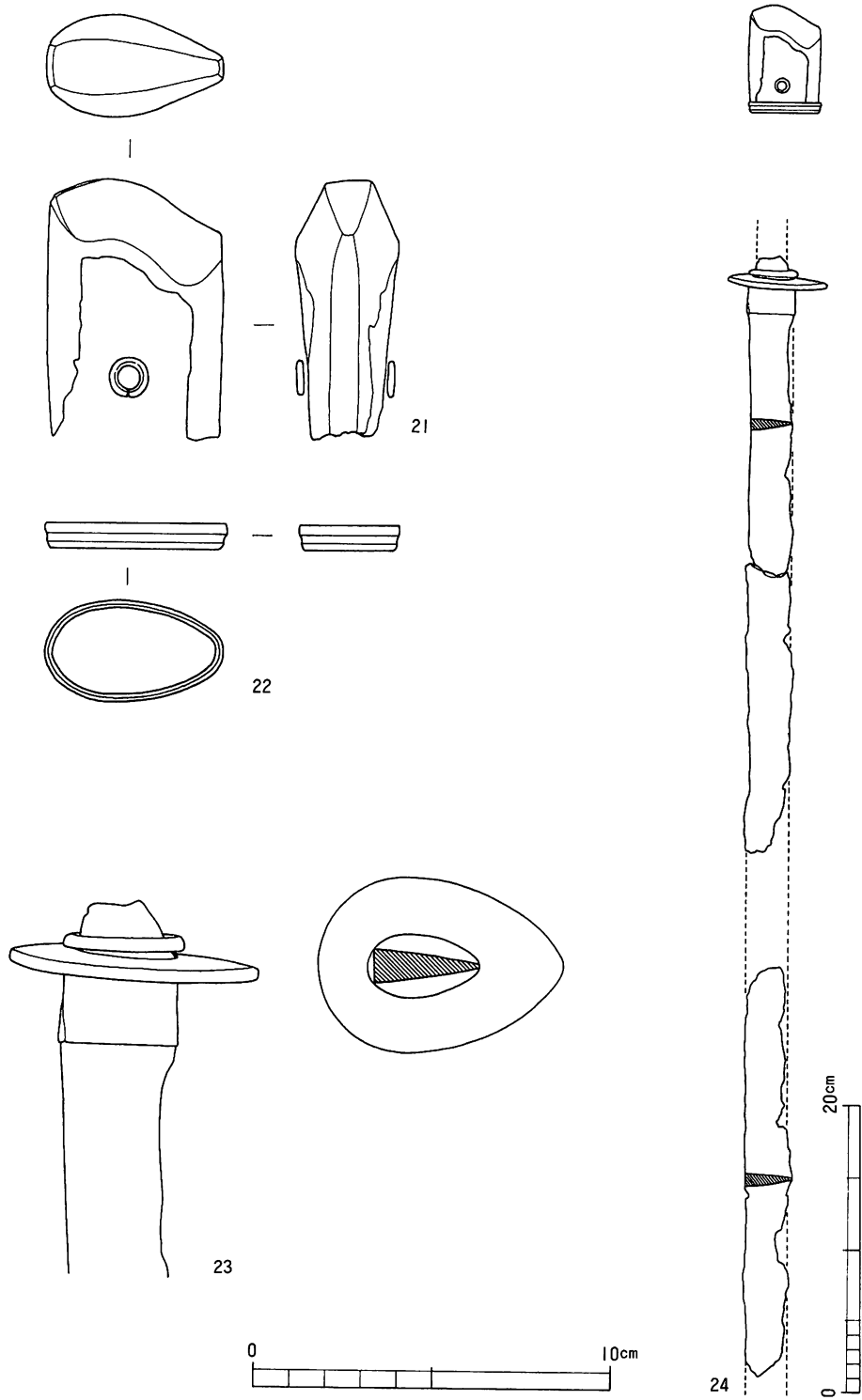


图-26 I号墳石室内出土遺物(3) (圭頭大刀)

● 鑿 (図27-32)

小型の平鑿の完形品である。全長8.6cm、うち茎長2.1cm、刃部幅3.2cm、身部厚0.4cmを測る。刃部は直刃、両刃である。全体的に薄く、華奢なつくりであり、両刃ながら削り鑿として用いられたものと思われる。

● 刀子 (図27-33-35)

刀身部片33と、切先部を欠くがほぼ完形に近いもの34・35とがある。33は残存長8.9cm、34・35はそれぞれ推定復元長11.4cm、12.5cmを測る。いずれも棟関を有し、刃部の断面は二等辺三角形で鑄は持たない。把部の遺存はなく、材質は不明である。

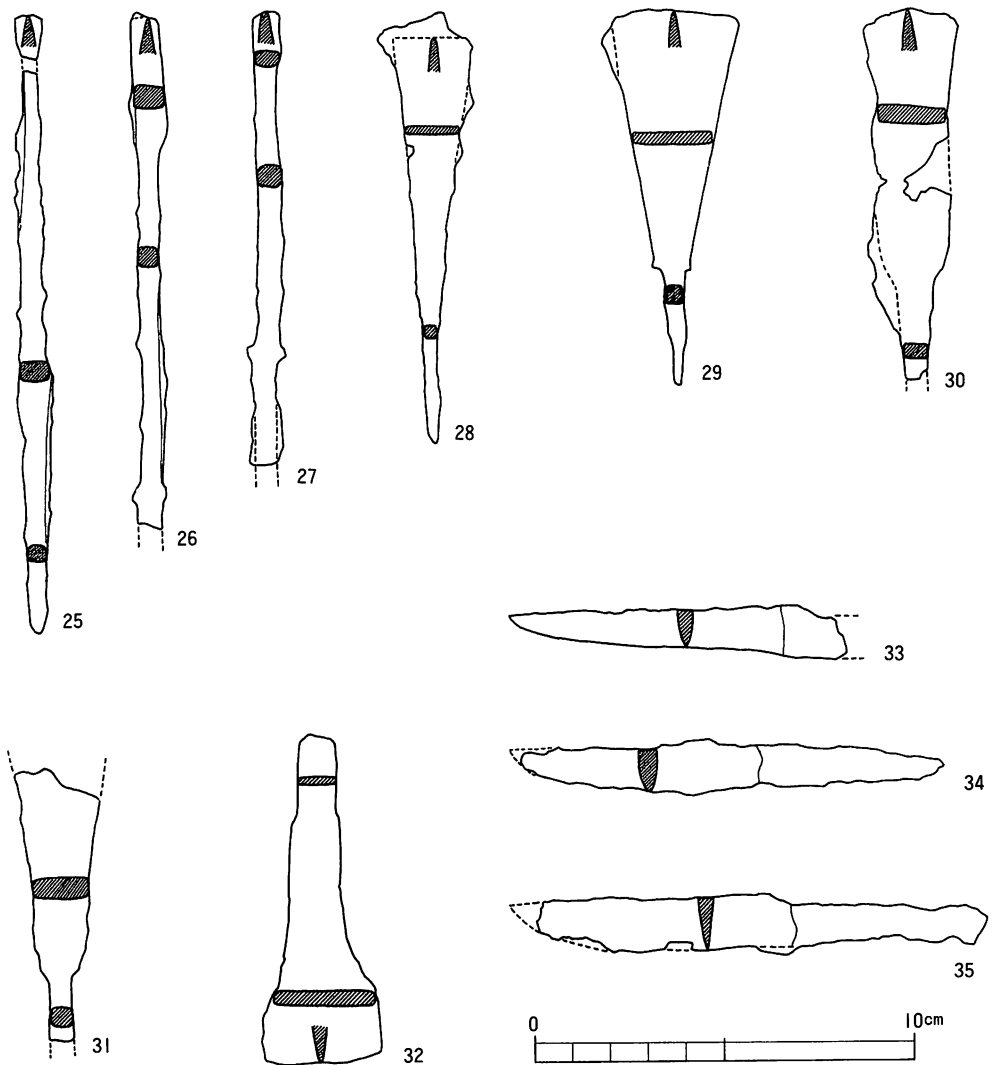


図-27 Ⅰ号墳石室内出土遺物(4) (鉄器)

●鉄斧（図28-36~38）

いずれも鍛造袋状斧である。全長8.3~9.7cm、刃部幅4.5cm前後を測る。36・37の着柄部は銹化の進行により、わずかにつきあわせ部が確認できる状態である。36は短冊型をなすが、37・38は有肩になる。着柄部横断面は36・37が長方形、38が楕円形である。現況重量は36が82.7g、37は91.0g、38が72.5gを量る。

●鑿（図28-39・40）

40は全長7.4cm、最大幅1.1cm、最大厚0.9cm、重さ15.9gを測る完形品である。先端部付近

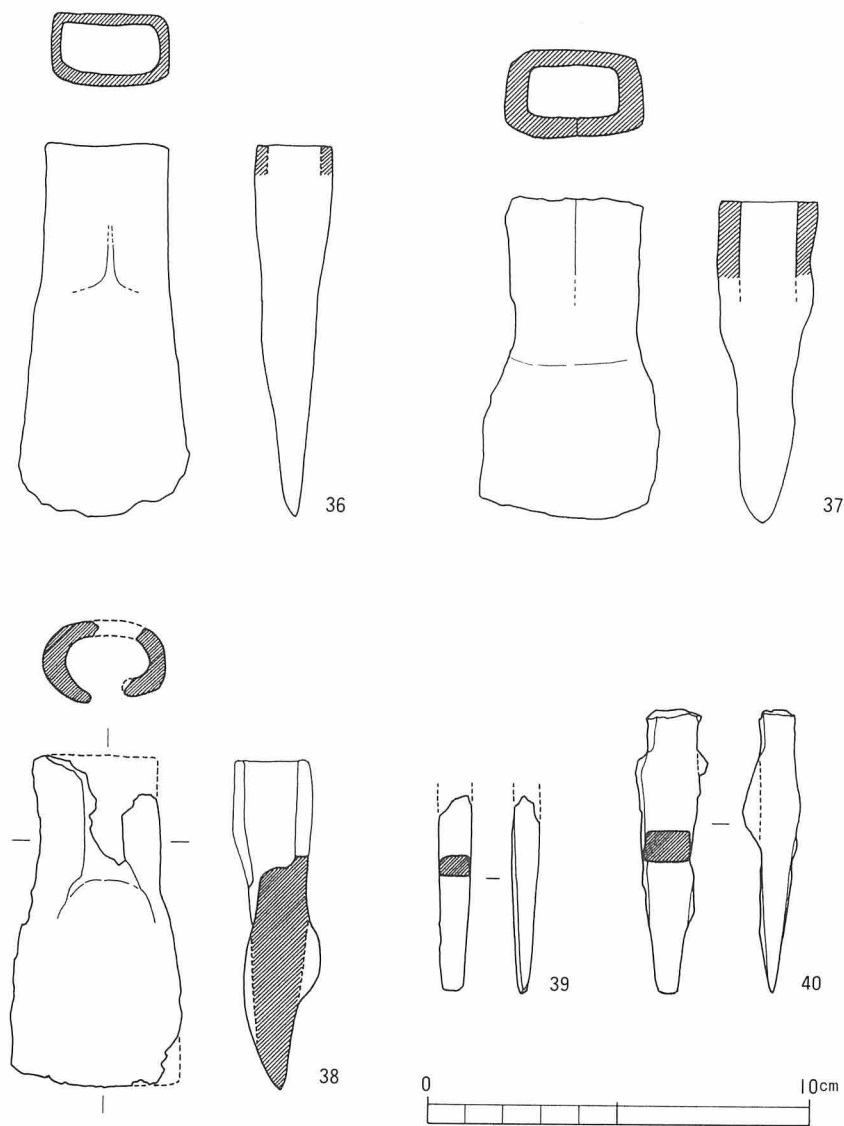


図-28 I号墳石室内出土遺物(5)（鉄器）

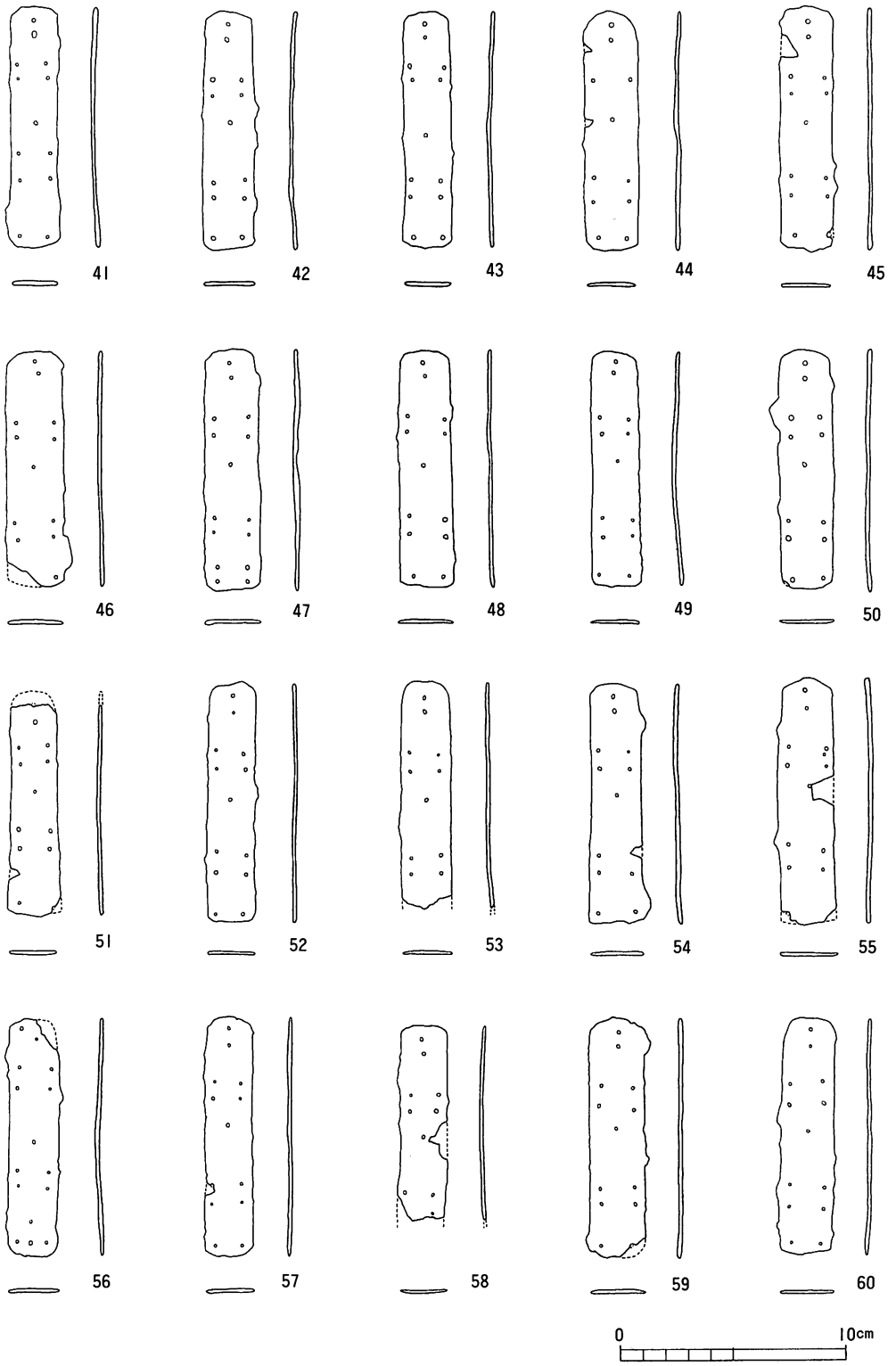


图-29 1号墳石室内出土遺物(6) (挂甲小札)

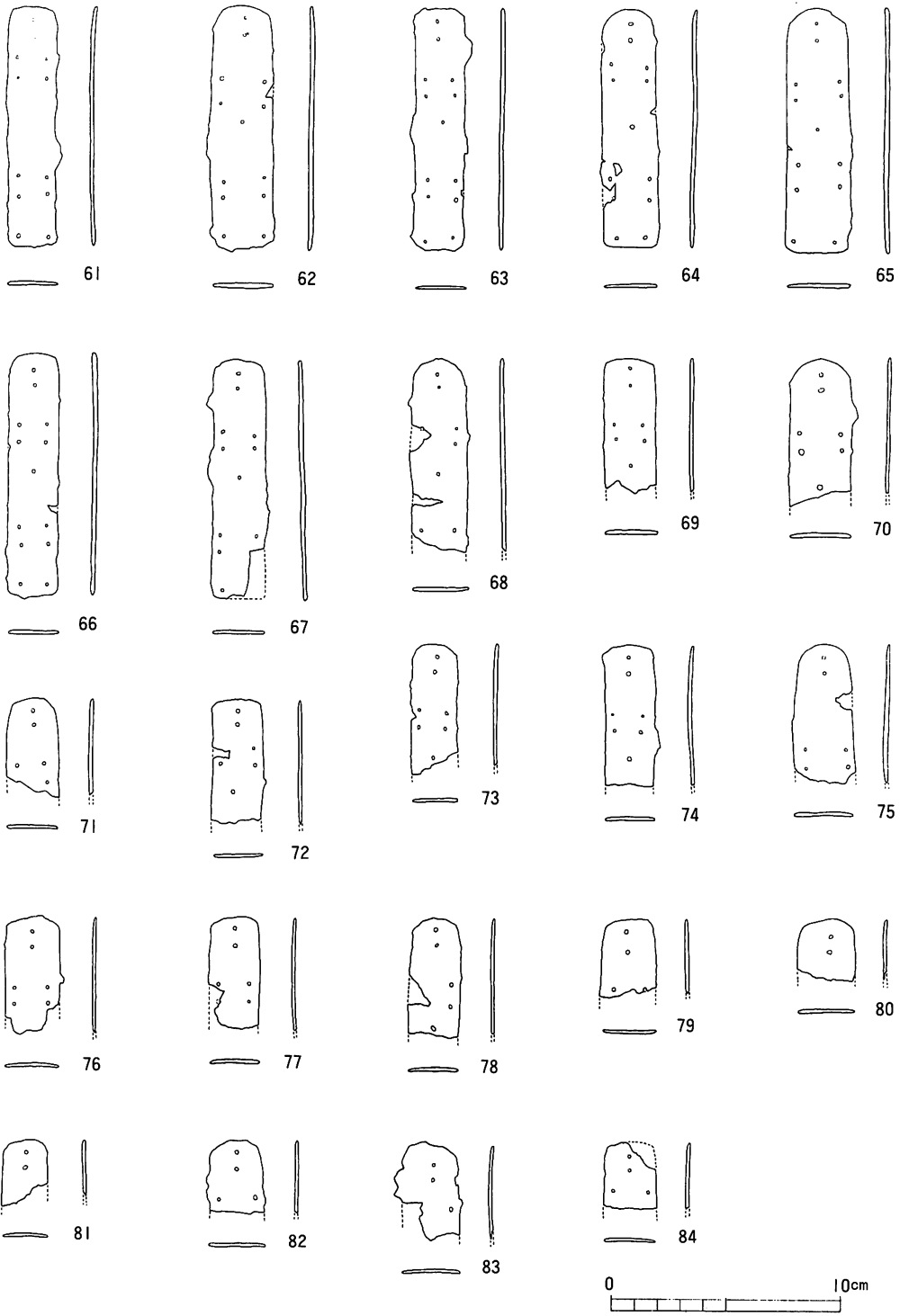


图-30 1号墳石室内出土遺物(7) (挂甲小札)

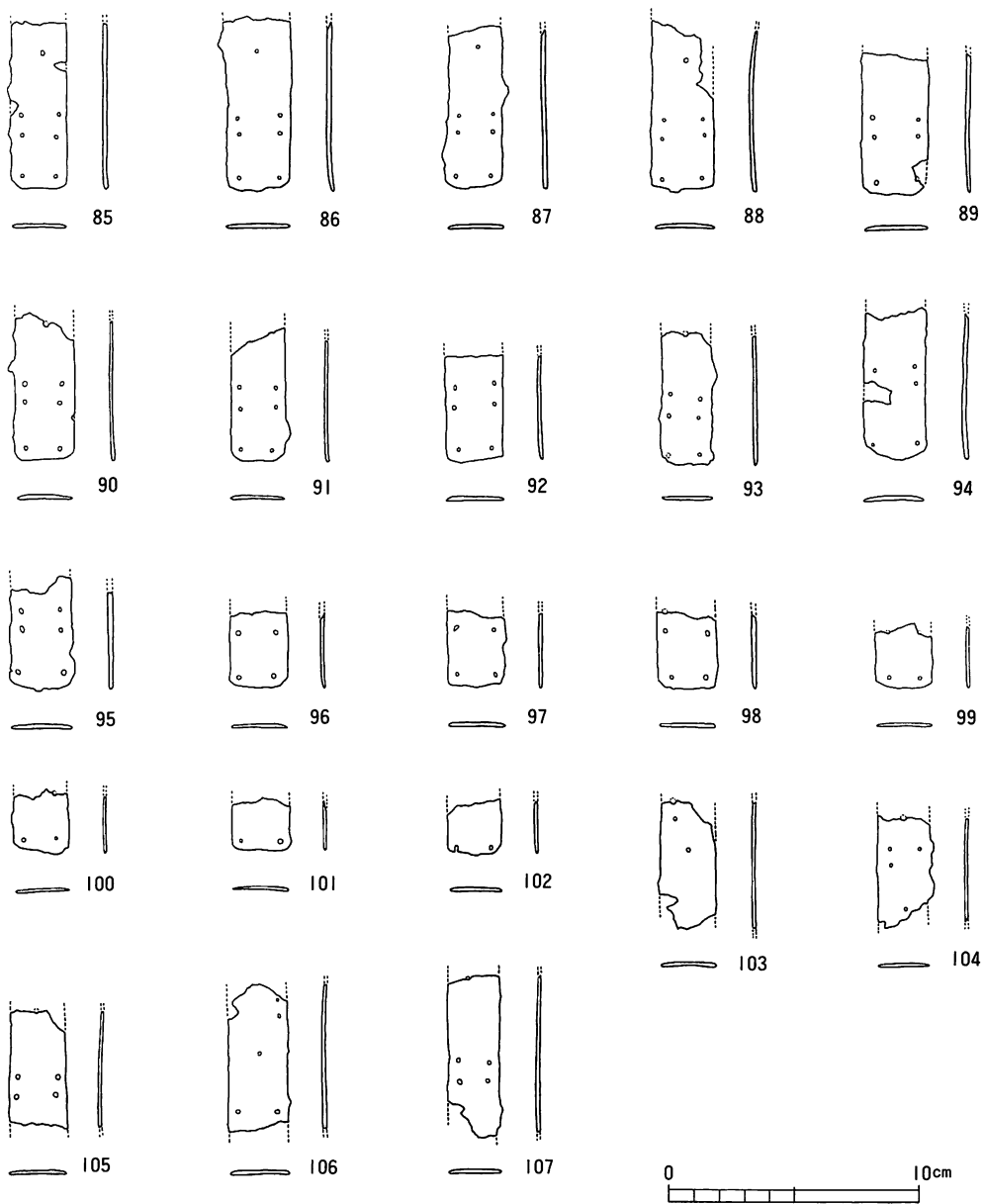


図-31 I号墳石室内出土遺物(8) (挂甲小札)

は中実、頭部付近は中空になっているものと思われる。頭部には打撃によると思われる潰れのような歪みがみられる。39は40と同様の先端部形状から、同種の工具として扱ったが刀子の茎の可能性もある。

● 挂甲小札 (図29~31)

実測可能なものが67点出土している。長さ10.2~10.7cm、幅2.1~2.7cm、厚さ0.15cmを前後する長方形、ないしは隅丸長方形の鉄板に穿孔している。上辺が円弧を描くものも多い。完形品の重量は、最も軽いもので8.1g、重いもので16.2gを量るが、錆や、土砂の付着等、遺存の現況に起因する重量差が大きい。比較的良好な遺存状況の個体での計測値は、10gを前後する範囲におさまる値を示している。穿孔は径1~2mmの円孔が13箇所に穿たれるのが基本的なパターンである。中軸上頂部に縦2孔、中央部に1孔を穿ち、縦方向の緘しに用い、両側辺部の上下4箇所の縦2孔は、横綴じに用いられる。また、下辺両隅の2孔は下搦みに用いられたものと思われる。小札の結合素材については、その遺存がみられず不明であり、具体的な結合方法についても不詳である。

● 装身具 (図32)

● 玉 (図32-108~154)

すべてガラス製の小玉、丸玉で49点出土している。うち2点の小玉は破砕品で復元は不能であった。従って図化できたのは47点である。108~117は透明な水色の小玉で、径3.5mm~5.4mm、比較的扁平なものが多い。118は不透明な水色、径5.2mm、119~121は不透明な黄緑色、うち119・120は径2.9mmと最も小さい。122~154は群青色の丸玉で、径は5.7~10.7mmを測る。

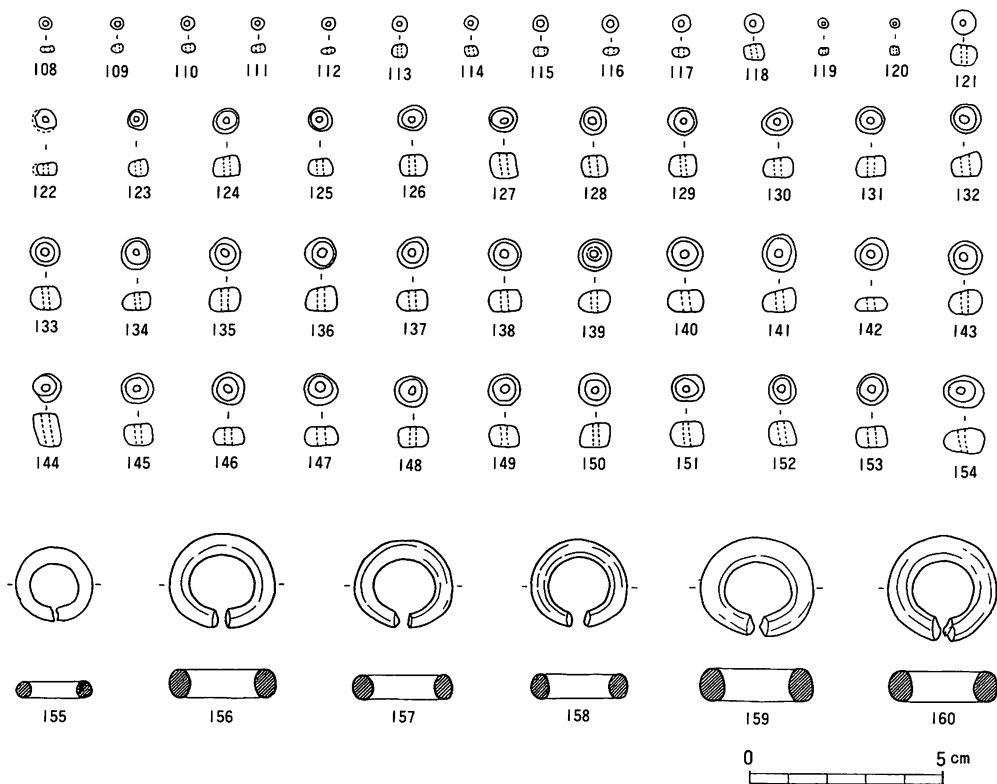


図-32 1号墳石室内出土遺物(9) (装身具)

●耳環（図32-155~160）

いずれも銅芯を薄い銀板で被覆しており、遺存状況良好なものにつきあわせ部小口には、被覆銀板を絞るようにまとめて、小口を塞いだ様子が観察できる。155は外径2.02cm、内径1.25cm、重量2.7gの小型品で、錆化、剥離が進行しており、遺存状況は良くない。断面は円形で、刀装具の可能性もある。他の5点は概ね良好な遺存状況である。156は外径2.72cm、内径1.69cm、重量15.4gを測る。157・158はセットになるものと思われ、近似した法量を示す。157の外径は2.55cm、内径1.56cm、重量11.6g、158はそれぞれ2.55cm、1.59cm、11.0gを測る。159・160は外径2.95cm、2.82cm、内径1.65cm、1.56cm、重量21.6g、18.3gとなり、やはりこれらもセットになるものと思われる。

周溝出土の遺物（図33、34）

周溝の北西半は、既に削平され失われており、なおかつ、遺存部分に関しても既存施設等の制約のため、一部のみの検出にとどまった。6点の須恵器は南コーナー一部でまとまって検出され、12点の石器類は流入土中に散在して検出されている。

●須恵器（図33）

●高坏（図33-161・162）

脚裾部を欠く161と、脚162が出土している。いずれも無蓋高坏である。161は坏部口径13.2cm、坏部高4.4cmを測る。坏部は底部から鈍い稜をなし、軽く屈曲して立ちあがり内湾して外上方に開く。口縁下外面に沈線を1条巡らせている。脚には透しを持たず、中位に浅い凹線を1条施している。裾部を欠失しているが、この欠失部分から外方向へ水平に近く伸び、162と同様の裾部になるものと思われる。162は坏部を欠失している。脚高6.0cm、脚裾径9.8cmを測る。脚中位に1条の凹線を有し、脚端面は凹面をなす。

●平瓶（図33-163・164）

163は口径5.6cm、器高14.2cm、体部最大径14.2cmを測る。体部は最大径を中位よりもやや上に持つ扁球形をなし、体部の偏った位置に僅かに内湾しながら逆「ハ」の字状に開く口頸部が立ち上る。口頸部中位に浅い凹線を1条施されている。底部から体部中位までは逆時計方向の浅い回転ヘラ削り、その他は内外面ともに横撫で調整される。体部は天井部で粘土円板によって塞がれている。164は口径6.3cm、器高13.3cm、体部最大径14.5cmを測る。底部は、ヘラ切り未調整のままの平底で、163よりも若干扁平な体部は最大径を中位よりやや上に持つ。基部の比較的太い口頸部は、直線的に逆「ハ」の字状に開いた後、口頸部に至って内湾する。端部は尖り気味に丸くおさめる。体部は天井部にて粘土円板で塞がれている。体部下半分の外面は逆時計方向の回転ヘラ削り、その他は内外面ともに横撫で調整されている。

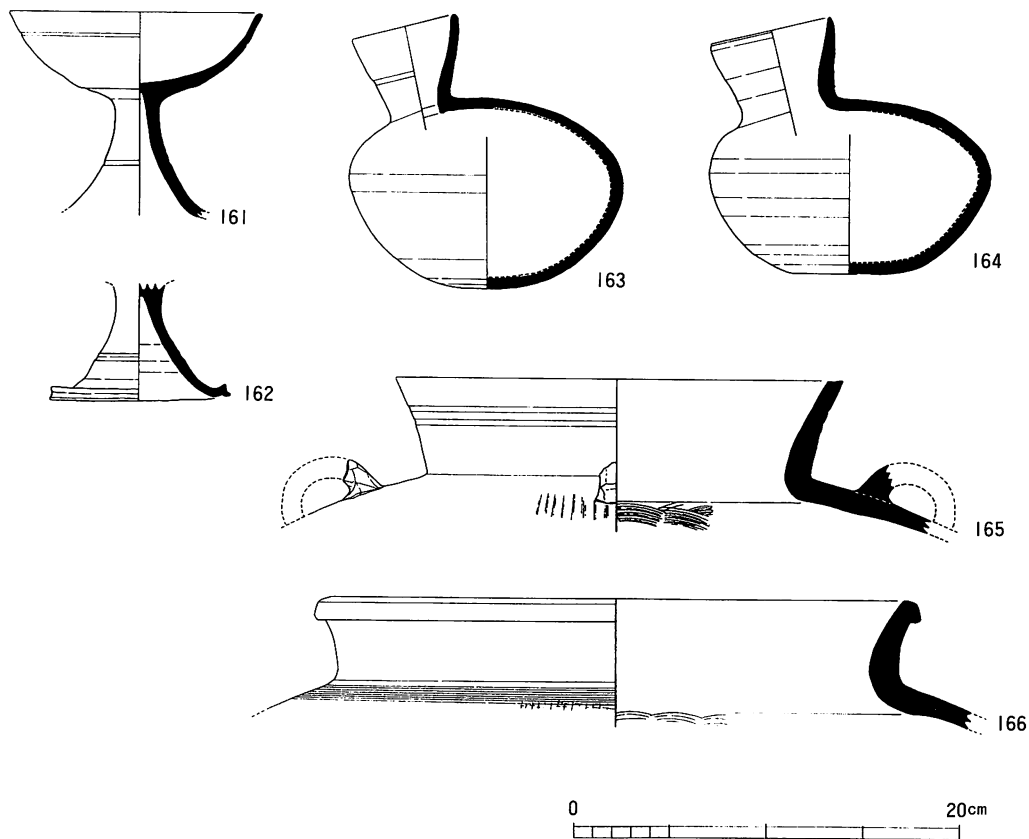


図-33 Ⅰ号墳周溝出土須恵器

●甕 (図33-165・166)

口頸部片が2点出土している。165は耳甕であるが、耳が付されるのが何箇所になるのかは不明である。推定口径23.2cmを測る。直線的に外上方に開く短い口頸部は、中位よりやや上に2条の凹線を施される。水平な口端部は、撫でによる僅かな凹面をなす。肩部には耳の一部が遺存しており、環状になるものと思われる。体部外面の平行叩き、内面の同心円文は、頸部直近まで施されている。166は推定口径31.3cmを測る。口頸部は短かく外反し、口端部に接して断面三角形の突帯状を巻かれるため、端部上面と外面に面を持つ。体部の叩きは頸部屈曲部のやや下まで行われ、さらにその上をカキ目によって調整されている。頸部外面はカキ目の後、横撫でを施されている。

●石器 (図34)

●石鏃 (図34-167~174)

凹基無茎鏃168~170、平基無茎鏃171、円基鏃172、尖基鏃173・174等がある。172が赤色チャート製、他はすべてサヌカイト製である。いずれも剝離面をそのまま残し、縁辺部のみ

の調整によっている。

●石錐（図34-175）

サヌカイト製で、頭部、錐部の全面に調整が施され、頭部をつまみ状に造り出されている。錐先端部は、磨滅あるいは折損によって鋭利な部分が失われたものと思われる。錐部の断面は、不定形な五角形を呈している。

●剥片石器（図34-176）

直角三角形、断面楔形の剥片の長辺のみを調整されたスクレーパーである。石材はサヌカイトを用いている。

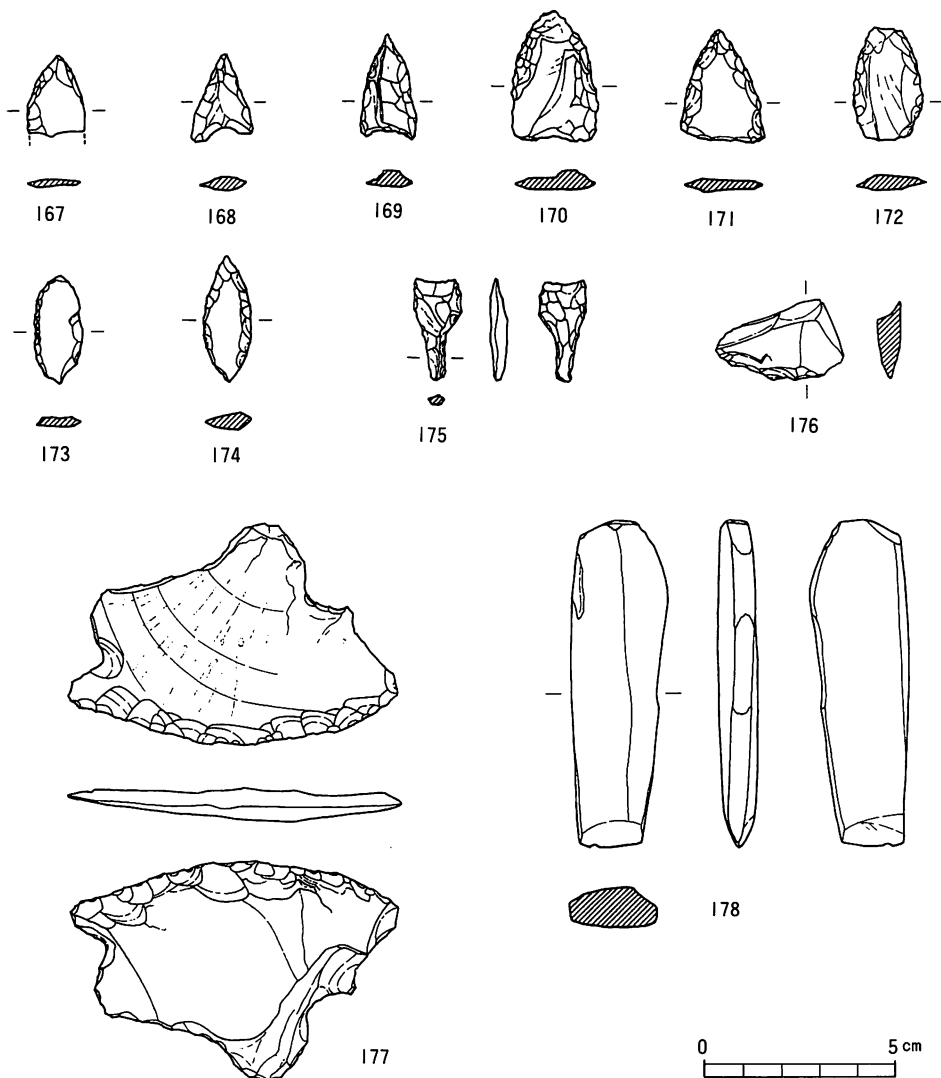


図-34 Ⅰ号墳周溝出土石器

●石匙（図34-177）

サヌカイトの台形状横長剝片の下辺を両面から調整して刃部とし、上辺の打点部分をつまみ状につくり出している。側縁の一辺に入れられた抉りは、対辺のつまみ部を形成する抉りとともに安定した保持のために設けられたものと思われる。

●磨製石斧（図34-178）

全長8.5cm、刃部幅1.7cm、最大厚1.1cm、重量40.3gの扁平両刃の小型石斧である。明確な使用痕は観察できないが、刃部の刃こぼれの際に付いたと思われる2条の右下りの細線が左主面に見られ、縦斧として使用されたものと考えられる。前後側面、基端面および、左右主面の刃部寄りを磨かれている。後側面のやや上位寄りに敲打による浅い抉りを設けられている。石材は緑泥片岩である。

3. 2号墳の調査

① 遺構

墳形と規模

2号墳は、1号墳の南約32mの位置で検出されたが、既に大きく削平を受けており、かろうじて石室基底石が残存するのみであった。したがって墳丘盛土をはじめ、地山成形痕、周溝の検出もみられず、墳形、墳丘規模等を明らかにすることはできなかった。

横穴式石室（図35～37）

2号墳の主体部は、主軸をN56°41'20"Eにとる両袖型の横穴式石室である。削平のため、基底石のみの遺存であり、羨道端も段カットによって失われている。閉塞施設の遺存も無い。石室残存長5.3m、玄室長3.0m、幅1.8m、玄門幅1.0m、羨道幅0.9mを測る。石室プランにあわせて床面地山を掘り窪め、大型の石材を横置きして腰石としている。玄門袖石のみは縦置きされる。石材は花崗岩を用いている。

奥壁より1.2m内外の床面には、河原石と15～30cm程度の割り石が雑然と敷かれ、さらにこの床面施設のレベルよりも浮いた状態で、玄室床面全体に10～30cm大の割り石が敷かれている。

遺物の出土状況（図38）

遺物は玄室内敷石上より11点の須恵器、土師器1点、鉄器5点、耳環、ガラス玉それぞれ1点ずつが、羨道部より土師坏が1点出土している。玄室奥壁部では須恵器坏身（179）、平瓶（181）、長頸壺（185）、と、平全時代前期にまで下る須恵器瓶（191）、同時期と思われる土師器甕（189）が、北西側壁部中央よりやや奥寄りで脚付子持広口壺（187）が出土している。また、左袖部では坏蓋（180）、脚付広口壺（184）、長頸壺（186）を、玄室中央部で台付長頸壺（188）、玄門部右袖寄りで台付短頸壺（183）を出土している。ガラス小玉は玄室左奥で、耳環は玄室中央奥寄りで検出された。羨道部では轆轤土師坏（190）を1点出土しており、これも平安時代まで下るものと思われる。

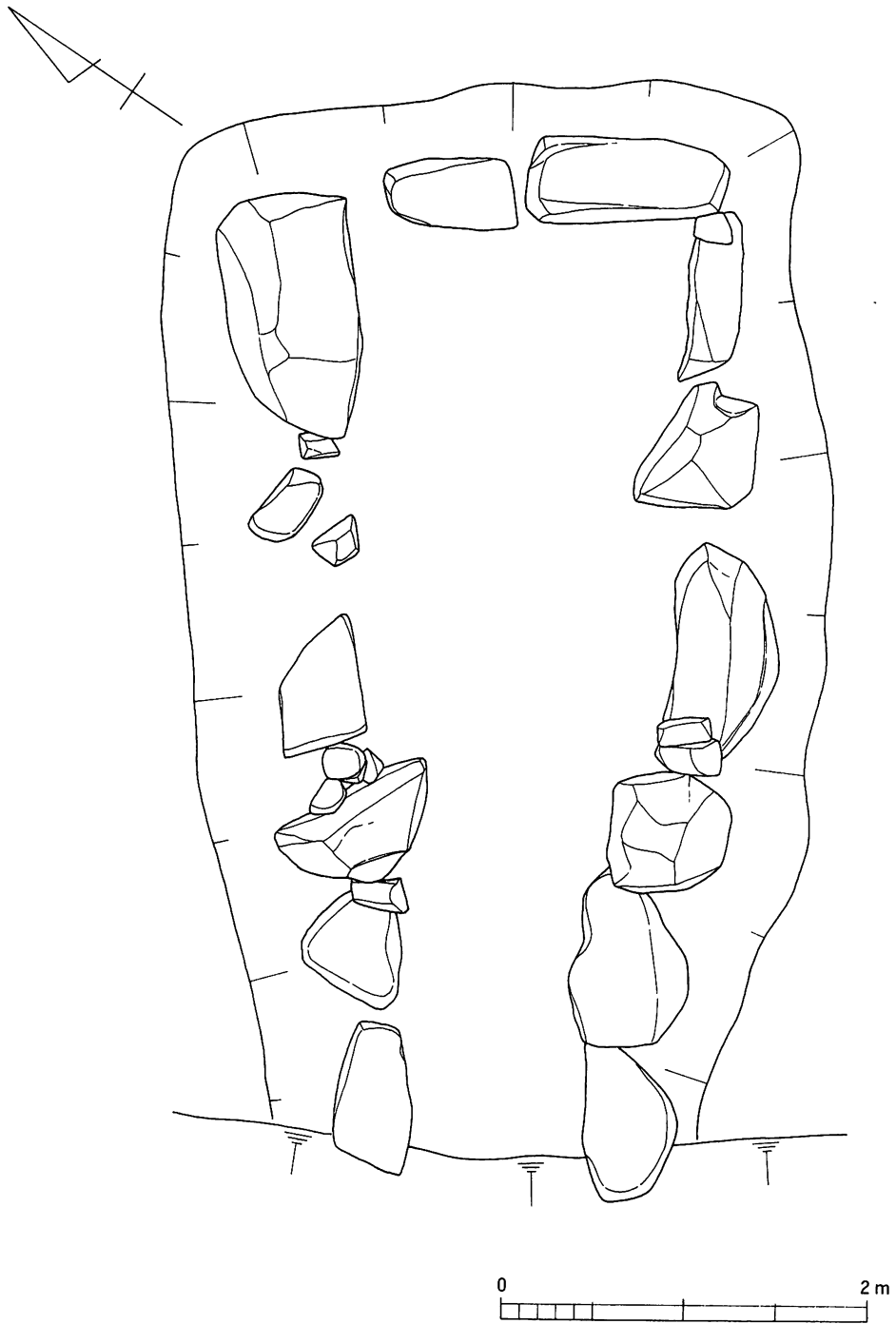
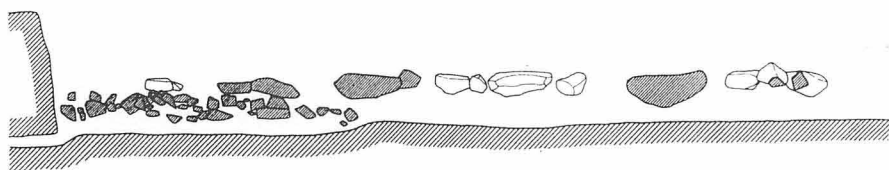


图-35 2号墳石室平面



38.50

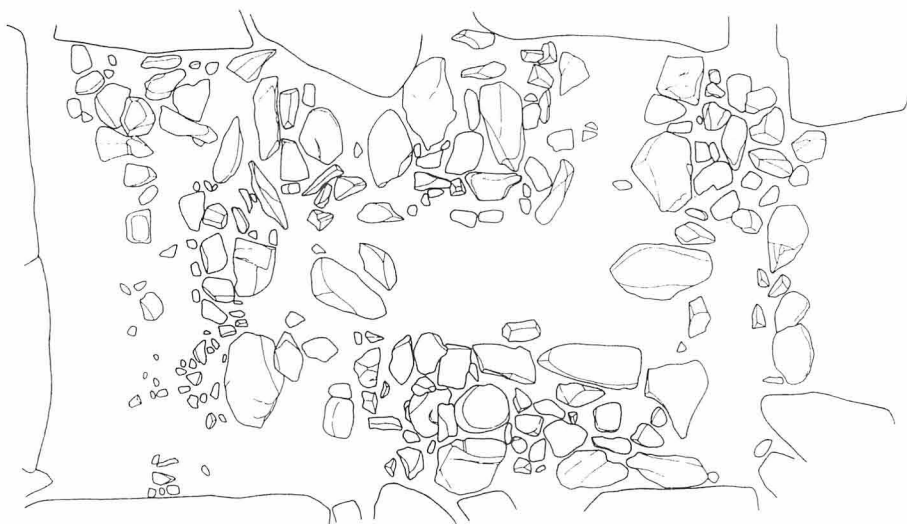


图-36 2号填玄室床面状况

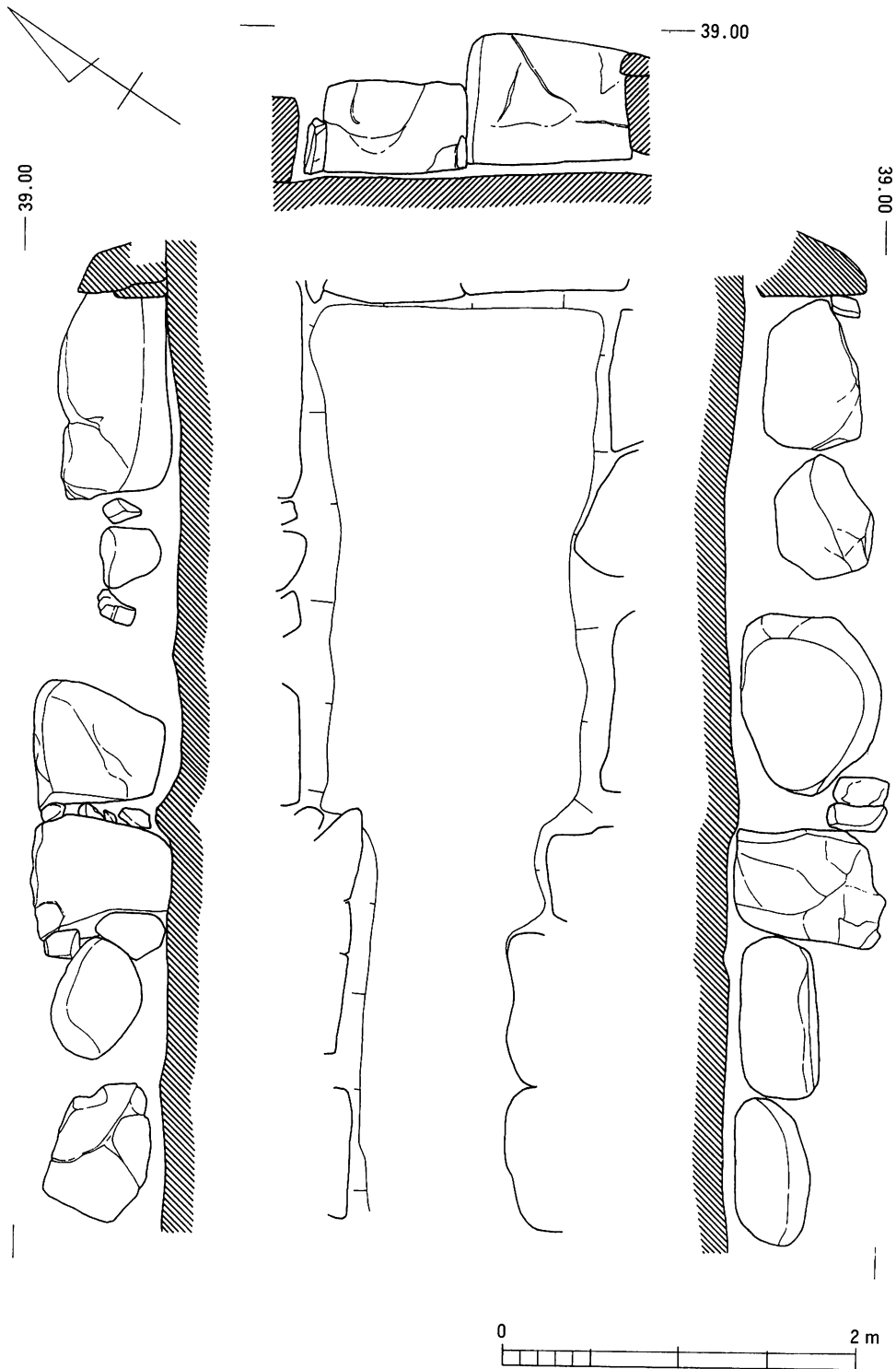


图-37 2号墳石室展開図

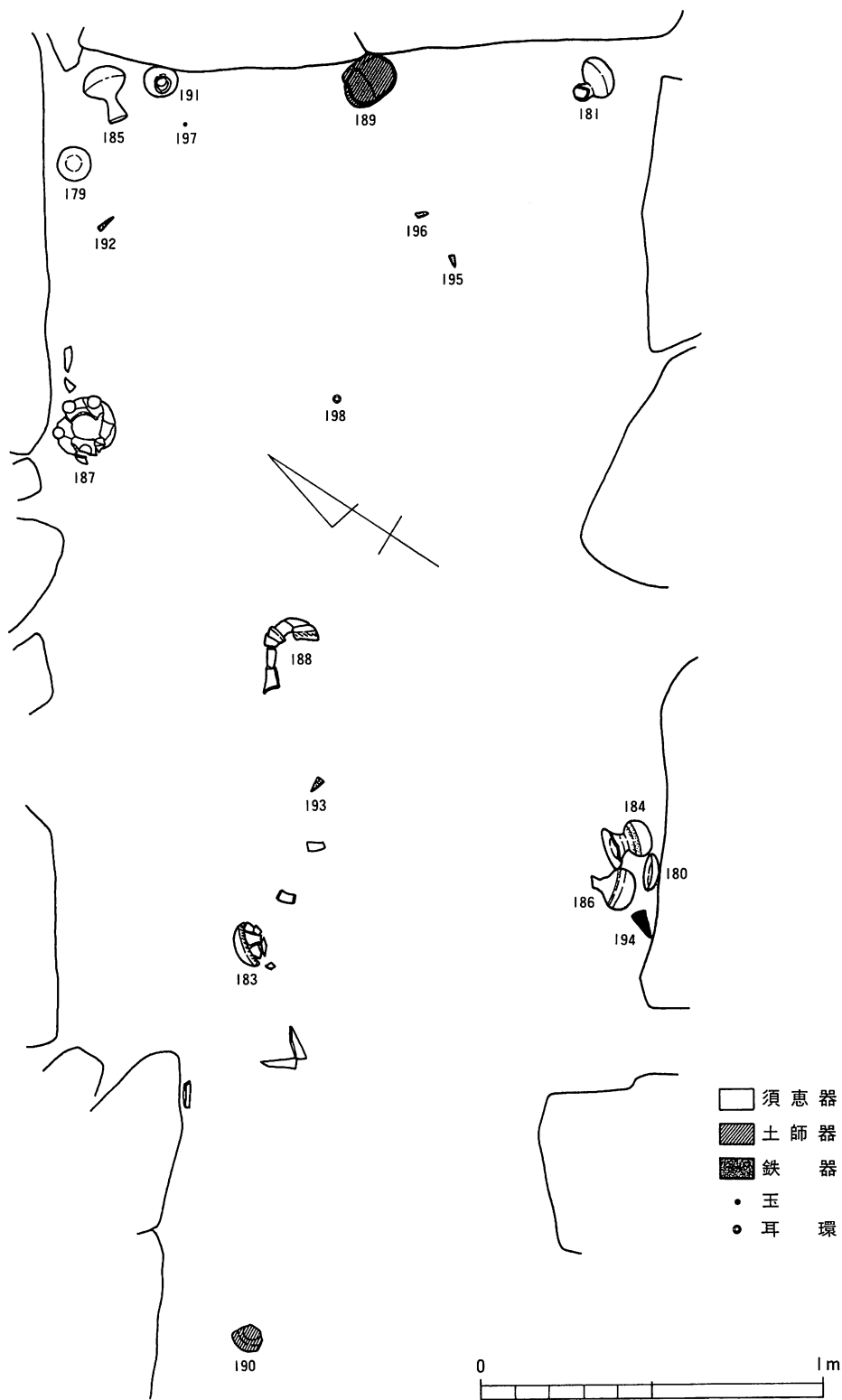


图-38 2号墳石室内遺物出土状況

② 遺物 (図39～41)

●須恵器

●坏身 (図39-179)

口径10.8cm、器高4.2cmを測る。径5cmの平坦な底部にやや深めの体部を持ち、立ち上りは短かく内傾し、受部もまた短い。焼成時の還元がほとんど行われていないため、暗橙色を呈し、器面も荒れている。

●坏蓋 (図39-180)

口径11.2cm、器高3.7cmを測る。口縁部で鈍く屈曲し、端部を丸くおさめている。天井部外面はヘラ切り未調整、その他の部位はすべて横撫でされている。轆轤は時計方向に回っている。

●平瓶 (39-181)

口径6.1cm、器高12.2cm、体部最大径14.2cmを測る。上面が比較的平坦な扁球形をなす体部の偏った部分から緩く内湾する口頸部が立ち上る。端部は丸くおさめられている。底部は不定方向の雑な撫で、最大径部以下の体部は回転ヘラ削りの後横撫でされており、その他は横撫でで調整されている。体部上面中央部には、成形時の粘土円板塞ぎ痕が明瞭に認められる。また、底部内面には、口頸部接合時の穿孔により切りとられた粘土塊が癒着している。

●高坏 (図39-182)

口径10.5cm、器高13.3cm、脚裾径10.2cmを測る長脚2段透しの無蓋高坏である。坏底部からの立ち上り屈曲部と坏部中位の2箇所に段状の稜を持つ。口端部は丸くおさめられる。脚中位に2条の凹線を施され、この凹線をはさんだ上下に長方形の透しが対角2方向に切りとられている。

●台付短頸壺 (図39-183)

「ハ」の字状に外方に強くふんばる台を持つ短頸壺である。口径8.0cm、器高15.4cm、台部径10.2cm、台部高2.7cmを測る。半球形の体部下半から最大径部で強く屈曲して肩部へと続く。直口のやや長めの口頸部は直上に立ち上り、端部は内側に傾いた面をなす。端面は横撫でによる段状の凹面をなす。体部最大径部に幅広の、その下方にやや幅の狭い凹線を施し、この2条の凹線に挟まれた部分に櫛歯状工具による右上りの刺突列点文を施文される。体部外面施文部以下は回転ヘラ削りの後、軽く横撫でされている。他の部分は内外面ともに横撫で調整である。轆轤は逆時計方向に回っている。

●脚付広口壺 (図39-184)

脚部を欠失している。口径15.6cm、体部最大径15.2cm、残存高18.3cmを測る。平坦な体底部から外上方に立ち上った体部は、その中位よりもやや上に最大径を持ち、内湾しながら肩部へと至る。ラップ状に外上方に開いた頸部は、口縁部に至って更に大きく開き、外面に帯状に肥厚する。口端部は尖り気味に丸くおさめる。体部最大径部から肩部にかけて3条の凹

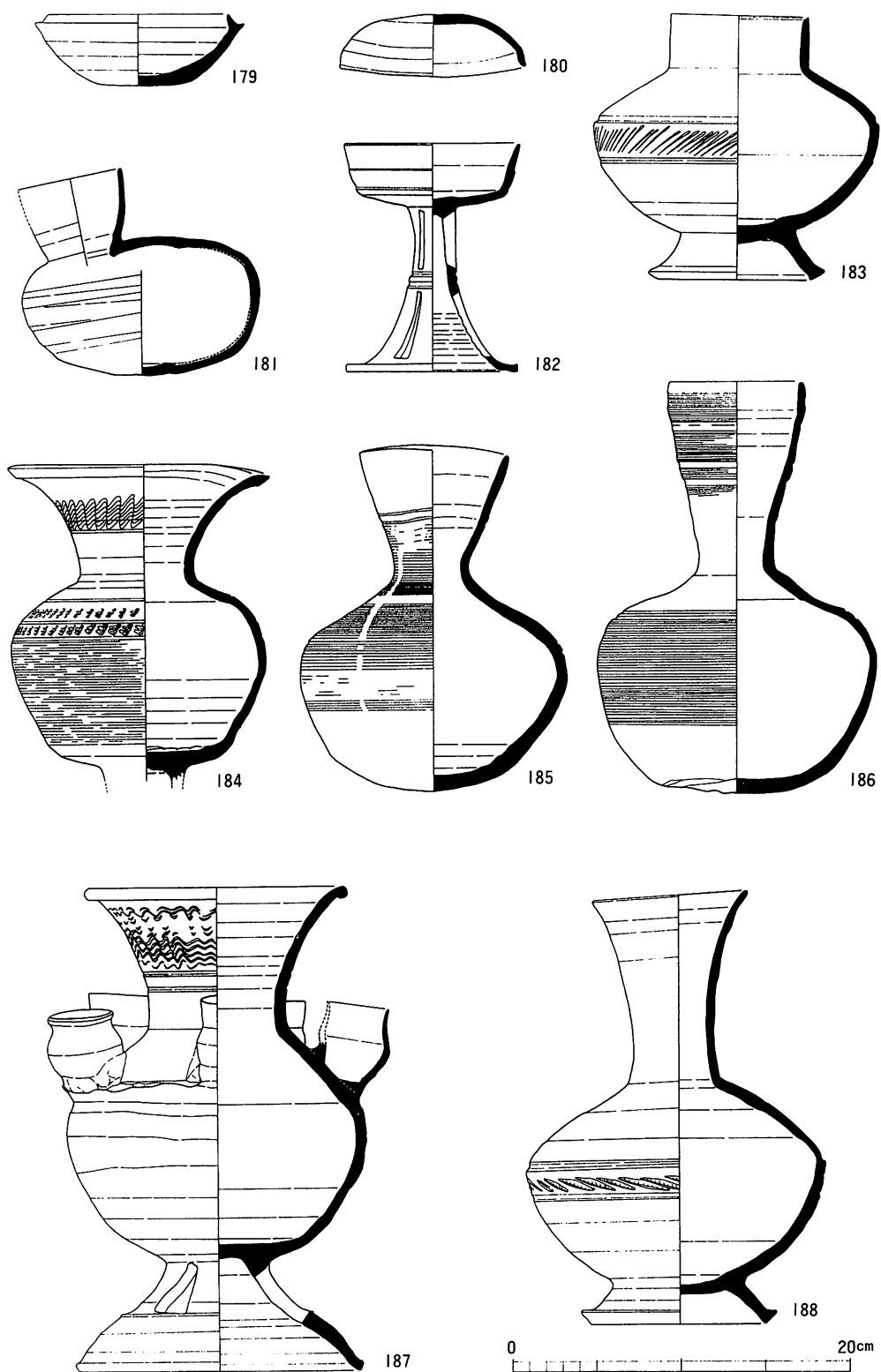


图-39 2号墳石室内出土遺物(1) (須恵器)

線を巡らせ、凹線の区画内に櫛歯状工具による右上りの刺突列点文を施す。また、頸部中位に不明瞭な凹線を1条巡らせ、これより上位に櫛描き波状文が施文されている。体部と脚部の接合は、脚部と体底部を同一工程で製作した後、体部底部分の穴を塞ぐように接合されている。体部は、底部を除いてカキ目による調整が行われているが、施文部より上位はその後撫でられており、カキ目は不明瞭である。体底部にはへう削りを施されている。なお、倒立して焼成されたものと思われ、器外表面、脚部内面に自然釉の付着がみられるが、内面にはみられない。

●長頸壺（図39-185・186）

185は焼け歪みのため正確な口径は不明であるが、約9.0cm前後、器高20.2cm、体部最大径15.9cmを測る。不安定な丸底の底部から外上方に立ち上り、体部高の中位で最大径を測った後、内湾して「ハ」の字状の肩部に至る。さほど長くない口頸部は、外上方に直線的に開く。体部の最大径部よりよりやや上に2条、頸部の中位に2条の凹線が施されるが、やや間隔の広いカキ目とも相俟って非常に不明瞭である。体部の成形は、最終的に底部を塞ぐかたちをとっており、底部から体部の下位にかけての外面には不定方向の雑な撫でつけがみられる。体部最大径部以上の外面にはカキ目調整が施されている。186は口径7.9cm、器高24.0cm、体部最大径16.5cmを測る。平坦気味の底部に内湾する体部は、最大径を体部高の中位よりもやや上にとった後、肩部でやや外反、185よりも長めの口頸部が立ち上る。肩部に2条、口頸部中位よりもやや上に2条、口縁下に1条の凹線を施される。185同様、底部を最終的に塞がれており、底部から体部下位には不定方向の撫でつけがみられる。肩部より下の体部、口頸部中位より上には密なカキ目が施されている。

●脚付子持広口壺（図39-187）

脚付広口壺の肩部に断面三角形の突帯を貼り付け、この突帯から肩部にかけて5個体の小壺を配している。親器は口径15.7cm、器高28.5cm、体部最大径17.8cm、脚高6.4cm、脚裾径17.0cmを測る。体部下半はボウル状を呈し、肩部の突帯を経て「ハ」の字状にすぼまる。口頸部はラッパ状に外上方にひろがり、端部を下方に肥厚させ丸くおさめる。脚は外下方に一旦外反して広がった後、段状の稜を界して内湾気味に広がり、端部に至って僅かに外反する。稜より上の区画の対角2方向に二等辺三角形の透しを切りとられている。口頸部は、中位よりもやや下に2条の凹線を巡らせ、この凹線よりも上位の口縁部にかけて粗雑な櫛描き波状文を施文している。5個体の子器のうち、4個体は体部の張りをあまり持たない直口の素口縁であるが、1個体は体部に張りを持ち、口端部を外方に肥厚させて丸くおさめた短頸壺の形態をとっている。親器の突帯部以下から底部にかけての外面には逆時計方向のへう削りを施されているが、底部を除いた部分はその後横撫で調整されている。

●台付長頸壺（図39-188）

口径9.2cm、器高25.2cm、体部最大径18.7cm、台部径10.3cmを測る。半球形の体部下半か

ら稜を持って屈曲し、「ハ」の字状にすぼまる肩部に外反しながら外上方に長く伸びる口頸部を持つ。体底部には外下方に開いた丈の低い台が貼りつけられている。体部屈曲部に幅広の、そのやや下方に少し幅の狭い凹線を巡らせ、凹線間に櫛歯状工具による右下りの列

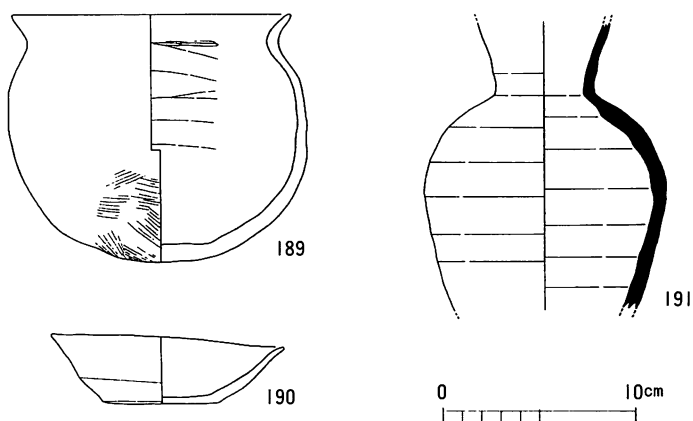


図-40 2号墳石室内出土遺物(2) (須恵器・土師器)

点文を施されている。施文部より下位の体部外面には逆時計方向の回転ヘラ削りを行い、その他の部分は横撫で調整されている。

●瓶 (図40-191)

底部と口縁部を欠失しており、残存高14.9cm、体部最大径12.5cm、頸基部径5.1cmを測る。長胴の体部は丸味を帯びた肩部から最大径部を経て直線的にすぼまり、底部にはおそらく高台が付されていたものと思われる。内外面ともに横撫で調整されている。

●土師器

●甕 (図40-189)

口径14.8cm、器高12.8cmを測る。丸底、球形に近い胴部から外反して短い口縁部が付される。口端部は丸くおさめている。器高の $\frac{1}{3}$ 以下、底部までの外面は不定方向の刷毛目、以上は回転を利用した横撫で、胴部内面はヘラ状工具による横方向の粗雑な撫で調整を施されている。

●坏 (図40-190)

轆轤成形による平底の坏である。口径12.5cm、器高3.5cmを測る。底部からの立ち上り外面に回転ヘラ削りを行われるため、体部に稜を持った屈曲部を有する。この屈曲部より上の外面、および内面の全体には横撫でを施されている。底部には回転ヘラ切り痕がみられる。

●鉄器 (図41-192~196)

玄室内床面の各所に散在して5点が出土している。うち、3点は鎌、2点が刀子である。

●鉄鎌 (図41-192~194)

三角形筥被平根鎌192と、鑿頭式平根鎌193・194とが出土している。いずれも茎端部を欠失しており、現況で192が7.1g、193が11.5g、194で13.9gを量る。

●刀子（図41-195・196）

195は刀身端部と茎端部を欠いている。現況長8.6cm、棟関を有する。196はほぼ完形、刀身先端部を僅かに欠く。推定復元長9.2cm、うち茎長4.2cm、195同様棟部に関を持っている。

●装身具（図41-197・198）

●玉（図41-197）

奥壁部敷石上の出土、透明な水色のガラス製小玉である。径5.3mm、孔径2.2mmを測る。

●耳環（図41-198）

奥壁部敷石上の出土である。外径2.86cm、内径1.50cm、重量11.1gを測る。銅芯を薄い銀板で被覆した銀環である。

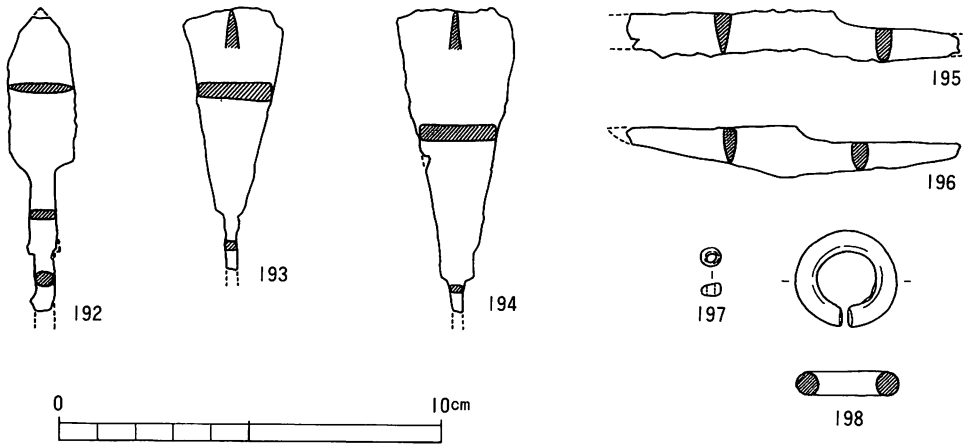


図-41 2号墳石室内出土遺物(3)（鉄器・装身具）

〔Ⅲ〕 ま と め

今回調査の両古墳のうちでも、特に1号墳は石室規模、その副葬品の内容から推して、この地域の首長墓であることは間違いない。北谷・権現古墳群内では、この塚本1号墳や、市指定文化財北谷古墳の外、大型石材による横穴式石室を主体部とする古墳3基が分布調査により確認されており、同様の首長墓系譜につながるものと推測されるが、いずれも未調査で詳細な内容等は不明である。ここでは、1号墳、2号墳の調査成果を改めて整理しておき、今後の周辺地域の調査の基礎資料としておきたい。

1号墳では、石室内、周溝内より須恵器を出土している。これらの須恵器のうち、特に蓋坏に関して田辺昭三氏の陶邑編年、さらに7世紀前半の須恵器に関する菱田哲郎氏の見解^①をもとに検討してみると、袖部出土の蓋3・4、身8は、その他の蓋坏と比較して、その法量、蓋天井部のヘラ削り等、若干の古相を示しており、TK 209 型式におさまるものと考えられるが、同型式内でもより後出の器型と考えられる。その他の蓋坏は、TK 217 型式の範疇で捉えられるものであるが、蓋1・2は口径11cmを越え、身5・6・7は口径10cm前後と同型式のなかでは法量の大きい部類に属しており、TK 217 型式古段階に相当するものと考えられる。その他の器種、周溝内の須恵器に関しても、この型式幅の中でとらえられるものであり、したがってこの古墳の築造年代を7世紀の初頭におき、7世紀第1四半期までの短かい追葬期間を想定しておく。

1号墳では、金銅装無窓鐔圭頭大刀を出土している。本調査の後、同年、愛媛県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた、松山平野南端、伊予市上三谷所在の塩塚古墳^③においても銀装10窓鐔圭頭大刀が出土しており、目下のところ、県下でもこの2例が出土例のすべてである。塩塚古墳は、当墳と同様、大型石材を用いた横穴式石室を持つ7世紀初頭築造の長方墳であり、墳形、石室規模、出土遺物、築造年代等、当墳と共通する要素を多く持った古墳である。1号墳出土の圭頭大刀は、把と鞘を欠くため細かい型式は不詳であるが、滝瀬芳之氏の分類^④によれば、II式のいずれかに属するものである。圭頭大刀II式の多くがTK 209～TK 217型式の須恵器に伴って出土している事例に本調査の出土例も合致している。

挂甲札の出土は、伊予三島市所在の四ツ手山古墳に次いで、本例が県下2例目である。ただし、その枚数は67枚と一領の挂甲を構成するのに要するとされる800枚前後の1割にも満たず、胴丸式、柄襜式いずれの形式のどの部位を構成していたのかは残念ながら^⑤不明とせざるを得ない。

2号墳では、明らかに時代が降り、直接埋葬には関わらないと思われる3点の土器類を除いて、10点の須恵器を出土している。長脚2段透しの高坏や、蓋坏の形態、法量、さらに長頸壺の胴部形態、台部等から判断して、これらの須恵器類も1号墳と同様、TK 209 からTK 217 型式の間におさまるものと考えられ、1号墳と同時期の築造になるものと思われる。

その他、1号墳周溝内より縄文色の濃い石器類を出土しており、現在のところ具体的な遺跡、散布地等の把握はされていないが、周辺地域に該期の遺跡の分布を予想させるものである。

以上、簡単に調査成果をまとめてきたが、今回その副葬品から首長墓と判断した1号墳の被葬者が、在地の豪族層の中でどのような政治的、社会的位置を占め、圭頭大刀を通してどのように畿内政権とかかわったのか、巨石による大型横穴式石室の成立事情も含めて、検討すべき課題は多い。

注

- ①田辺昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園『研究論集』第10号 1966
同 『須恵器大成』角川書店 1981
- ②菱田哲郎 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻第3号 京都大学文学部史学研究会 1986
- ③谷若倫郎・須藤敦子 『上三谷古墳群Ⅱ』(勸愛媛県埋蔵文化財調査センター)
- ④滝瀬芳之 「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル第266号』1986
- ⑤末永雅雄・伊東信雄 『挂甲の系譜』1979によれば『延喜式』卷49兵庫寮に「挂甲一領札八百枚」との記載があり、また、備中天狗山古墳出土の胴丸式挂甲の小札総数は757枚であるという。

北谷王神ノ木古墳

図 版



調査地遠景（南より）



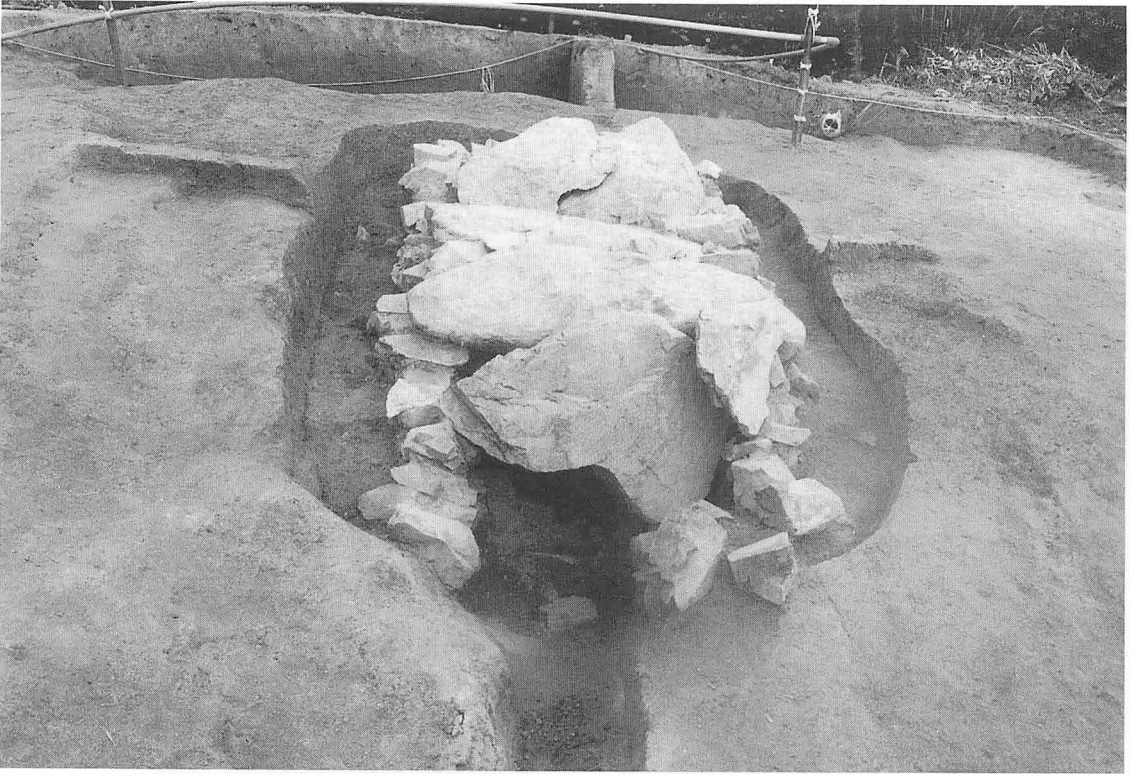
調査前1号墳丘（西より）



1号墳石室露出状況(横口部)



1号墳全景(西より)



1号墳横穴式石室(南より)



1号墳石室床面(横口部より)



1号墳横穴式石室(天井石撤去)



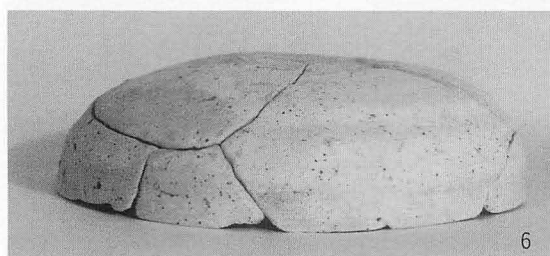
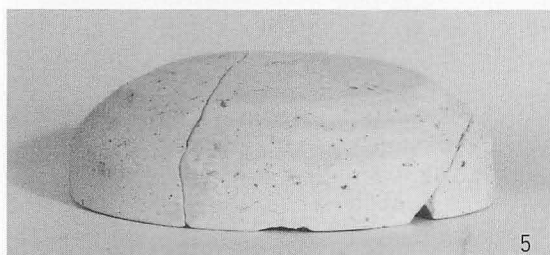
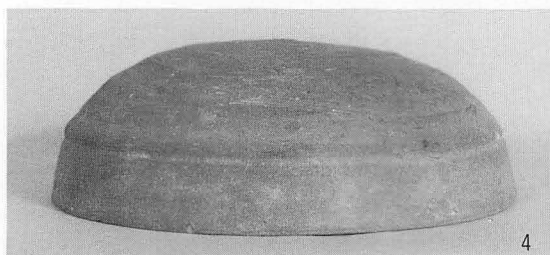
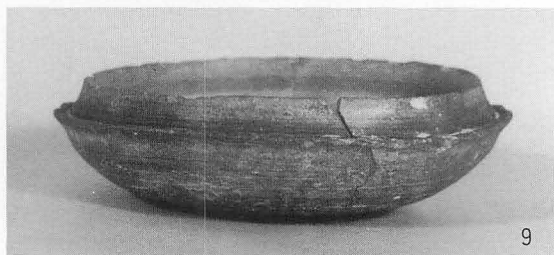
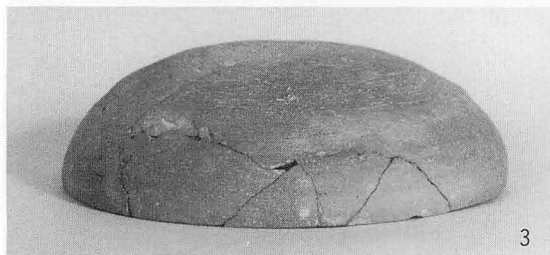
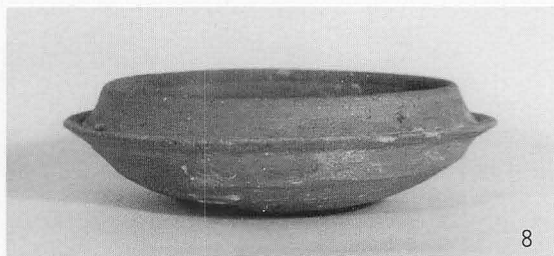
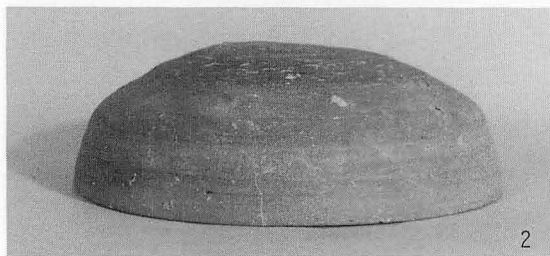
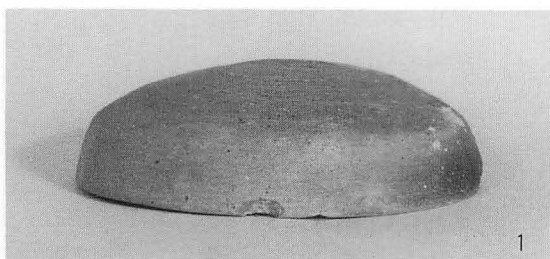
1号墳横穴式石室(墓道より)

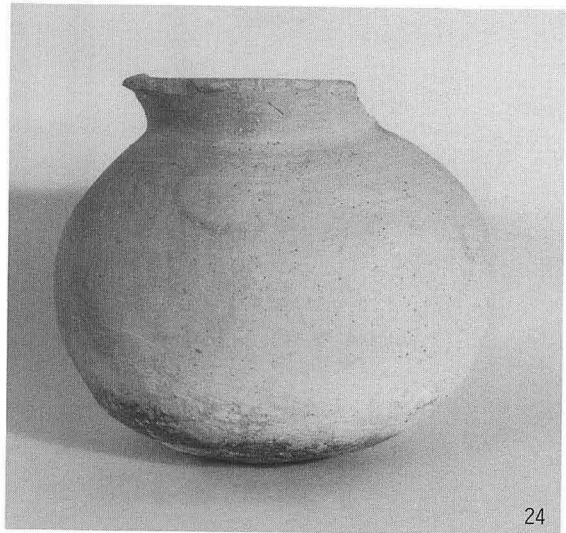
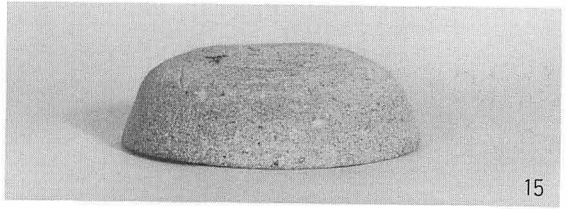
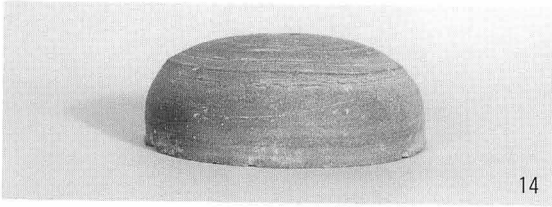


1号墳横穴式石室(西側壁)



1号墳横穴式石室(東側壁)







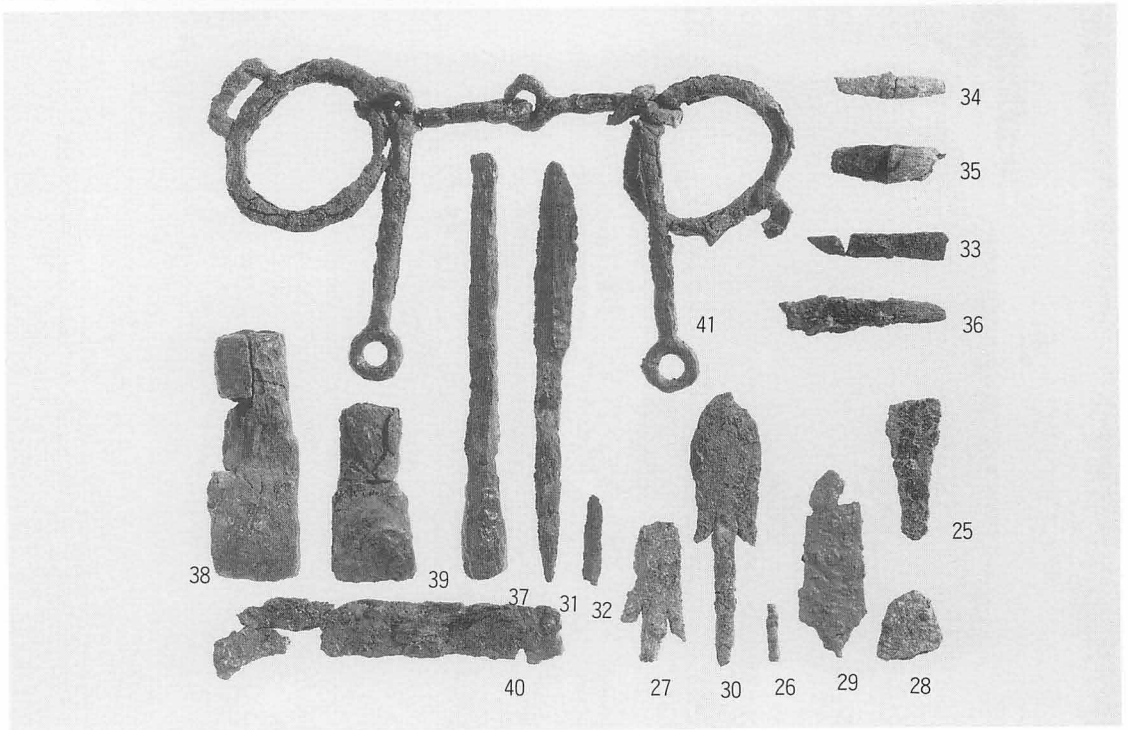
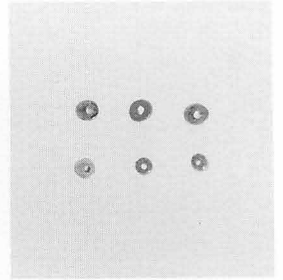
21



22



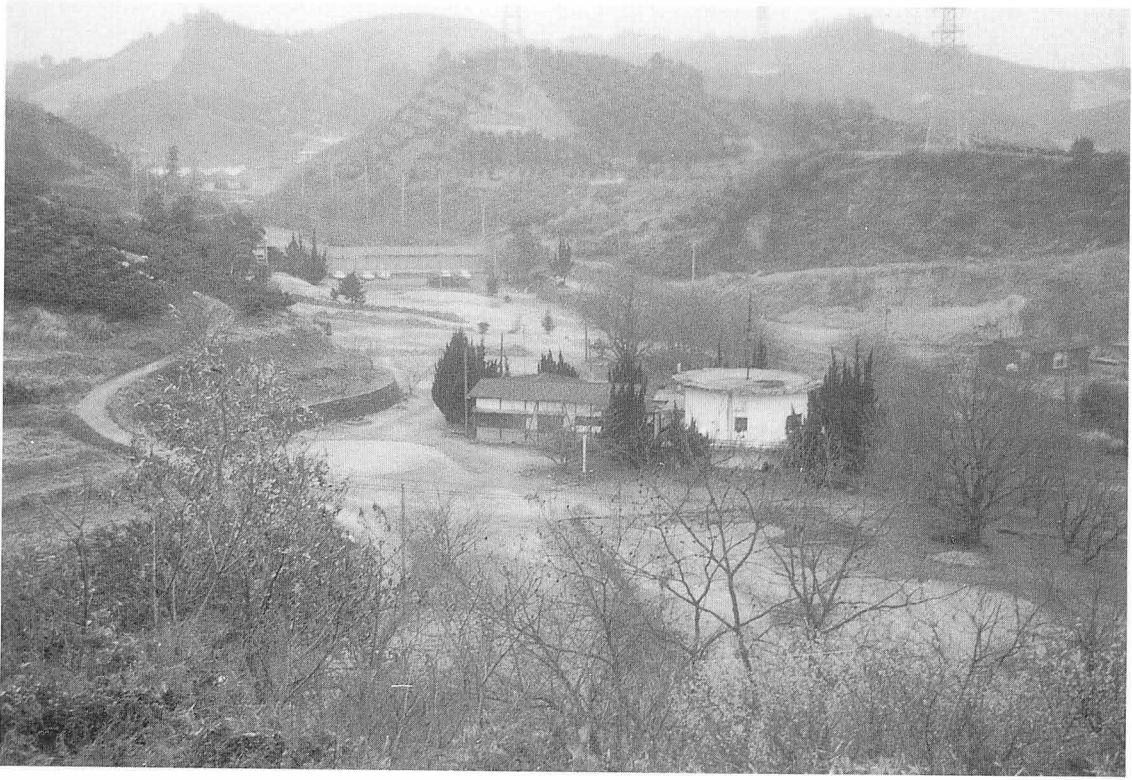
16



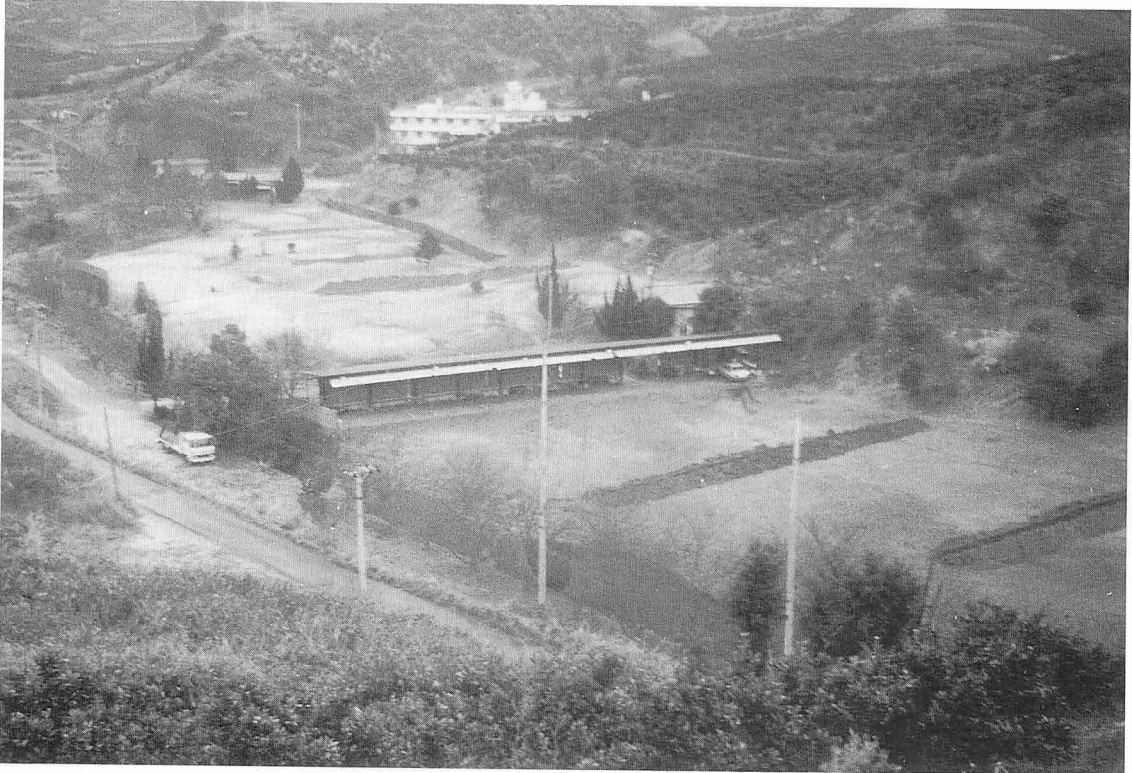
石室出土須恵器・玉・鉄製品

塚本古墳

図版



調査地全景(北東より)



調査全景(南より)



1号墳石室検出状況(南西より)



1号墳石室内遺物出土状況(右袖部)



1号墳石室床面の検出(西より)



1号墳玄室奥床面石敷



1号墳大刀出土状況(1)



1号墳大刀出土状況(2)



1号墳圭頭出土状況



1号墳刀装具出土状況



1号墳桂甲札出土状況(玄門部)



1号墳周溝遺物出土状況



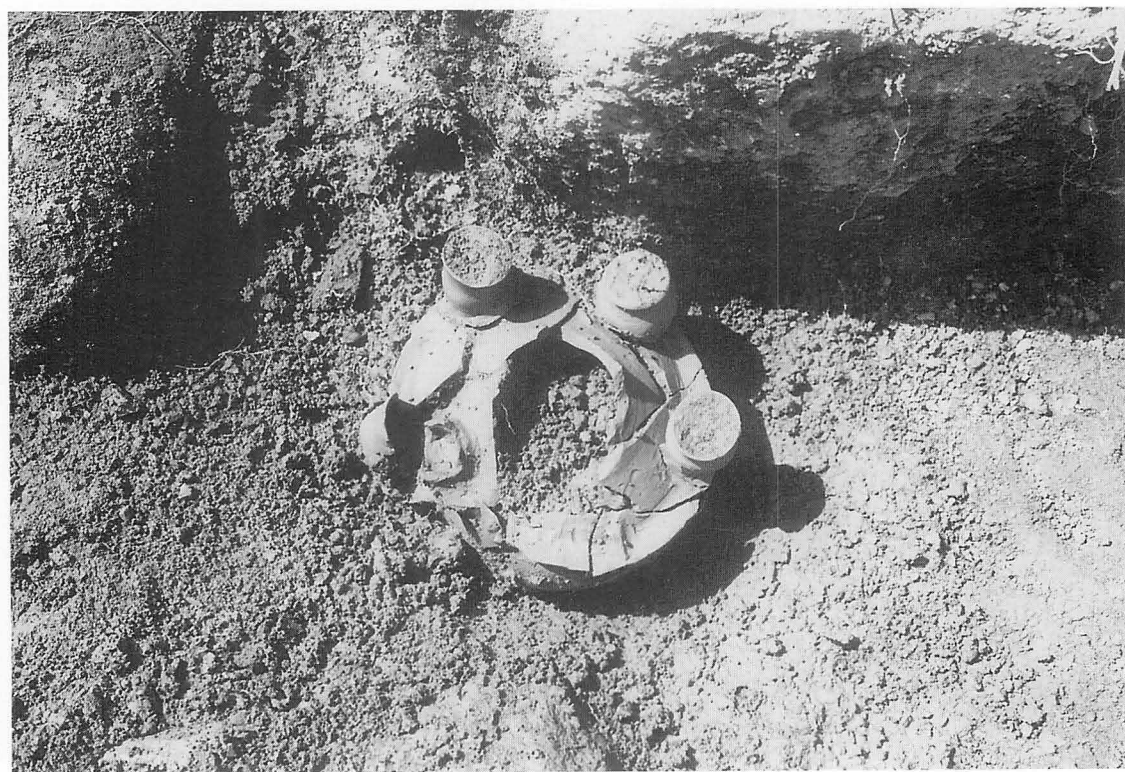
1号墳横穴式石室(羨道部より)



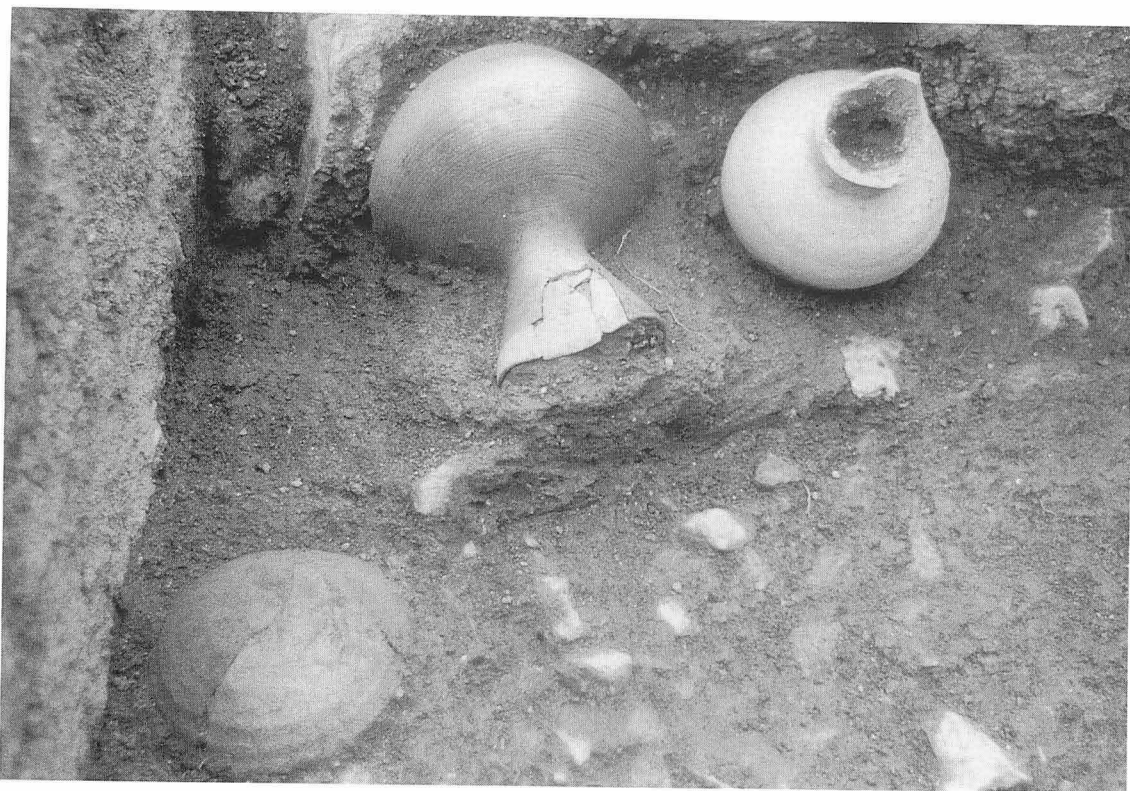
1号墳横穴式石室全景(南西より)



2号墳石室の検出(南より)



2号墳脚付子持広口壺出土状況(北西側壁部)



2号墳遺物出土状況(玄室奥)



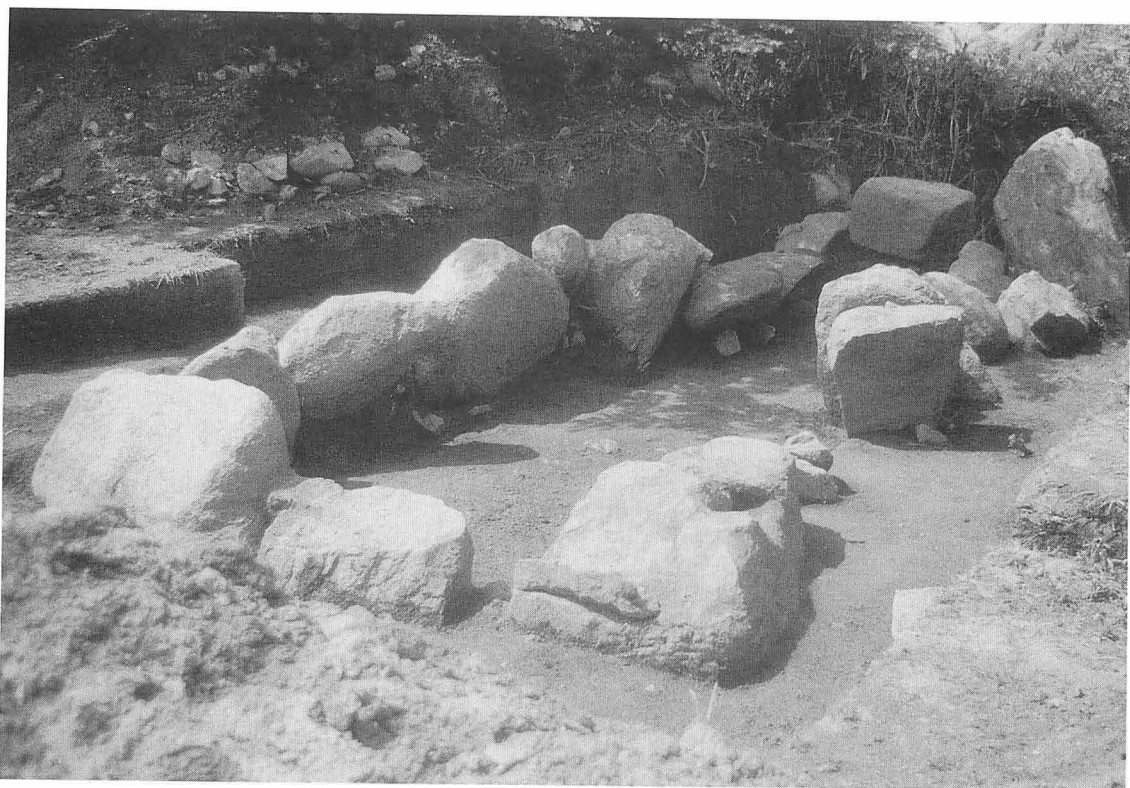
2号墳遺物出土状況(南東側壁部)



2号墳石室床面の検出(南西より)



2号墳玄室床面石敷(羨道部より)



2号墳横穴式石室全景(北より)



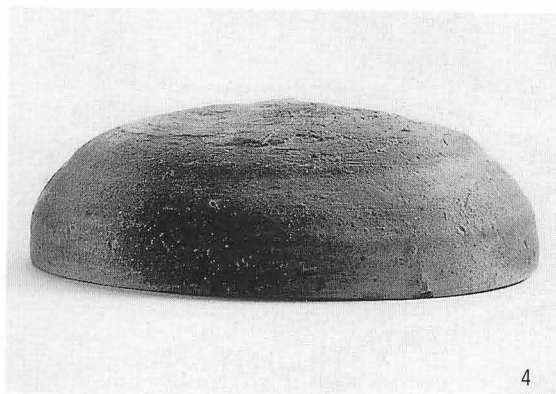
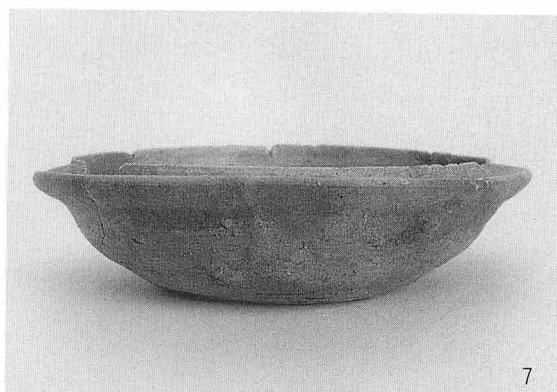
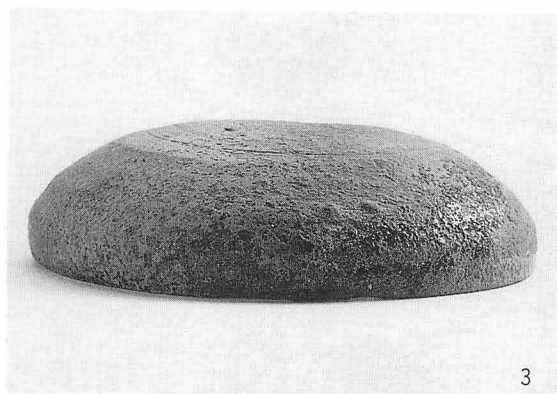
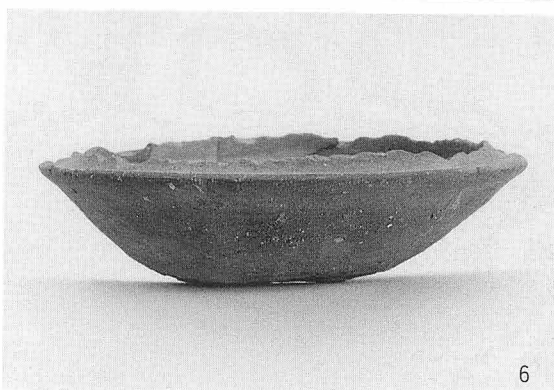
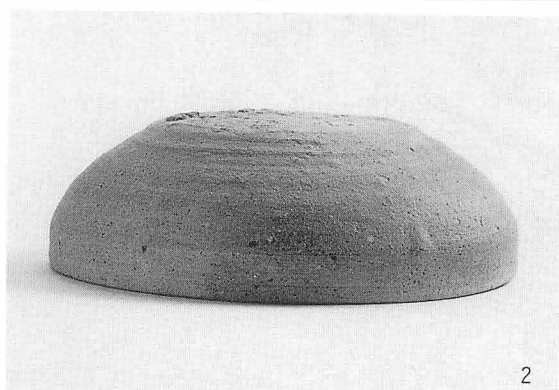
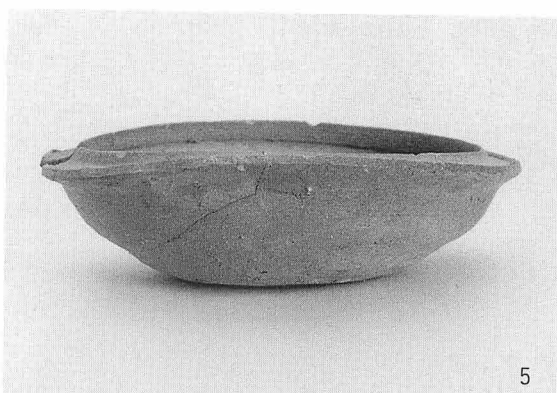
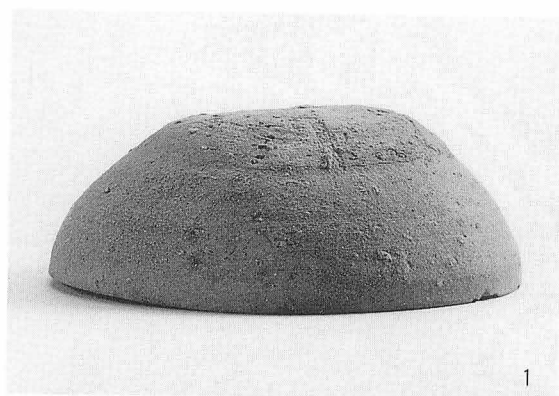
2号墳横穴式石室全景(奥壁側より)



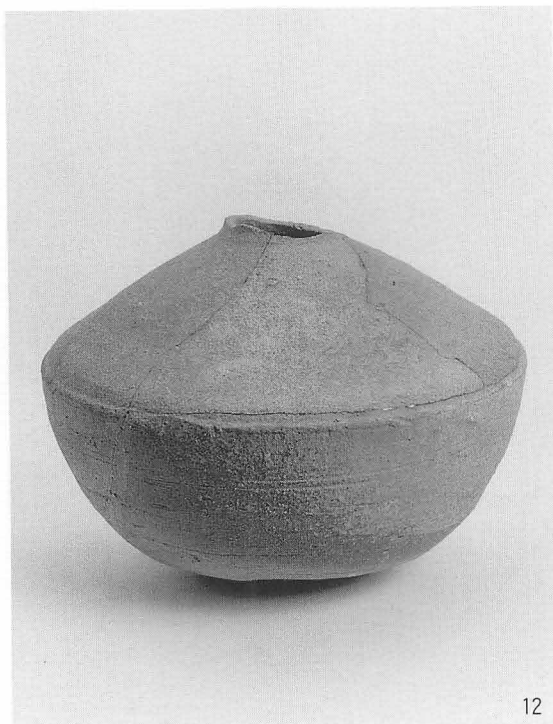
2号墳玄室(羨道部より)

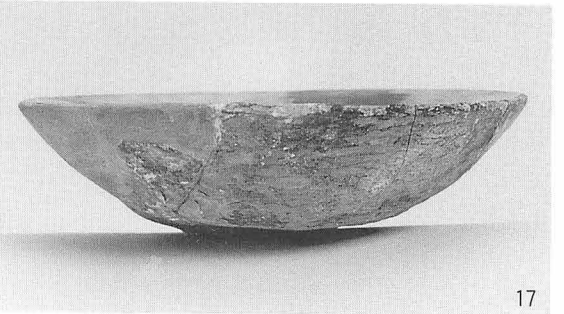
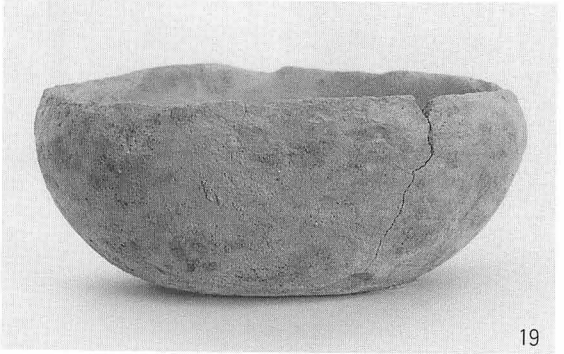
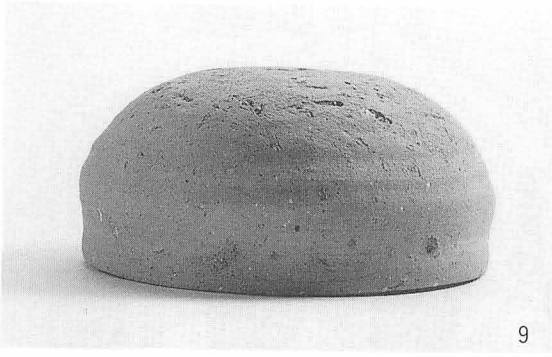


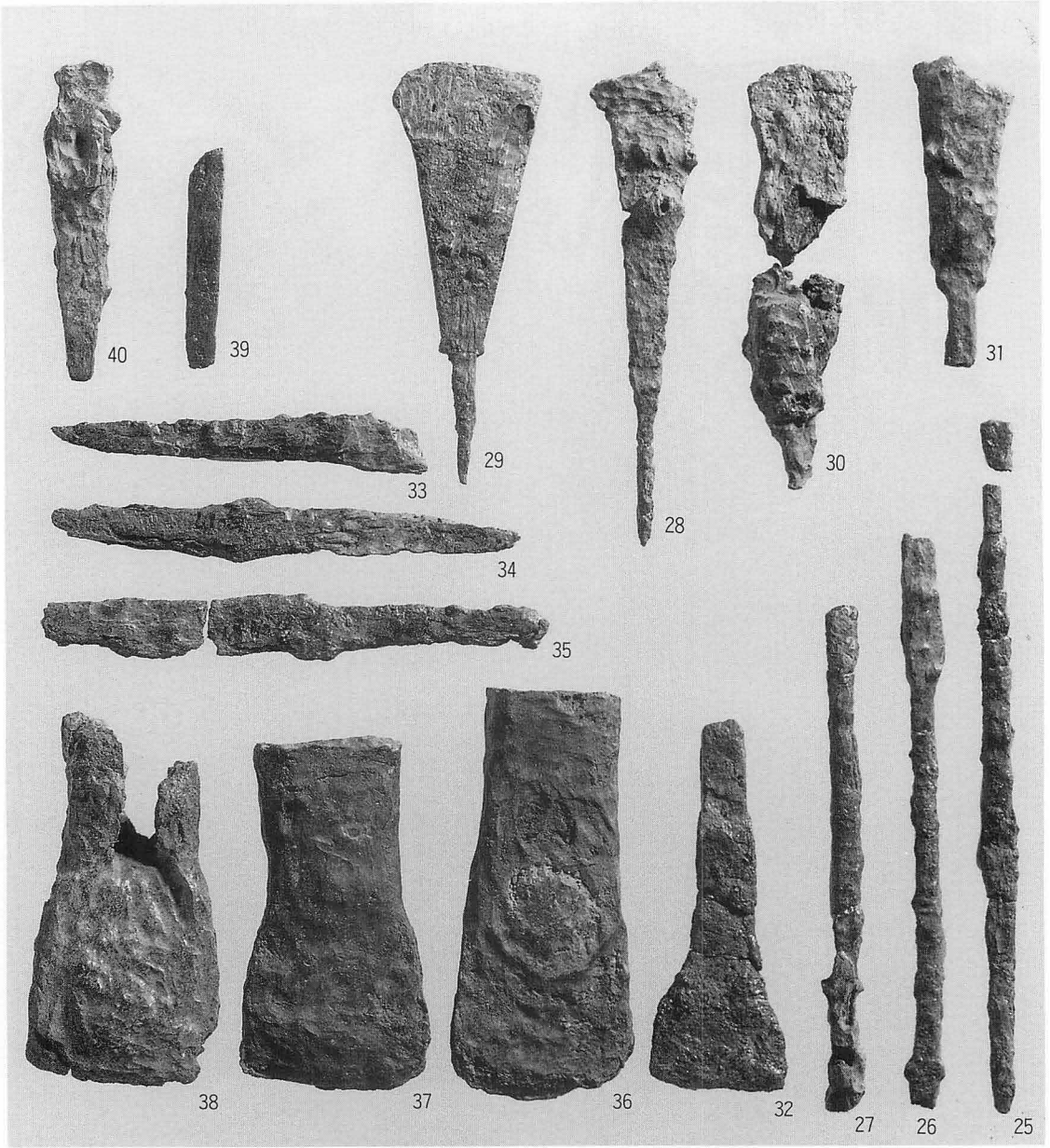
2号墳玄門部(玄室より)



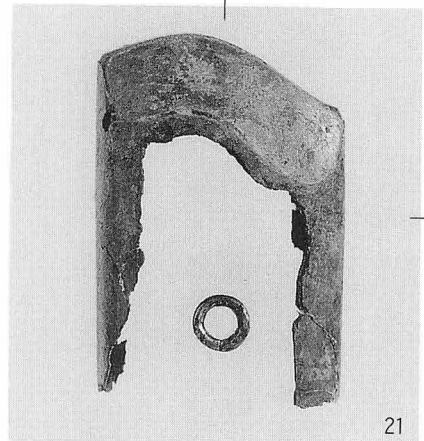
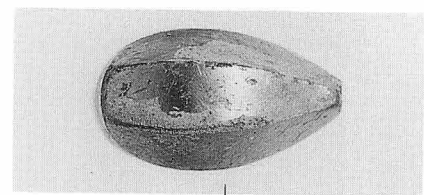
石室出土須恵器



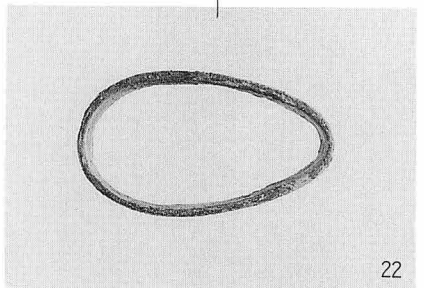
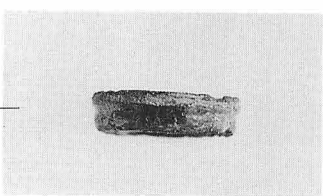
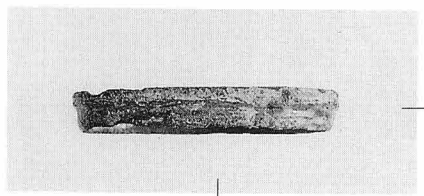
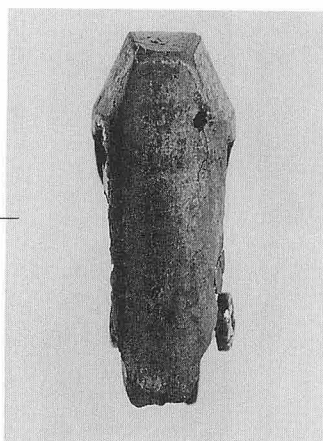




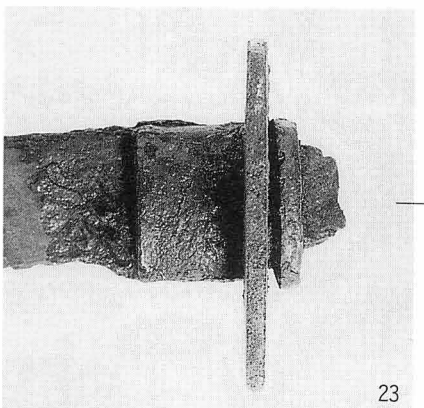
石室出土鉄製品



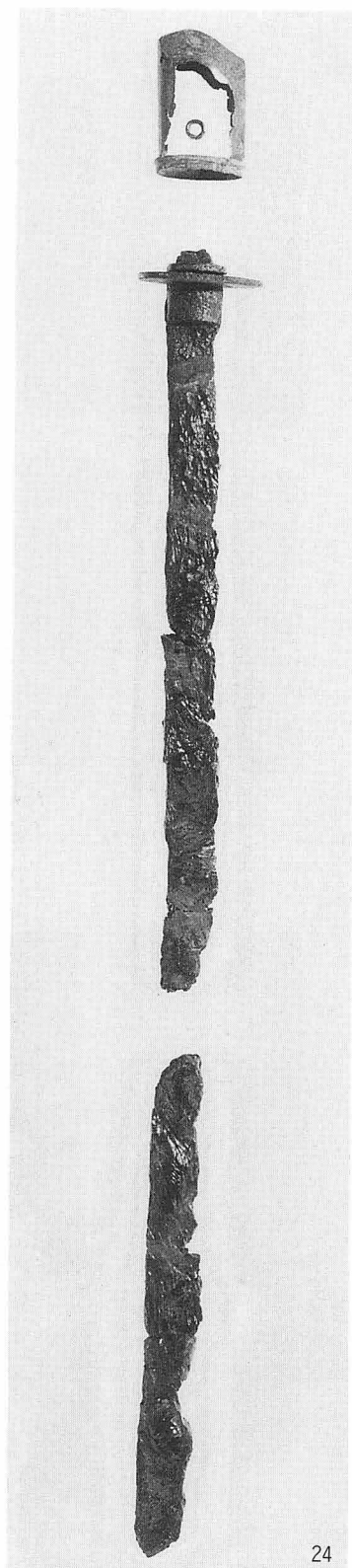
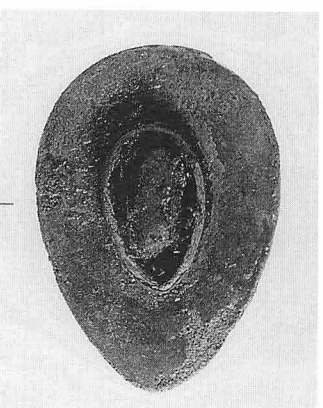
21



22

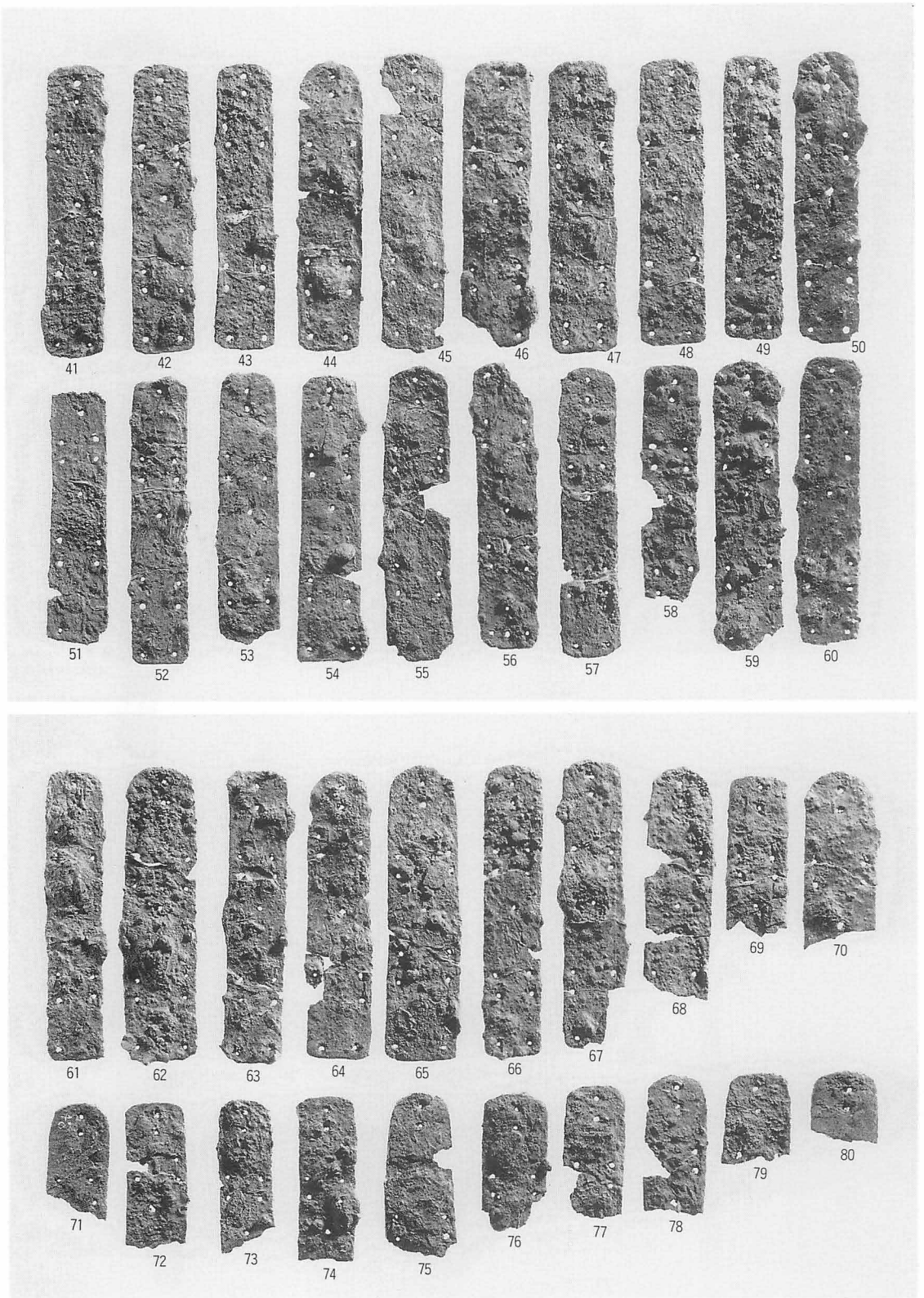


23

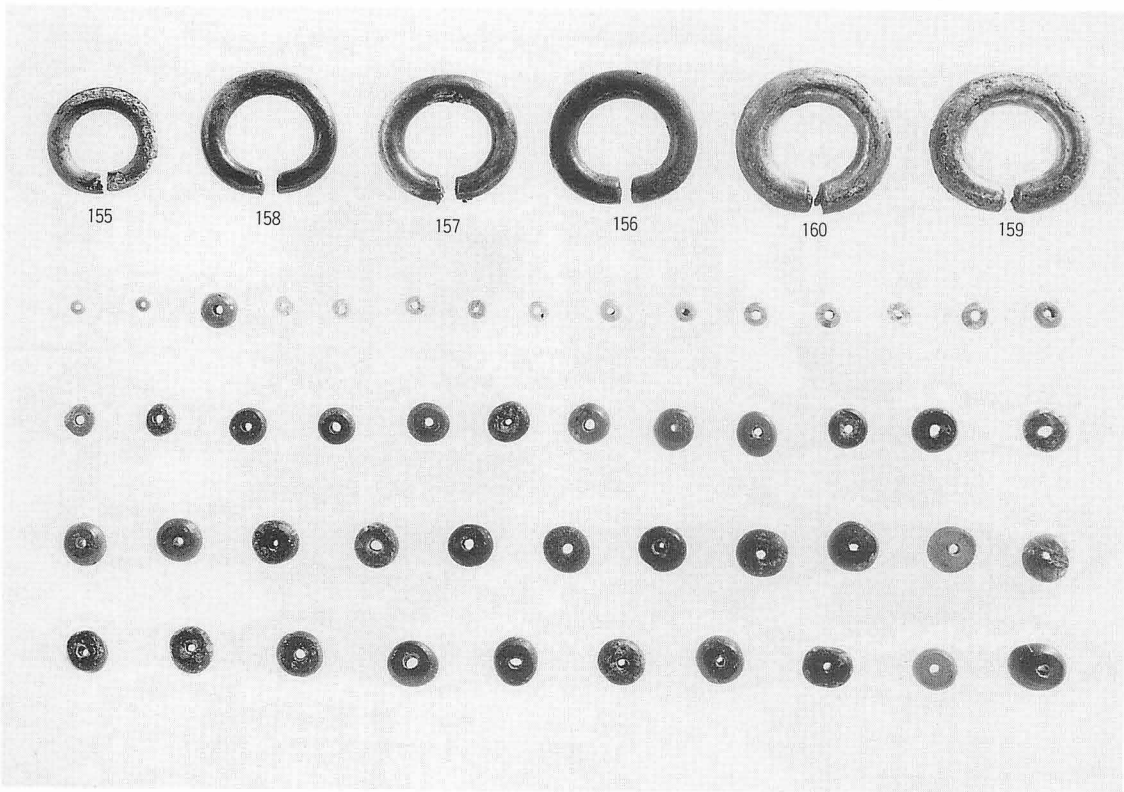
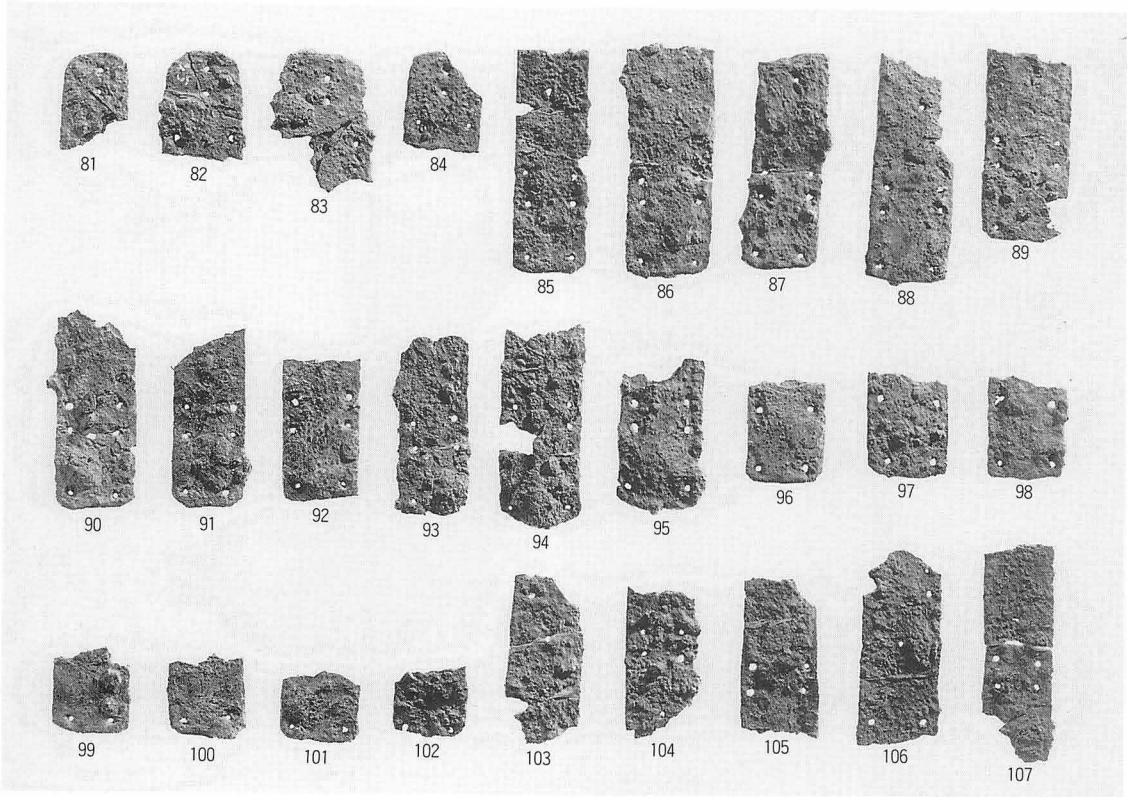


24

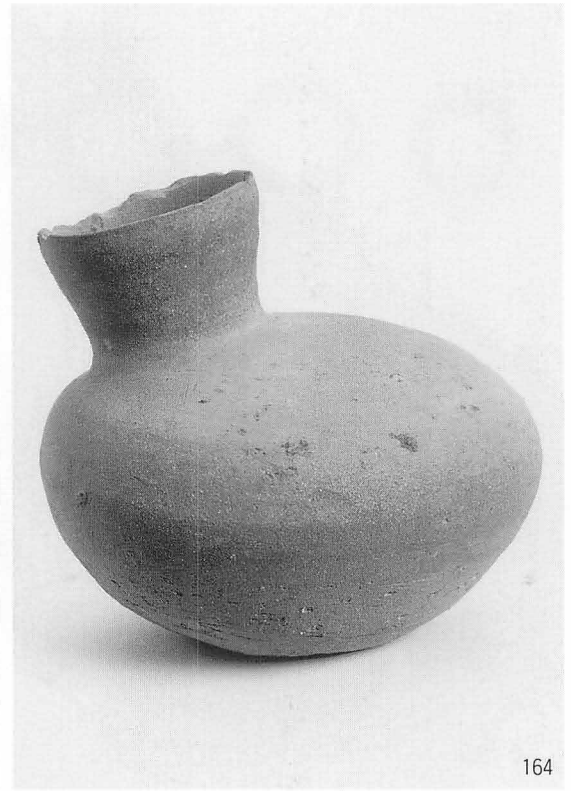
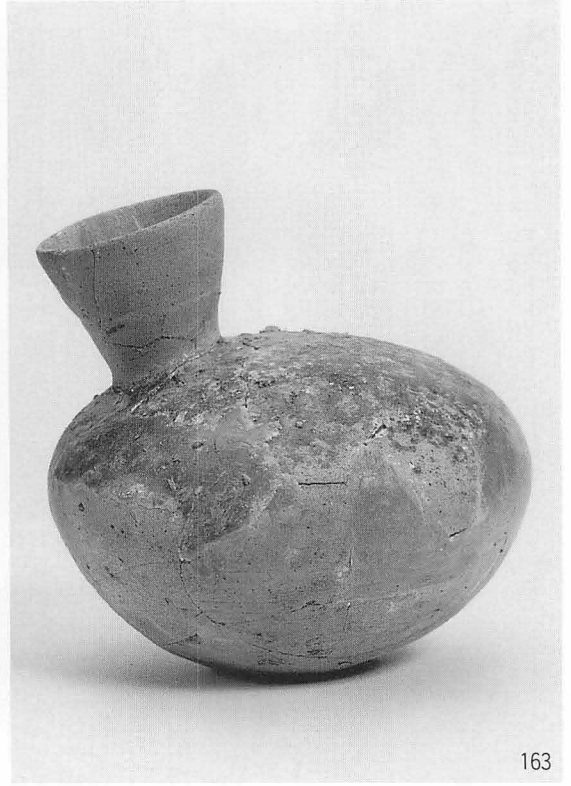
石室出土圭頭大刀

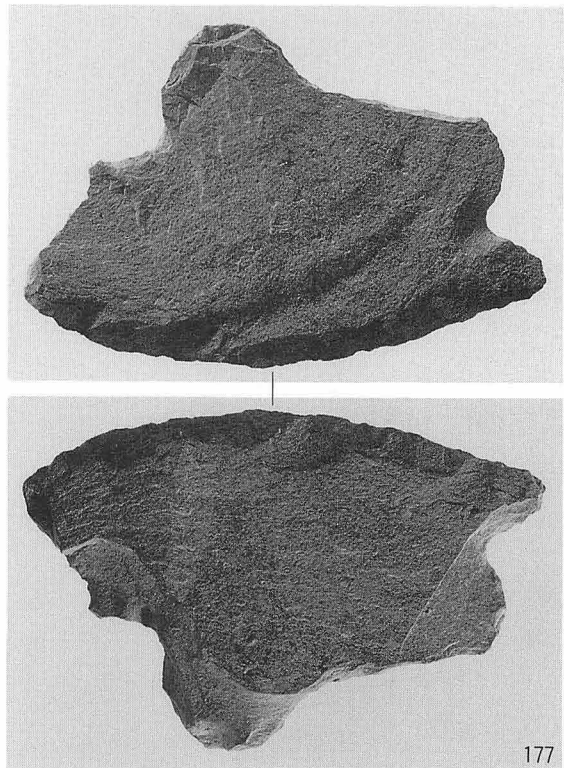
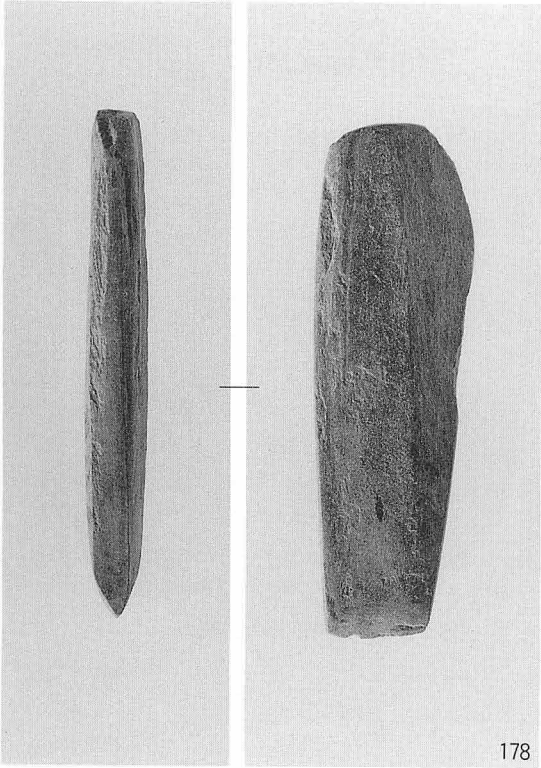
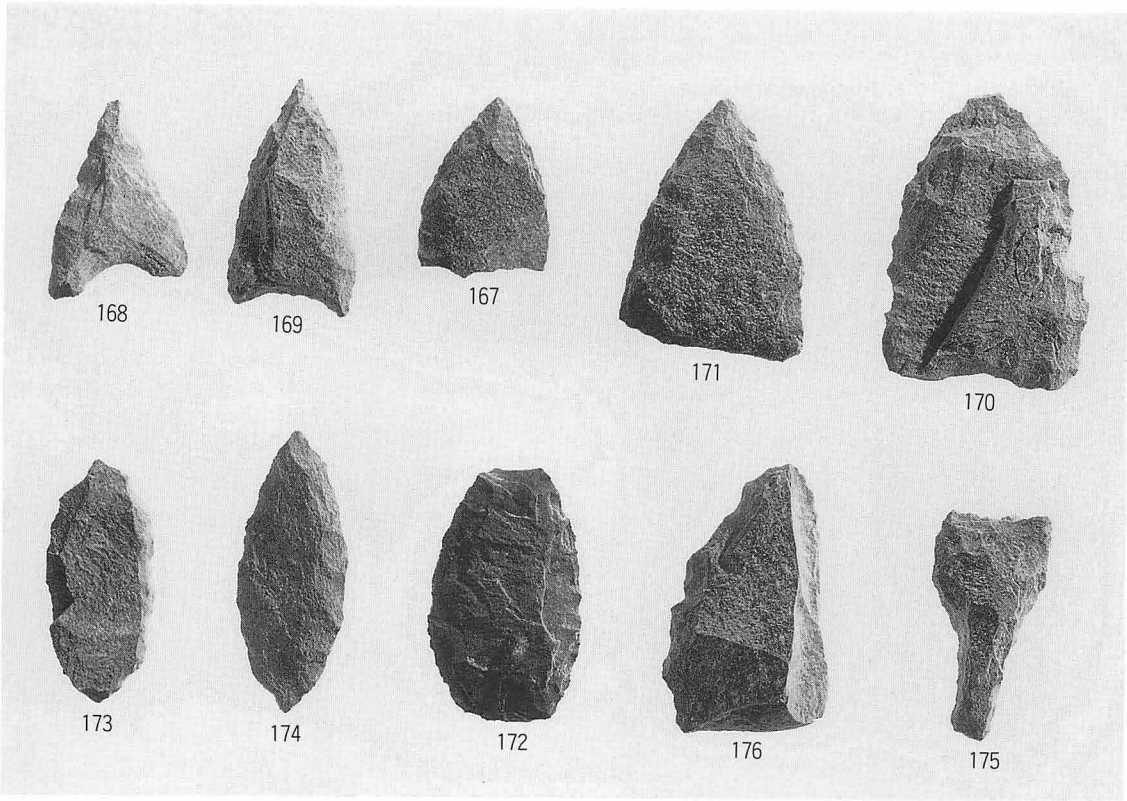


石室出土挂甲小札

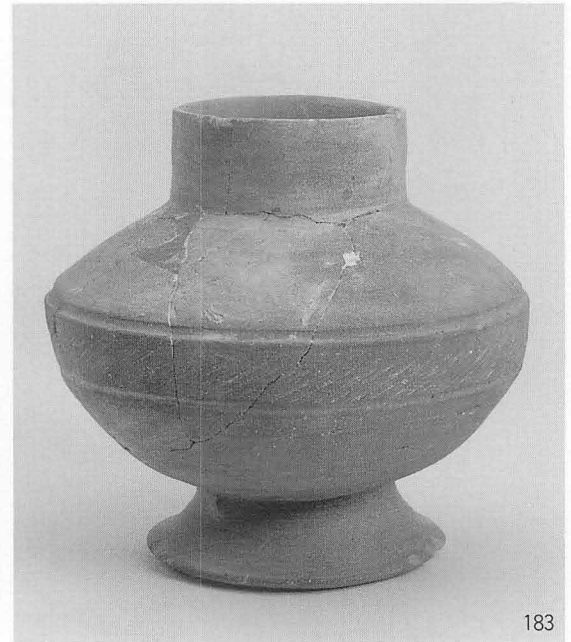
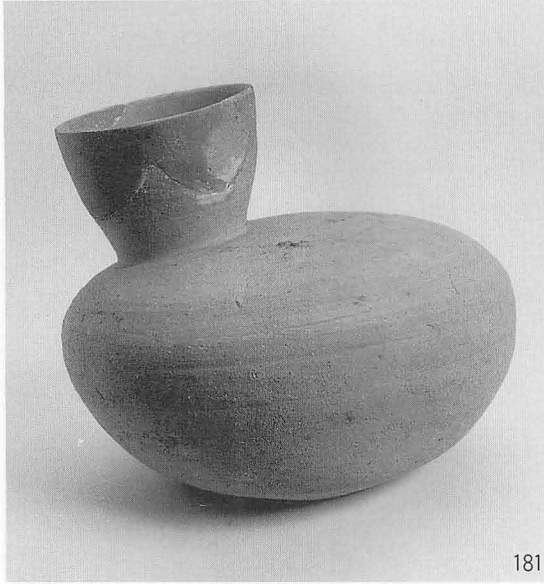
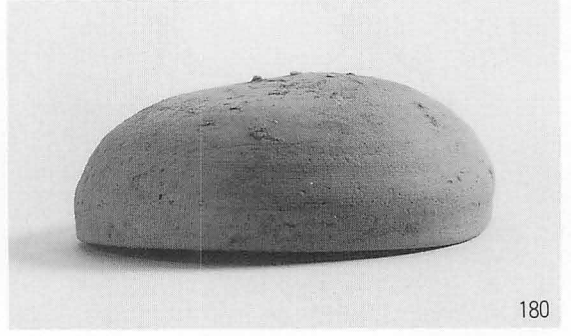


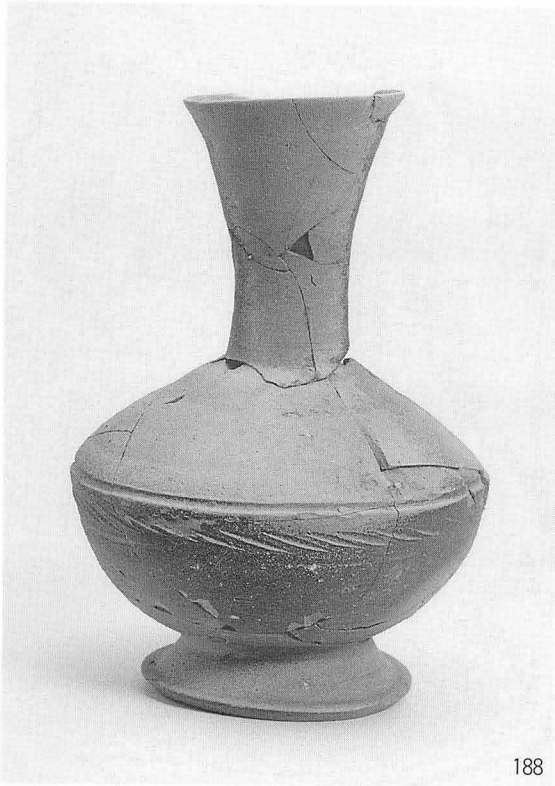
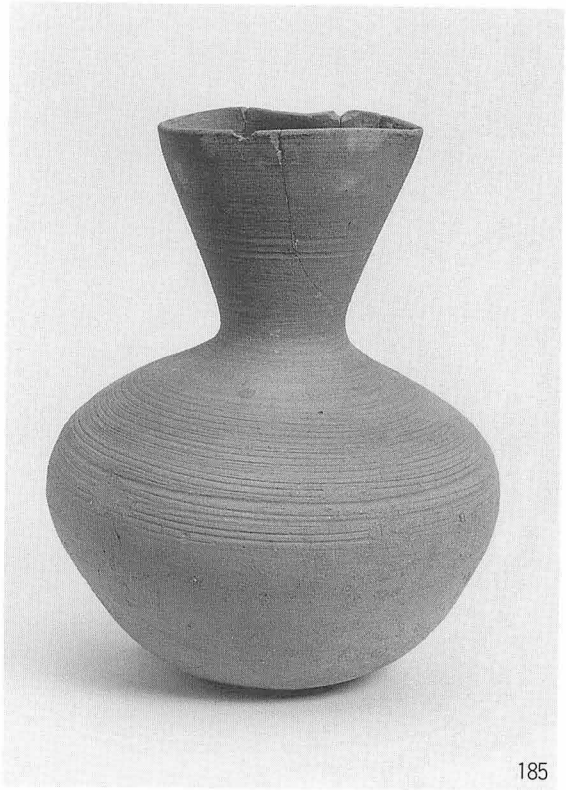
石室出土挂甲小札・装身具



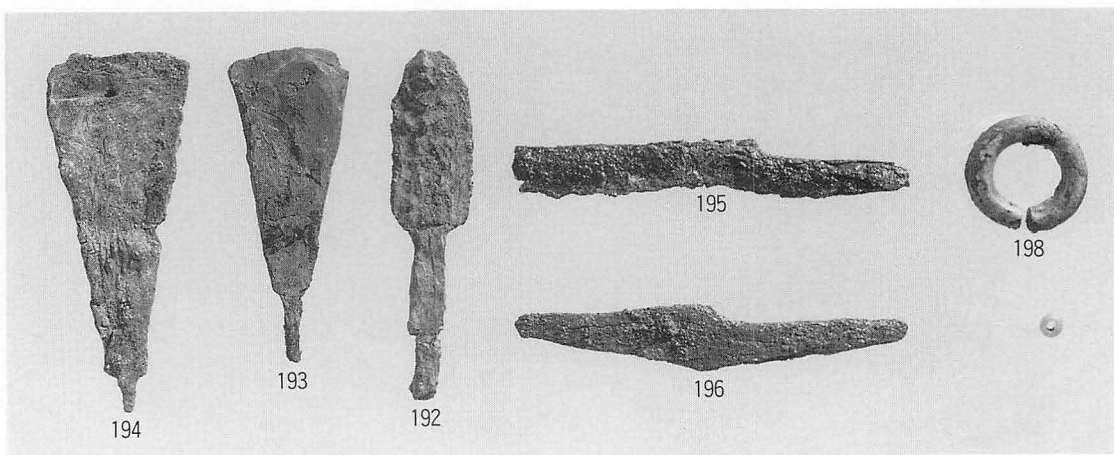
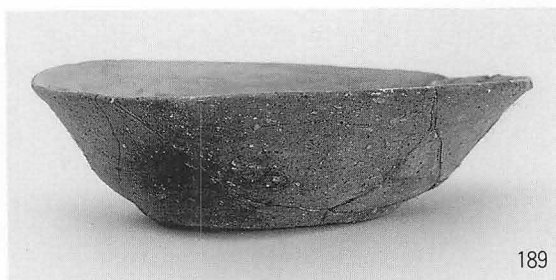
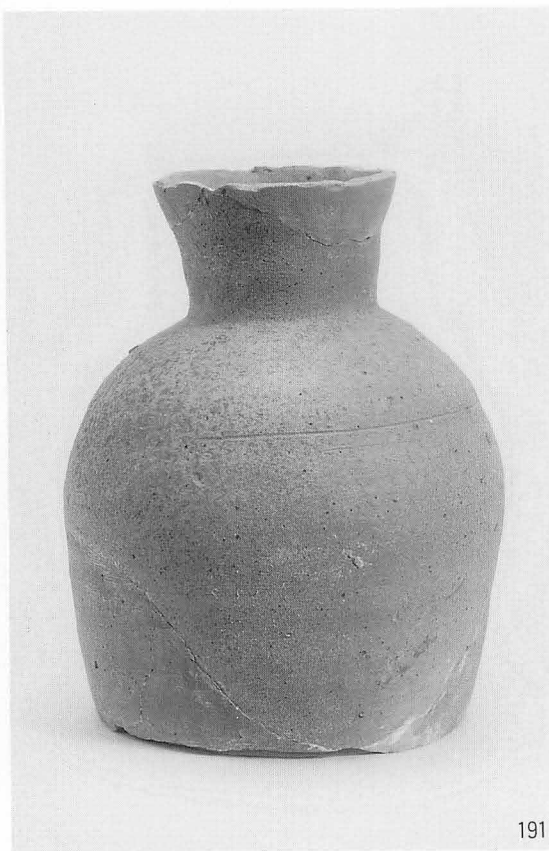


周溝出土石器類





石室出土須恵器



石室出土須恵器・土師器・鉄製品・装身具

松山市文化財調査報告書 第21集

北谷王神ノ木古墳
塚 本 古 墳

平成3年3月31日発行

編集 発行／松山市教育委員会 文化教育課
松山市立埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67-6
TEL (0899) 23 - 6363

印刷／原印刷株式会社
